

(7) <sup>おお</sup>大 <sup>はし</sup>橋 遺 跡

## 目 次

I. 遺跡の位置と環境.....	291
II. 調査の方法と経過.....	294
1. 基本層位.....	297
2. 発見された遺構とその出土遺物.....	297
3. 遺構以外の出土遺物(土師器、須恵器、赤焼土器).....	315
4. その他の出土遺物.....	324
IV. 遺構、遺物に関する考察と問題点.....	332
1. 出土土器の分類と年代について.....	332
2. 土器以外の遺物について.....	345
3. 遺構の年代と構造.....	346
V. ま と め.....	348

## 例 言

本書中の、土器実測図の多くは東北大学大竹成夫、長谷川真、東北学院大学菅野順子三君の作成したものを使用させていただいた。記して謝意を表します。

## 調 査 要 項

所 在 地：宮城県蔵王町円田字大橋

遺 跡 記 号：OH（宮城県遺跡地名表登載番号：05044）

調 査 期 間：昭和45年11月20～12月20日

調 査 面 積：約3,000m<sup>2</sup>

発 掘 面 積：592m<sup>2</sup>

調 査 員：宮城県教育庁社会教育課

志間泰司、藤沼邦彦、白鳥良一

調査参加者：東北大学考古学研究室 西脇俊郎、岩渕康治

宮城教育大学考古学研究室 高橋守克、土岐山武、太田昭夫

## I. 遺跡の位置と環境

大橋遺跡は、刈田郡蔵王町円田字大橋に所在している。国道4号線沿いにある同町宮地区の北方約7.5km、町役場の所在する永野地区の北東約2.0kmの地点である。

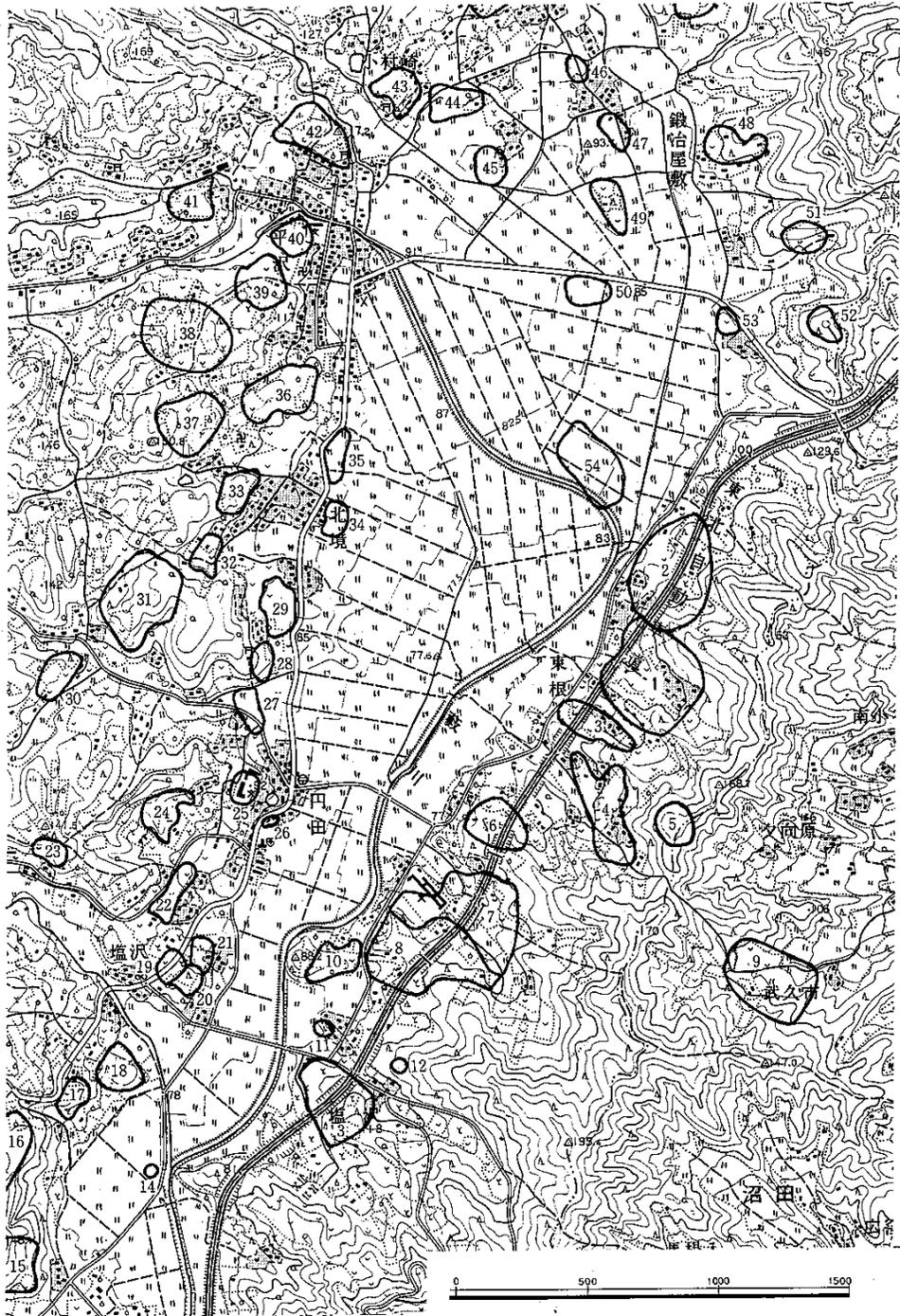
蔵王町の西方には東北地方の脊梁といわれる奥羽山脈が南北に走っている。これは大きく、奥羽山地と総称される面白山地、二井宿山地と奥羽火山帯の1つである蔵王火山帯に区分される。面白山地と二井宿山地は第三紀火成岩類を基盤とし、特に前者は起伏の大きい山容を示し、いたる所に深い峡谷を形成している。蔵王火山帯は上記の山地を一部被覆する形で分布しており、第四紀洪積世火山噴出物からなっている。形成過程の古い方から青麻山、南蔵王、北蔵王の火山山地があるが、特に北蔵王では、熊野岳(標高1841m)、刈田岳(標高1759m)を主峰に周囲に広い火山裾野が形成されている(経済企画庁総合開発局:1972)。

また、上記の山地、および火山帯の東麓には、なだらかな斜面をもつ標高200m前後の、主に第三紀中新世の白沢層からなる高館丘陵がある。この丘陵は東方にのび、さらに三方に枝分かれして各地に山間盆地を形成している。これらの山地、および火山帯と、高館丘陵の派生丘陵に囲まれて扇状地性低地が南北に細長く分布している(広義の白石低地の北半部にあたる)。

本遺跡の所在する円田地区は、この扇状地性低地の北部にあたる。この周辺一帯は出口のしぼまる袋状の地形をなしていることから円田盆地とも称されている。さらに円田盆地について細かにみていくと、盆地中央を松川の支流の藪川が緩やかに蛇行し、南に流れている。この藪川流域は自然堤防が未発達で、特に西岸一帯はグライ化の進んだ低湿地になっている。また土壟も主として火山灰からなる黒ボク土である(経済企画庁総合開発局:1972)。現在はそのほとんどが水田として利用されている。西側の円田、平沢地区付近一帯は、松川流域ほど顕著ではないが河岸段丘の形成がみられ、さらに火山灰の被覆によって比較的傾斜の緩やかな地形をなしている。前述したように東側には高館丘陵から派出する標高200m程の丘陵が南北に走っている。この丘陵斜面は、西側と比較するとやや傾斜の急な地形をなしている。また、丘陵を境に東側には村田盆地が形成されている。

遺跡はこの円田盆地のほぼ中央の東縁にあり、高館丘陵から派生する丘陵の西側斜面に立地している。遺跡の標高は90~120mで、前方の藪川付近との比高差は12~40mである。付近は比較的起伏のおだやかな谷状地形をなしている。遺跡の範囲はこの斜面一帯で、面積は約3万m<sup>2</sup>と広い。調査区は遺跡の西端に位置し、斜面の傾斜が次第に緩やかに移行するあたりにある。これまで本遺跡からは、弥生土器、土師器、石製模造品などが発見されている(白石市:1976)。

蔵王町には現在のところ170ほどの遺跡が確認されており、そのほぼ半数が円田盆地に分布している。ここでは蔵王町でも円田盆地を中心に本遺跡周辺の遺跡を紹介してみたい。盆地内



(国土地理院発行1/2万5千「村田」を複製)

第1図 大橋遺跡と周辺の遺跡

第1表 遺跡地名表

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	大橋遺跡	丘陵斜面	集落跡	縄文、弥生、古墳・奈良・平安	28	白山遺跡	丘陵頂	包含地	奈良・平安
2	赤鬼上遺跡	〃	〃	弥生、平安	29	本宿前遺跡	台地	〃	奈良・平安
3	屋木戸内遺跡	〃	包含地	弥生、古墳	30	鳥山遺跡	丘陵斜面	〃	縄文、奈良・平安
4	立目場遺跡	〃	〃	弥生、古墳	31	花楯館跡	丘陵	城館	中世
5	愛宕山遺跡	〃	〃	弥生	32	沢遺跡	丘陵中腹	包含地	奈良・平安
6	中沢遺跡	〃	〃	弥生、古墳	33	北境遺跡	丘陵遺跡	〃	弥生、奈良・平安
7	伊原沢下遺跡	〃	〃	古墳	34	中組遺跡	台地	〃	奈良・平安
8	堀沢北遺跡	〃	集落跡	古墳	35	堂の人遺跡	〃	〃	弥生
9	武久市遺跡	〃	包含地	縄文、弥生	36	小高遺跡	丘陵麓	〃	奈良・平安
10	台遺跡	分離丘陵	包含地	古墳、奈良・平安	37	大垣内遺跡	丘陵斜面	〃	弥生
11	西船古墳	〃	円墳	古墳	38	深訪館跡	丘陵中腹	城館	中世
12	中屋敷古墳	丘陵中腹	〃	古墳	39	深訪館前遺跡	丘陵麓	包含地	弥生、奈良・平安
13	大山遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、弥生、古墳	40	平沢遺跡	台地	〃	奈良・平安
14	鈴付神社古墳	谷底平野	円墳	古墳	41	丈六遺跡	丘陵斜面	〃	奈良・平安
15	矢付館跡	丘陵	城館	中世	42	平沢館跡	台地	城館	中世
16	下永野遺跡	丘陵斜面	包含地	弥生	43	熊野社前遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
17	蟹沢遺跡	〃	〃	弥生	44	十郎田遺跡	台地	〃	奈良・平安
18	天王古墳群	台地	円墳	古墳	45	西小屋館跡	〃	城館	中世
19	戸の内遺跡	〃	包含地	奈良・平安	46	原遺跡	〃	包含地	奈良・平安
20	末勝堂古墳	〃	方墳	古墳	47	六角上遺跡	〃	〃	奈良・平安
21	末勝堂遺跡	〃	包含地	弥生、奈良・平安	48	鍛冶屋敷遺跡	丘陵麓	〃	縄文、奈良・平安
22	土ヶ市遺跡	丘陵斜面	〃	弥生、奈良・平安	49	六角下遺跡	台地	〃	弥生、奈良・平安
23	見籠遺跡	〃	〃	〃	50	新城遺跡	〃	包含地・城館	奈良・平安・中世
24	八幡山古墳群	〃	円墳・方墳	古墳	51	上葉ノ木沢遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
25	寺坂遺跡	丘陵中腹	包含地	奈良・平安	52	北割山遺跡	丘陵頂	〃	縄文、弥生
26	堀ノ内遺跡	丘陵麓	〃	縄文、弥生、奈良・平安	53	中葉ノ木沢遺跡	丘陵末端	包含地	縄文、弥生、奈良・平安
27	渚水遺跡	〃	〃	弥生、奈良・平安	54	都遺跡	台地	〃	縄文、弥生、古墳、奈良・平安

の遺跡は、そのほとんどが盆地周縁に分布し、丘陵斜面、台地に立地している。

旧石器時代の遺跡は盆地内にはみられないが、町内では松川西岸の持長地遺跡においてナイフ形石器、鉄砲町付近で彫刻刀形石器が発見されている。これらは後期旧石器に属するものと考えられている(宮教委：1970、白石市：1979)。

縄文時代の遺跡はいくつかみられるが、それほど多くはない。町内ではむしろ松川流域に多く分布している。その一つの二屋敷遺跡からは中期末から後期初頭にかけての堅穴住居跡などの遺構が発見されている。(林、藤沼：1971)。

弥生時代中期の前半の遺跡は盆地内にはほとんどみられず、むしろ縄文時代の遺跡と同様、松川流域に分布している。その中には縄文終末期から引き続いている遺跡もみられる(白石市：1979)。しかし中期後半になると、これまでの遺跡分布のあり方が逆転し、また数の上でも盆地内に多くの分布がみられるようになる。特に、西裏遺跡出土の長頸壺を標式として設定された円田式土器は、盆地周縁を中心に面としての広がりをもつほど多く分布している。その遺跡には、本遺跡周辺では赤鬼上遺跡、大山遺跡、屋木戸内遺跡などがある。なお、大橋遺跡から採集された弥生土器の中に粘痕のみとめられるものがある。

古墳時代の集落遺跡には、前記の弥生時代の遺跡と重複するものが多い。本遺跡周辺では大

山遺跡、伊原沢下遺跡、塩沢北遺跡などがある。大山遺跡からは「塩釜式」期の埋甕が、塩沢北遺跡からは「南小泉式」期の溝状遺構と、「栗凶式」期の竪穴住居跡が3軒発見されている。

古墳には、天王古墳、宋膳堂古墳、銚付神社古墳などがある。天王古墳は径20数mの円墳、宋膳堂古墳は1辺約30mの方墳で、ともに埴輪を伴っている。奈良・平安時代の遺跡には、赤鬼上遺跡や東山遺跡などがあり、前者からは1軒、後者からは1軒の竪穴住居跡が発見されている。また、都遺跡からは布目瓦が出土している。

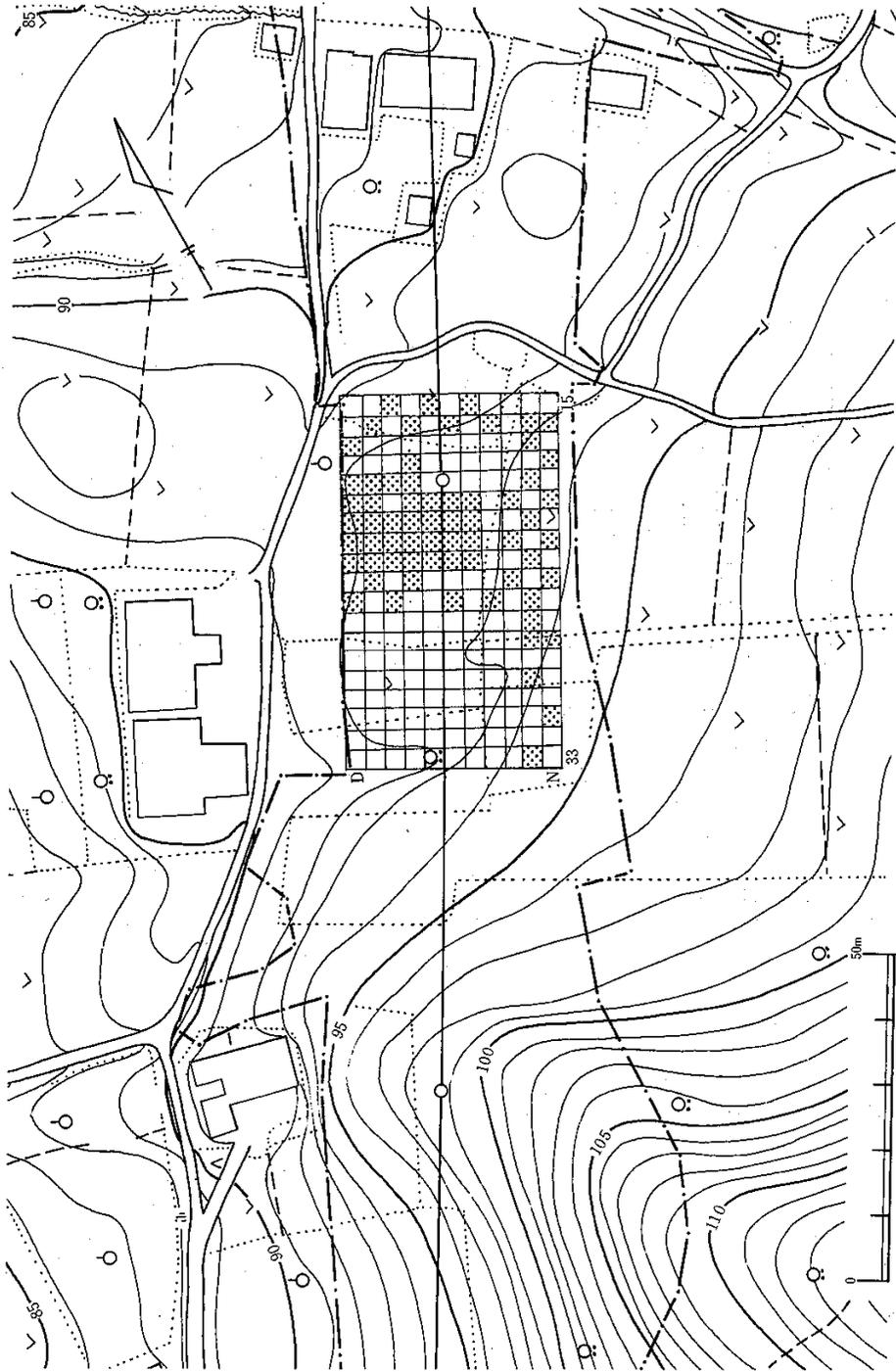
## II. 調査の方法と経過

昭和43年に遺跡の規模、性格などを把握するために試掘調査を行った(宮教委：1968)。その結果、竪穴住居跡と考えられる遺構の存在が確認され、出土遺物としては弥生土器、土師器などが発見された。本調査はこれらの成果をふまえて行われたものである。

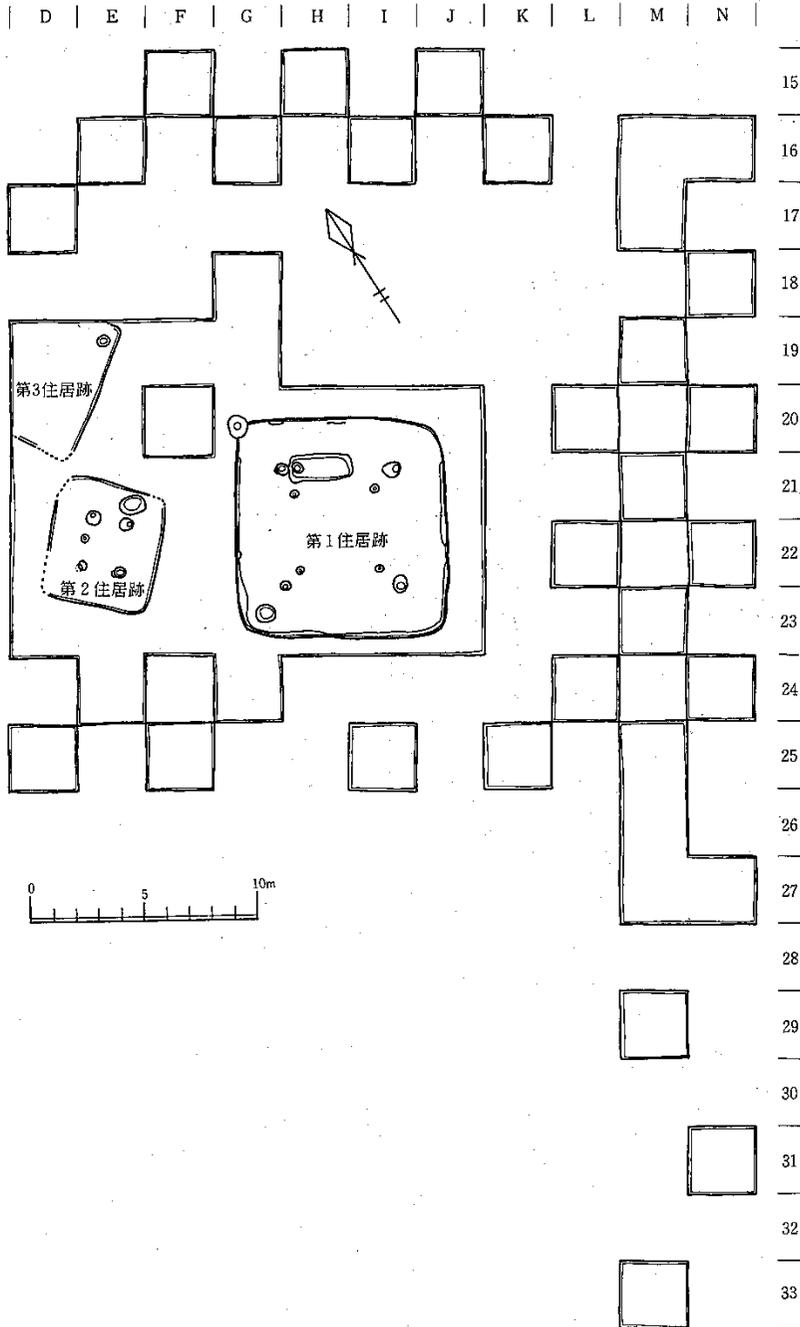
東北自動車道の路線敷にかかる部分は、前述したように遺跡の西端にあたり、その面積は約3000m<sup>2</sup>である。その中で最も平坦な地区に33m×57mの調査区域を設定し、そのうち592m<sup>2</sup>を発掘調査した。グリッドは、路線敷の中心線を基準とし、それに直交する線を設け、3mごとに区切った。そして、中心線はアラビア数字、直交する線はアルファベットで表わすグリッド名を付した。

調査は11月20日から開始し、12月20日に完了した。その結果、遺構としては竪穴住居跡が3軒発見された。遺物も主として竪穴住居跡の堆積土や床面から出土したものである。住居跡は発見した順に、第1、第2、第3住居跡とした。

出土土器の取り扱いでは、住居跡床面出土としたものの中には、わずかに床面から浮いて出土したものがある。しかし現時点ではその区別が不可能なので一括して床面出土とした。また、住居跡床面出土土器と堆積土出土土器が接合した土器については床面出土とした。住居跡堆積土出土の土器は層位ごとに取り上げられてはいるが、堆積土の層位と照合ができないので、一括して堆積土出土とした。



第2図 周辺の地形とグリッド配置図



第3図 遺構配置図

### Ⅲ. 発見された遺構と遺物

#### 1. 基本層位

表土から地山までの堆積層には基本的に4枚の層がみとめられた。第Ⅰ層は茶色っぽい黒色土でボソボソして柔らかい。現在の畑地耕作土である。第Ⅲ層はⅠ層に比較して黒色味の強い黒色土で柔かく、腐植土とも考えられる。第Ⅲ層は黄土色の強い黒色土で部分的に黒色と黄色がまだら状になっている。第Ⅳ層は茶褐色の土で地山漸移層である。Ⅴ層は地山の黄色ローム層である。層の分布では、第Ⅰ、Ⅱ層は全域にわたって分布するが、第Ⅲ層は東側の斜面上方に行くにつれて、次第にみられなくなる。遺物は第Ⅰ、Ⅱ層から出土し、ともに弥生時代、古墳時代、平安時代のものが混在しており、その大半は古墳時代のものであった。第Ⅲ、Ⅳ層には遺物は含まれていない。堅穴住居跡の確認面は、第Ⅳ層上面か第Ⅴ層上面である。したがって本来の住居跡掘り込み面は第Ⅲ層上面であった可能性が強い。

#### 2. 発見された遺構とその出土遺物

遺構には3軒の堅穴住居跡がある。その他、土壇、溝などが発見されているが、明らかに後世の遺構とみとめられるので、ここでは省略する。

##### 第1住居跡と出土遺物

〔確認面〕 地山漸移層上面で確認された。

〔重複〕 みとめられない。

〔平面形・規模〕 北西隅は後世のピットにより攪乱されているが、平面形はほぼ正方形である。規模は、長軸(南北)約9.8m、短軸(東西)9.4mである。残存する隅はやや丸みをもっている。

〔堆積土〕 大きく3層に分けられる。上から、ロームを含む褐色土層、焼土層、黒色土とロームの混じる層である。特に焼土層は、住居跡周縁から中央に向かって傾斜した層となっており、本住居跡の火災などによって生じたものでなく、住居が廃棄されたのち投げこまれたものと考えられる。

〔壁〕 東壁では地山を、西壁では地山漸移層と地山を壁としている。比較的保存の良い東壁では、直に近い角度で立ち上がっている。残存する壁の高さは東壁で30cm、西壁で20cmである。

〔床面〕 床面は東側がいくらか高いが、その他はほぼ平坦である。住居構築時には床面より30cm程深く掘り下げを行い(本書では住居掘り方と呼ぶ)、ロームを含む黒色土を埋め、その上はほぼ全面に、3～4cm程の主にロームからなる層を貼り、床面としている。住居掘り方の底面は凹凸がみだり。

〔周溝〕西・南・東壁沿に、一部とぎれるが、周溝がみとめられた。北壁沿いは一部しか確認できなかった。西壁の中央で、底面幅14cm、床面からの深さは10cmである。

〔柱穴〕床面上から8個のピットが検出された。それらのうちP1～P4に柱痕跡がみとめられた。これらは、大きさ、深さ、配置関係などから支柱穴と考えられる。柱穴掘り方堆積土は住居掘り方堆積土と同一のものであり、これらは同時に埋められたものと考えられる。P1～P4のピットに添うような形で、いく分内側にP5～P8がある。これらは柱痕跡は検出されなかったが、深さ、配置関係などから柱穴と考えられる。また、支柱穴と考えられたピットと対角線上に並ぶことから、支柱穴の添柱であった可能性が強いが、あるいは建換えの際の柱穴であった可能性もある。床面下からは2個のピット(P9、10)が検出された。こらは貼床以前の柱穴であった可能性もある。しかし床面下については部分的な調査のため、はっきりしたことはいえない。

〔カマド・炉〕みとめられない。

〔貯蔵穴状ピット〕南西隅から、平面が円形で径約70cm、深さ約50cmのピットが検出された。内部や周辺から土師器の坏、高坏などが出土しており、貯蔵穴の可能性が高い。

〔出土遺物〕本住居跡に伴うと考えられる遺物には床面、貯蔵穴状ピット出土の土器がある。また、柱穴と考えられるピット出土の遺物についても、本住居跡の時期に近接するものとして扱うことが可能である。

その他に、住居跡堆積土出土の遺物がある。これらの多くは床面に近い位置から出土した。ここでは図示できたものを中心に記述し、図示の不可能な土器については第5、6表に示した。また、本住居跡には係わりのない縄文土器や弥生土器が堆積土から出土しているが、一括して後述することにした。以下の第2、3住居跡についても同様である。

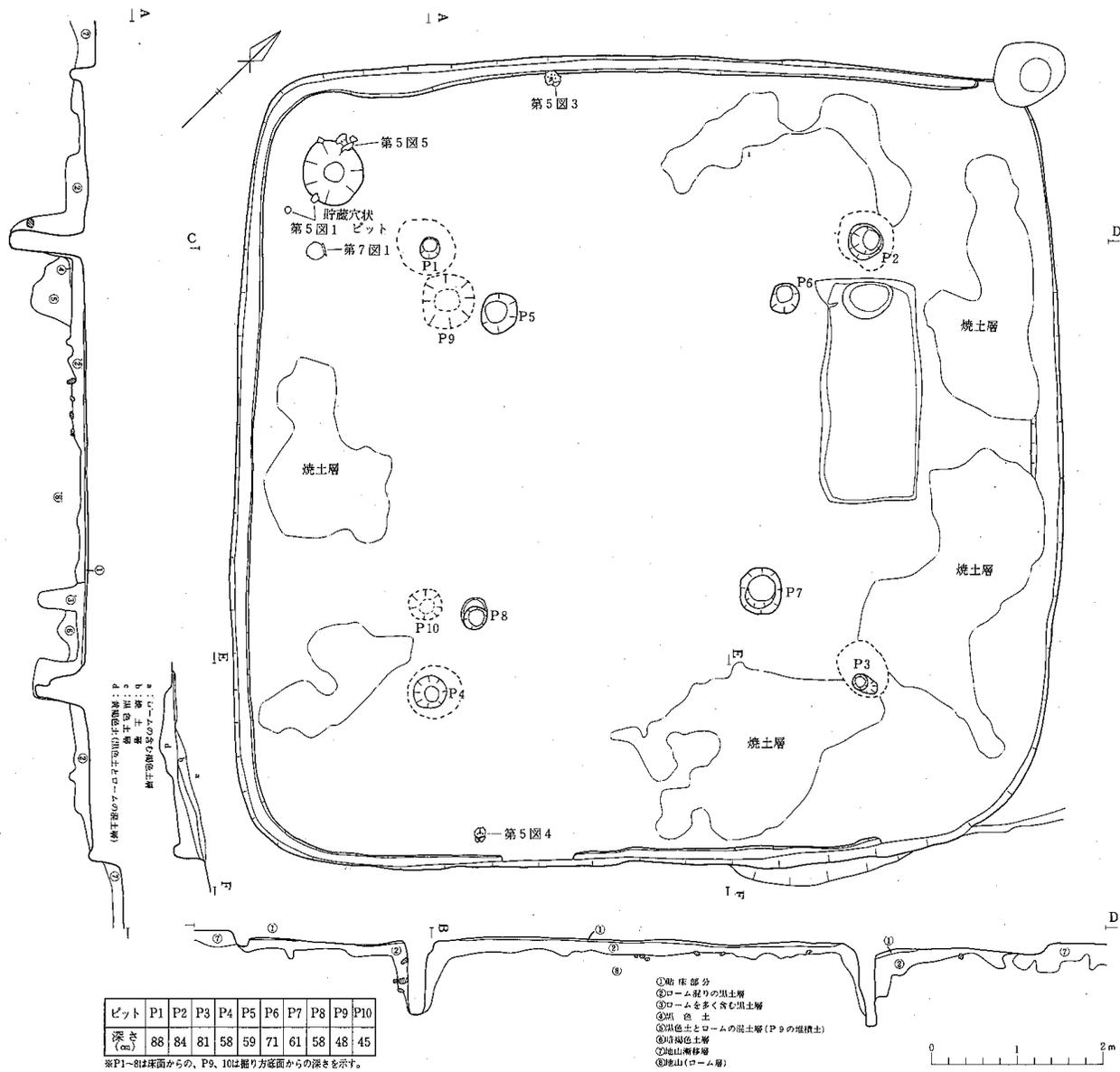
〔床面、および貯蔵穴状ピット出土土器〕

出土土器には、土師器の坏、高坏、器台、壺、甕がある。

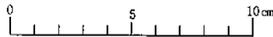
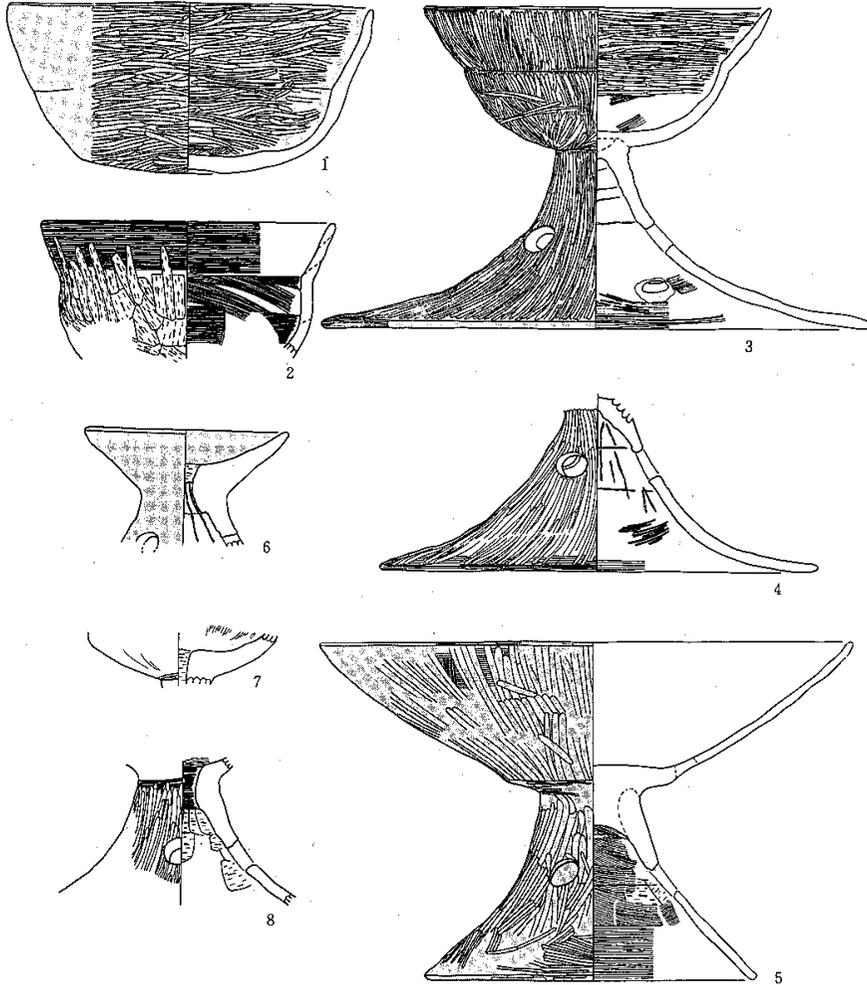
### 土師器

**坏**(第5図1・2) 1は上げ底である。底部から丸みをもち、体部で軽く屈曲し、口縁部がわずかに内彎して立ち上がる。内面に稜がみとめられる。2は体部が丸みをもち、口縁部で屈曲し、外傾して立ち上がるものである。

**高坏**(第5図3～5) 3は坏部が体部で屈曲し、口縁部が外傾するもので、前記の坏の形態によく似ている。脚部は裾が大きく外方に開く特徴をもっている。脚部のほぼ中央に、二段に3個ずつ計6個の孔が等間隔にあげられている。4は脚部のみであるが、3と同じように裾が大きく外方に開いている。脚部のやや上方に孔が3個あけられている。5は、坏部は底部から体部にかけて屈曲し、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもので、脚部は3、4に



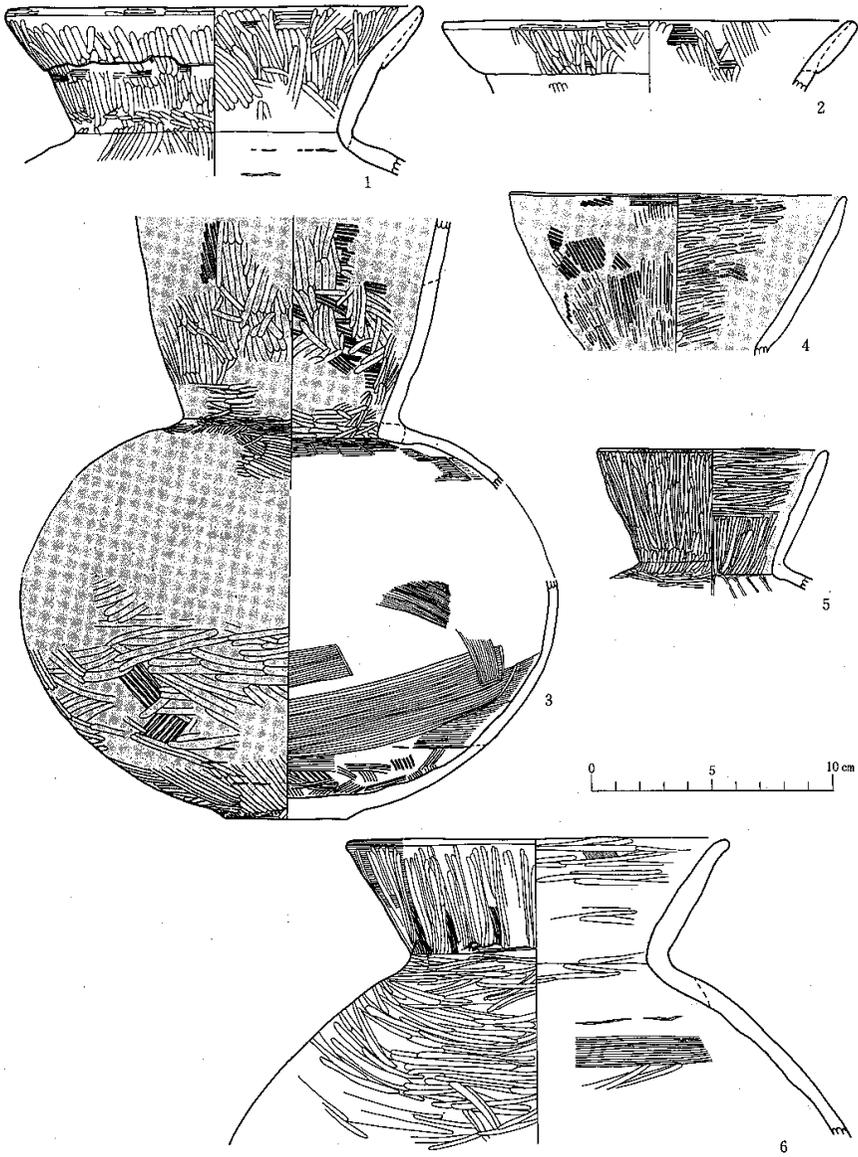
第4図 第1住居跡



観 察 表

番号	器種	部		外 面	内 面	色		注 意 (cm)			遺 存 状 態	備 考	分 類	
		外 面	内 面			外 面	内 面	器 底	口 径	器 深				
1	杯	口～体	底	ヘラミガキ ヘラケズリ	口～底	ヘラミガキ	丹 塗	丹 塗	14.9	2.9	7.1	完 形		I-A1a
2	〃	口～横ナデ	体	ヘラケズリ	口～刷毛目	横ナデ	丹 塗	丹 塗			(12.0)	口～体 体～底		I-A3
3	高杯	杯部	脚部	刷毛目 横ナデ	杯部	ヘラミガキ 脚部	丹 塗	杯部上半 のみ丹塗	13.4	14.2	22.0	杯部～体 脚部～底	脚部に6孔あり	A
4	〃	脚部	杯部	横ナデ	脚部	シボリ目	刷毛目	横ナデ	黄褐色	黄褐色	(18.1)		脚部に3孔あり	
5	〃	杯部	脚部	刷毛目	杯部	ヘラミガキ 脚部	丹 塗	丹 塗	14.0	21.9	13.7	ほぼ完形	脚部に3孔あり	B
6	器台	受部	脚部	ヘラミガキ	受部	ヘラミガキ	丹 塗	丹 塗	(8.3)			受部上～体 受部下～脚部	脚部に3孔あり	
7	〃	受部	脚部	ヘラミガキ	受部	ヘラミガキ	黄褐色	暗黄褐色					受部上～体 受部下～脚部	
8	〃	脚部	杯部	横ナデ	受部	ヘラミガキ	明茶褐色	茶褐色				脚部上～体	脚部に1孔遺存	

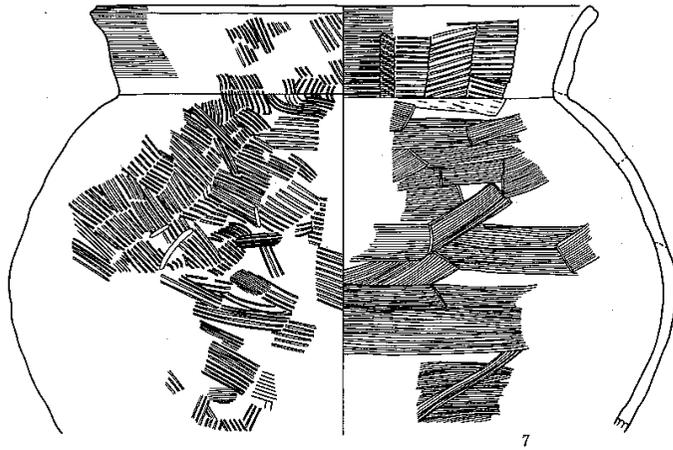
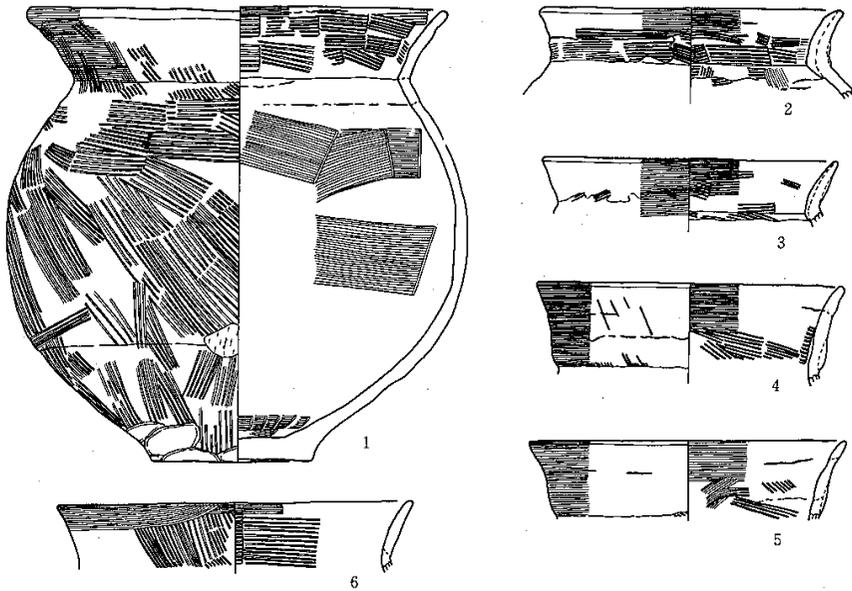
第 5 図 第 1 住居跡出土遺物(床面、貯蔵穴状ピット内)



観察表

番号	器種	文		色		法	口径	高さ	底径	底厚	遺存状態	備考	分類
		外面	内面	外面	内面								
1	甕	口～体上→刷毛目→ヘラミガキ	口→刷毛目→ヘラミガキ	に白い橙色	に白い橙色		(17.3)				口～片	口縁は複合口縁をなす	A2b
2	〃	口→刷毛目→ヘラミガキ	口→刷毛目→ヘラミガキ	〃	〃		(17.3)				口～片	口縁は複合口縁をなす	A
3	〃	口～体→刷毛目→ヘラミガキ 底→ヘラミガキ	口→刷毛目→ヘラミガキ 体→底→刷毛目→ヘラミガキ	丹	塗	口→丹塗 体→底→洗炭粉		5.0			口下～体上→片 体下→底→片		B
4	〃	口→刷毛目→横ナデ→ヘラミガキ	口→ヘラミガキ	丹	塗	丹 塗		(13.9)			口～片		B
5	〃	口→ヘラミガキ	口→ヘラミガキ 体上→ナデ	〃	〃			(9.6)					B
6	〃	口→刷毛目→横ナデ→ヘラミガキ 体→ヘラミガキ	口→ヘラミガキ 体→ヘラミガキ	黄 橙 色	黄 橙 色			(15.9)			口～片 体～片		I-B2b

第6図 第1住居跡出土遺物(床面, 貯蔵穴状ビット内)

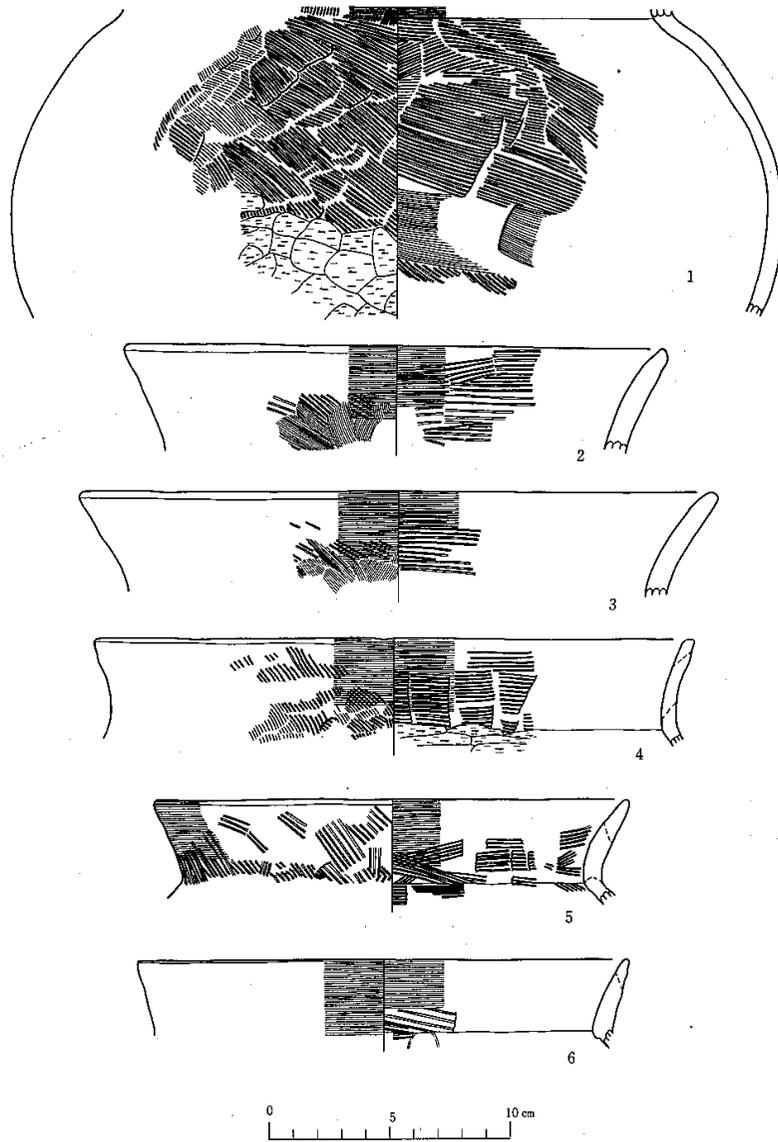


0 5 10 cm

観察表

番号	器種	型		色		注 記		遺存状況	備 考	分 類	
		外 面	内 面	外 面	内 面	器高	口径				底径
1	*	口-刷毛目→横ナデ、底部→ナデ 体-ヘラズリ→刷毛目→ナデ	口-刷毛目→横ナデ 体-底→ヘラナデ			18.6	17.1	6.5	ほぼ完形		I-B2bi
2	*	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ 体-刷毛目→ナデ	にぶい棕色	明褐色	(12.4)			口-⅓		I-B2a
3	*	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ	灰褐色	明褐色	(12.1)			口-⅓		*
4	*	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ	にぶい棕色	にぶい棕色	(12.5)			口-⅓		*
5	*	口-横ナデ	口-刷毛目→横ナデ→ナデ	にぶい褐色	にぶい棕色	(12.9)			口-⅓		*
6	*	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ	*	にぶい褐色	(14.5)			口-⅓		I-B2bi
7	*	口-刷毛目→横ナデ 体-刷毛目→ヘラミガキ・ナデ	口-刷毛目→横ナデ 体-ヘラズリ→ヘラナデ	にぶい棕色	にぶい棕色	(20.6)			口-⅓ 体-⅓		*

第7図 第1住居跡出土遺物(床面、貯蔵穴状ピット内)



観 察 表

番号	器種	調 整		色 調		法 量 (cm)			遺存状態	備 考	分 類
		外 面	内 面	外 面	内 面	器高	口径	底径			
1	甕	体-刷毛目→ヘラケズリ	体-刷毛目→ヘラナデ	黒褐色	にぶい棕色				体-片		
2	◇	口-刷毛目→横ナデ→ナデ	口-刷毛目→横ナデ	淡黄棕色	淡黄棕色	(22.6)			口-片		I-B2bi
3	◇	口-刷毛目→横ナデ→ナデ	口-刷毛目→横ナデ	にぶい棕色	にぶい棕色	(26.6)			口-片		◇
4	◇	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ 陸上→ヘラケズリ	◇	明褐色	(24.9)			口-片		◇
5	◇	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ→ナデ	にぶい棕色	淡黄棕色	(19.7)			口-片		◇
6	◇	口-横ナデ	口-刷毛目→横ナデ 陸上→ヘラケズリ	褐灰色	◇	(20.4)			口-片		◇

第8図 第1住居跡出土遺物(床面, 貯蔵穴状ピット内)

比較して裾の拡がり小さく、わずかに外反しながら円錐台状に開いている。脚部のほぼ中央に孔が3個あけられている。

**器台**(第5図6～8) すべて、受部底面から脚部内面に通じる貫通孔をもつものである。貫通孔の形態はすべて柱状をなしている。6、7の受部は、わずかに内彎ぎみに開いている。

**壺**(第6図1～5) 1、2は、口縁部が複合口縁をなし、わずかに外反して立ち上がるものである。3は、体部が球を押しつぶしたようなわずかに横に長い器形をしており、その最大径はほぼ中央にある。頸部で屈曲し、口縁部はわずかに内彎しながら直立ぎみに立ち上がる。4、5は全体形が3に近いと考えられる口縁部で、4は5よりやや開きが大きいが、ともに外傾する。

**甕**(第6図6、第7図1～7、第8図1～6) 平底の甕と台付甕に大別されるが、後者は1点のみで圧倒的に前者が多い。また、大きさに大小2種類がある。第6図6は頸部が「く」の字状に強く屈曲し、口縁部が外傾するもので、口縁部がわずかに肥厚している。全体の器形のわかる第7図1は底部はやや上げ底である。体部がほぼ球形をなし、頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部が外傾して立ち上がる。口径に比較して外径が大きく、その最大径は体部中央にある。体部下半にわずかに段がみとめられる。第7図7も体部が球形に近い。頸部で屈曲し、口縁部がはじめ直立ぎみに立ち上がり、上方でわずかに外反する。口縁端部が平坦に作り出されている。外面の体部下半には器面の剥落と炭化物の付着がみとめられる。その他の口縁部には、外反するものと直線的に外傾するものがある。また、口縁部の外面や、内外両面に粘土を貼り付けているために、口縁部が肥厚し頸部に段差のみとめられるものがある。第9図5は台付甕の台部で、わずかに内彎ぎみに開くものである。その端部は、平坦に作り出されている。

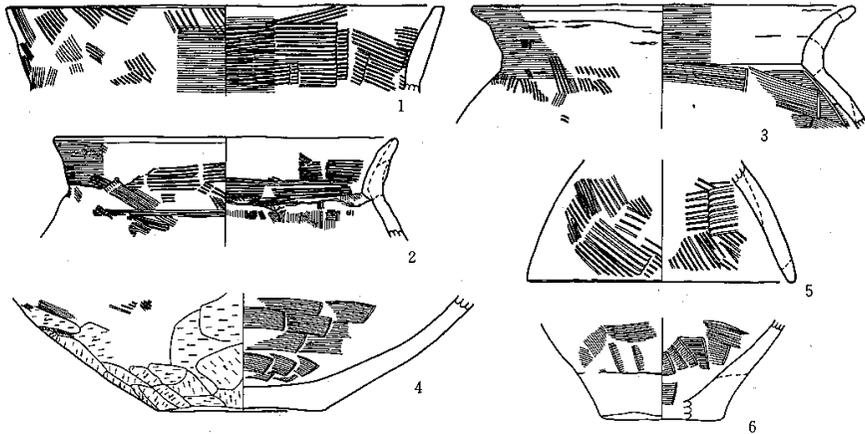
第9図4の底面はいくぶん上げ底である。第9図3は、頸部で屈曲し、口縁部が強く外反するものである。第7図2～6、第9図2は小形の甕で、口縁部が直線的に外傾するものと外反するものがある。これらの中には、口縁部に内外から粘土を貼り付け、肥厚させているものが多く、頸部との境には段差がみとめられるものもある。

[柱穴出土土器]

出土土器には、土師器の壺、甕がある。

**壺**(第9図7) 口縁部が複合口縁をなすもので、器形は頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部は緩やかに外反する。頸部外面には櫛様のもので刻目を施した突帯がめぐっている。

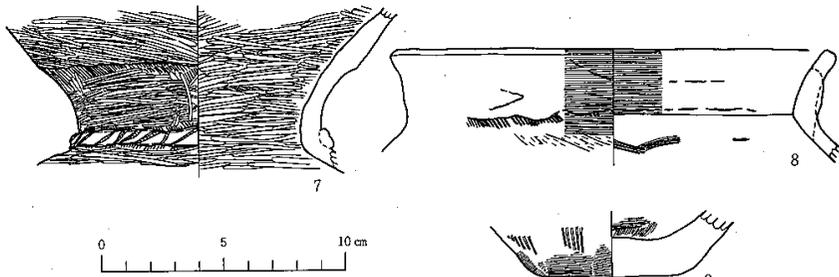
**甕**(第9図8・9) 8は、頸部で屈曲し、口縁部がわずかに内彎しつつ外傾するもので、口縁部外面にわずかに粘土を貼り付けている。そのため頸部との境に段差ができています。内面には成形時の積み上げ痕がみとめられる。



(床面、貯蔵穴状ピット内)

観察表

番号	器種	刷		色		法		量 (cm)	遺存状態	備考	分類
		外 面	内 面	外 面	内 面	器高	口径				
1	甕	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ	浅黄橙色	にぶい黄橙色		(18.0)		口-片		I-B2bi
2	〃	口-刷毛目→横ナデ 体上→ナデ→刷毛目→ナデ	口-刷毛目→横ナデ→ナデ 体上→ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色		(14.2)		口-片		I-B2a
3	〃	口-刷毛目→横ナデ 体上-刷毛目	口-横ナデ 体-ヘラナデ	にぶい橙色	にぶい橙色		(15.8)		口-片		I-B1
4	〃	体下-底-刷毛目→ヘラケズリ→ナデ	体下-底-ヘラナデ	灰褐色	黒褐色			6.0	体下-底-片		底1
5	〃(右付)	台部-刷毛目	台部-刷毛目	橙 色	橙 色			(11.0)	台部-片		底2
6	〃	体下-刷毛目→ヘラケズリ→ナデ 体下-ヘラケズリ→ナデ	体下-底-ヘラナデ	にぶい橙色	にぶい黄橙色			(5.0)	体下-底-片		底1



(柱穴堆積土中)

観察表

番号	器種	刷		色		法		量 (cm)	遺存状態	備考	分類
		外 面	内 面	外 面	内 面	器高	口径				
7	甕	口-刷毛目→ヘラミガキ 体上-ヘラミガキ	口-刷毛目→ヘラミガキ	暗茶褐色	黒褐色				口-片	観念上、横、頸部に刷目のある 突部があく	A1
8	甕	口-刷毛目→横ナデ 体上-ヘラケズリ	口-横ナデ 体上→ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色		(18.3)		口-片		I-B2bi
9	〃	体下-底-刷毛目→ナデ	体下-底-ヘラナデ→ナデ	〃	灰褐色			2.85	底-片		

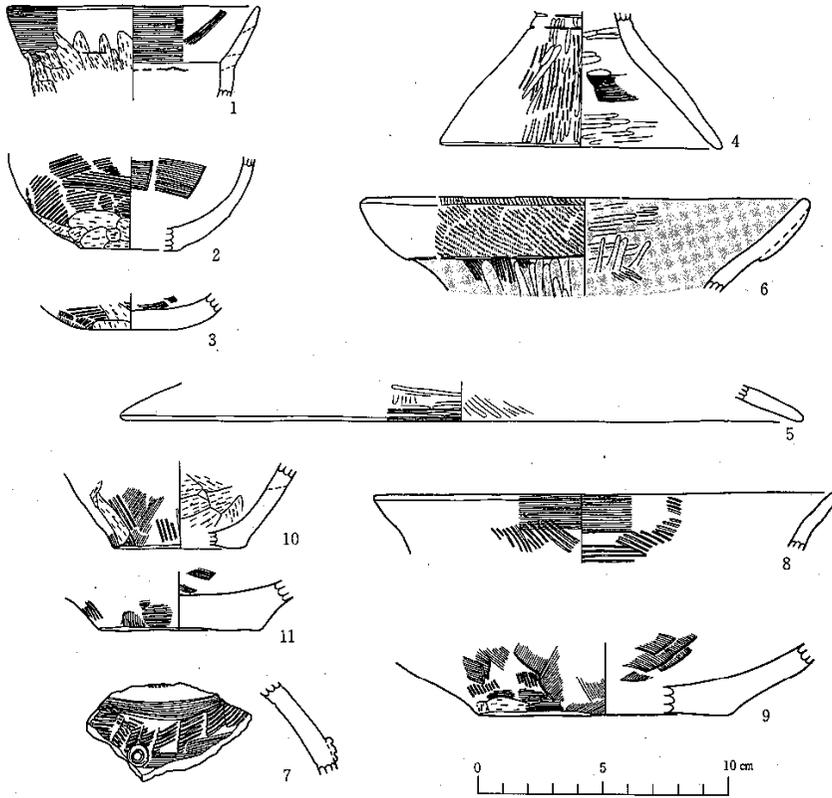


(住居堀り方堆積土中)

観察表

番号	器種	刷		色		法		量 (cm)	遺存状態	備考	分類
		外 面	内 面	外 面	内 面	器高	口径				
10	甕	口-横ナデ 体上-ヘラケズリ	口-横ナデ 体上-ヘラケズリ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		(14.1)		口-片	「S」字状口縁	I-A

第9図 第1住居跡出土遺物



観 察 表

番号	器種	脚 面		色 脚 面		法 量 (cm)		遺存状態	備 考	分類
		外 面	内 面	外 面	内 面	器高	口径			
1	坏	口-体上-横ナデ→ヘラケズリ	口-刷毛目→横ナデ→ナデ	褐 灰 色	褐 灰 色	(10.1)		口-体上-1/2		1-A3
2	*	体下-底-刷毛目→ヘラケズリ	体下-ヘラナデ	に ぶ い 橙 色	に ぶ い 褐 色		(4.0)	体下-1/2		
3	*	体下-刷毛目→ヘラケズリ 底-刷毛目→ナデ	体下-底-ヘラナデ	〃	に ぶ い 橙 色		(3.0)	底-1/2		
4	器台?	脚部-刷毛目→横ナデ→ヘラミガキ	脚部-ヘラナデ→ヘラミガキ	に ぶ い 赤 褐 色	に ぶ い 赤 褐 色		(11.0)	脚部-1/2		
5	高杯	脚部-横ナデ→ヘラミガキ	脚部-ヘラミガキ	灰 褐 色	褐 灰 色		(27.9)	脚部-1/2		
6	壺	口-刷毛目→ヘラミガキ	口-ヘラミガキ	口上-に ぶ い 黄 橙 色 口下-丹 塗	丹 塗	(18.0)		口-1/2	複合口縁、口縁上中に無形 横文が施されている	A2a
7	*	体上-刷毛目→ヘラナデ	体上-ヘラナデ	に ぶ い 橙 色	に ぶ い 橙 色			体上破片	円形浮文あり	
8	甕	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ	〃	褐 灰 色	(18.6)		口-1/2		
9	*	体下-刷毛目→ヘラナデ・ヘラケズリ→ナデ 底-ヘラケズリ→ナデ	体下-ヘラナデ	黒 褐 色	灰 褐 色	(10.0)		体下-底-1/2		底1
10	*	体下-刷毛目→ヘラケズリ→ナデ	体下-ヘラケズリ			(5.4)		体下-底-1/2		*
11	*	体下-刷毛目→ナデ 底-ナデ	体下-底-ヘラナデ	灰 褐 色	明 褐 灰 色		6.6	体下-底-1/2		*

第10図 第1住居跡出土遺物(堆積土中)

〔掘り方堆積土中出土土器〕

出土土器には土師器甕がある。

**甕**(第9図10) 頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部がいわゆる「S」字状の口縁をなすものである。口縁部下半はぶ厚く、上半は薄く外方へ張り出している。

〔堆積土中出土土器〕

出土土器には、土師器の坏、高坏、器台、壺、甕がある。

**坏**(第10図1～3) 1は、体部が丸みをもち、口縁部で屈曲し、内彎ぎみに立ち上がるものである。2は底部から内彎してそのそのまま立ち上がるものである。

**高坏**(第10図5) 脚部の裾とみられるものである。

**器台**(第10図4) 脚部のみであり、ほぼ直線的に開いている。

**壺**(第10図6・7) 6は、口縁部が複合口縁をなし、わずかに内彎しながら大きく開くものである。複合部と口縁端部にはR原体の無節縄文が横方向に施文されている。また、縄文施文のある複合部を除いた内外面には丹塗が施されている。7は、体部上半の破片とみられるもので、外面には、中央に竹管様の刺突のついた円形浮文が付されている。内面には、積み上げ痕がみとめられる。

**甕**(第10図8～11) 底部はいずれも上げ底である。

## 第2住居跡と出土遺物

〔確認面〕 地山漸移層中で確認された。

〔重複〕 みとめられない。

〔平面形・規模〕 西南部の一部は掘りすぎて不明だが、平面形は隅の丸い方形と考えられ、規模は、長軸(南北)5.5m、短軸(東西)4.9mとわずかに南北に長い。

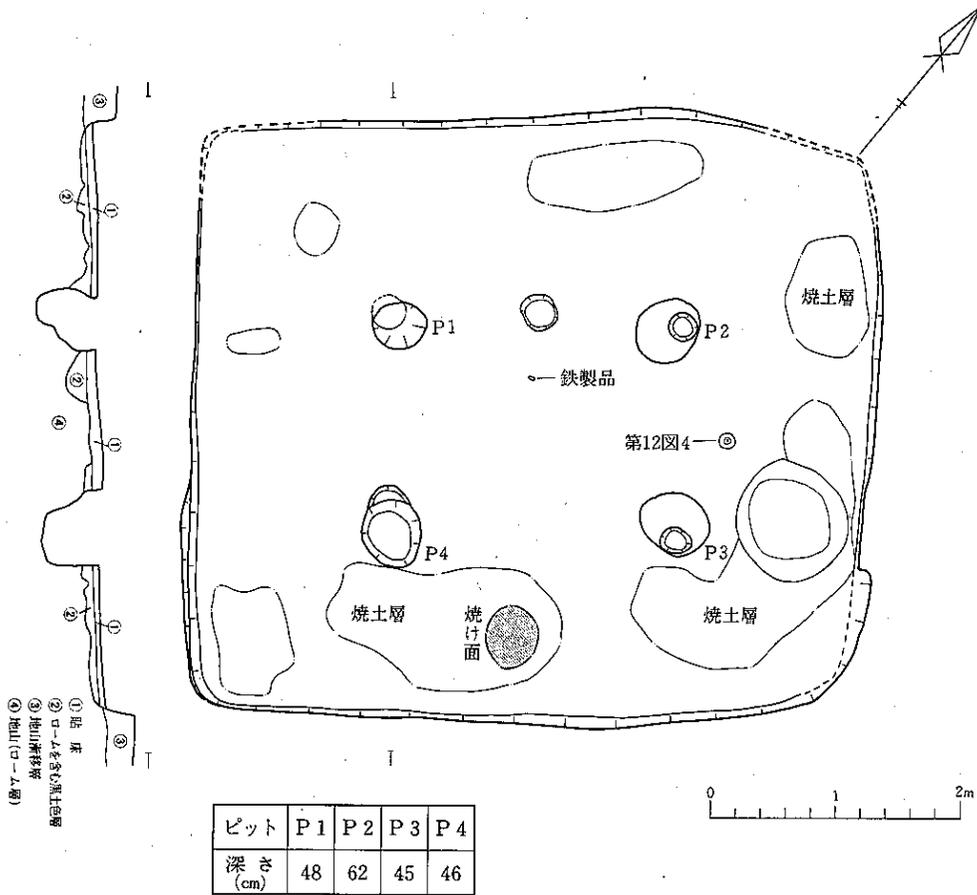
〔堆積土〕 3層みとめられた。第1層は黒褐色土層、第2層は焼土層、第3層は黒色土層で、その内第2層の焼土層は住居跡周縁から中心に向かって傾斜しており、住居が廃棄されたのち投げこまれたものと考えられる。

〔壁〕 地山漸移層を壁としている。壁の立ち上がりは比較的急で、壁高は保存の良好な東壁で約20cmである。

〔床面〕 ほぼ全面に黒色土まじりの汚れたロームによる貼床がみられる。中央周辺の床面は固く、壁に近づくにつれて柔くなる。床面はほぼ平坦である。床面には掘り方があり、その底面は凹凸がはげしい。

〔周溝〕 みとめられない。

〔柱穴〕 床面上からは5個のピットが検出されている。その内P2とP3に柱痕跡がみとめら



第11図 第2住居跡

れた。また、これらのピットに対応する位置にP1、P4があり、深さなどからも柱穴と考えられる。したがって、P1~4が本住居跡の主柱穴と考えられる。

〔炉・カマド〕 東壁の中央からやや南に寄った地点に焼け面がみとめられた。それほど強くは焼けていない。

〔貯蔵穴〕 みとめられない。

〔出土遺物〕 本住居跡に伴うと考えられる遺物には床面出土の土器、鉄製品がある。その他に堆積土出土の土器がある。これらの多くは床面に近い位置から出土した。

〔床面出土遺物〕

床面出土遺物には土師器の坏、高坏、器台、甕と鉄製品がある。

### 土師器

**坏**(第12図1) 丸底に近いもので、底部は上げ底である。体部は丸みをもって立ち上がる。

**高坏**(第12図2) 全体の器形は不明だが、脚部はわずかに外反しながら円錐台状に開くものとみられる。脚部のやや上方に孔が3個あけられている。

**器台**(第12図3・4) ともに受部から脚部に通じる貫通孔があり、その形態は柱状をなすものである。3は受部がわずかに内彎しながら大きく開くものである。脚部はわずかに外反しながら円錐台状に開いている。4の脚部も同様であるが裾にいたり、さらに大きく開いている。脚部のやや上方には3は4個、4は3個の孔があけられている。

**甕**(第12図5・6) 5は、体部が球形をなし、頸部で屈曲し、口縁部がゆるやかに外反するものである。口縁端部は平坦に作り出され、その先端は外方にめくれている。外面には、炭化物の付着が、内面には積み上げ痕がみとめられる。

### 鉄製品

現存しないので詳細は不明である。鉄器の断片と考えられているが用途は不明である。

[堆積土中出土遺物]

出土遺物には土師器の坏、高坏、器台、徳利形土器、壺、甕がある。

### 土師器

**坏**(第12図7～9、第13図1～4) 第12図7は、底部は上げ底である。底部から内彎して立ち上がり、体部で屈曲し、さらに口縁部がわずかに内彎ぎみに開いている。内面には稜がみとめられる。8、9は外面に成形時の積み上げ痕を残し、器面もザラザラして7と比較すると粗雑な感じのするものである。ともに底部はやや外方に張り出している。8は体部が内彎し、口縁部が直立ぎみに立ち上がるもので、内面には稜がみとめられる。9は体部から口縁部にかけて、丸みをもって立ち上がるものである。第13図1～3は体部が丸みをもち、その後、直立ぎみに立ち上がるものである。内面には稜が明瞭にみとめられる。

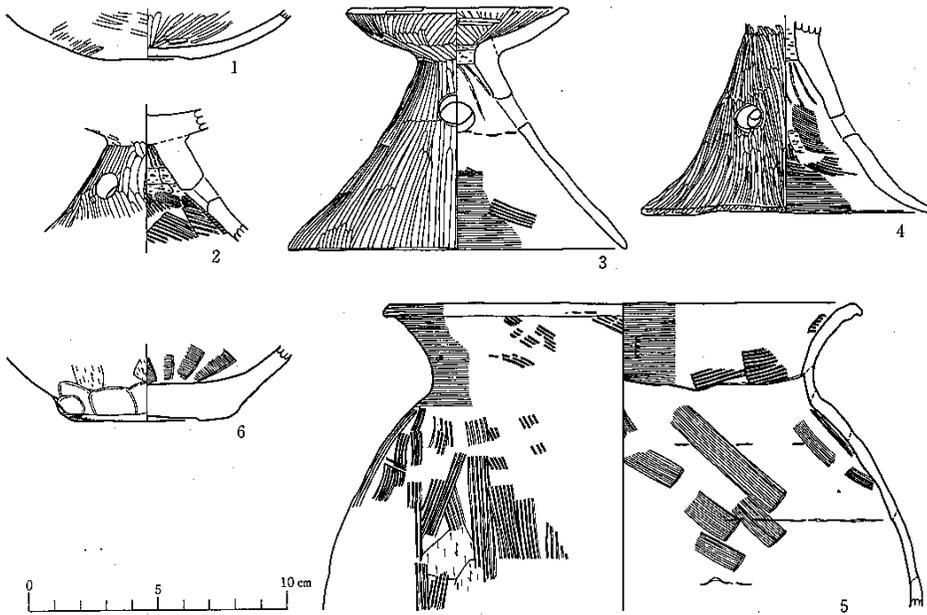
**高坏**(第13図5～6) 5は脚部が円錐台状に開き、裾でさらにわずかに開くものである。脚部中位に2段に3個ずつ計6個の孔があけられている。6は、脚部が比較的短いもので、いくらか中ぶくらみに開いている。孔はみとめられない。

**器台**(第13図7) 貫通孔をもつが、その形態は「く」の字状をなすものである。受部は浅くわずかに内彎し開いている。脚部には孔が4個あけられている。

**徳利形土器**(第13図8) 内面に成形時の積み上げ痕がみとめられる。

**壺**(第13図8～12) 9、10は口縁部が頓合口縁をなすものである。ともに口縁部は外傾するが、9の内面中位には、かすかな山帯がみとめられる。また、頸部に櫛様のもので刻目を施した突帯がめぐっている。11は、頸部で屈曲し、口縁部が直線的に外傾するものである。

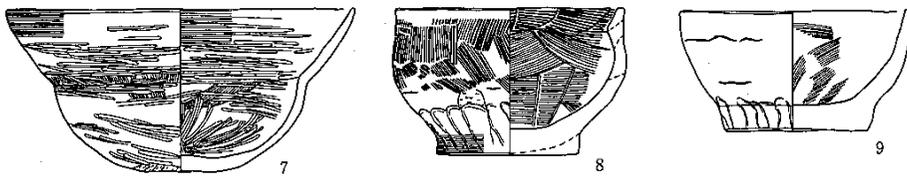
**甕**(第14図1～7) 1は体部がほぼ球形をなすとみられ、頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部が外傾するものである。口縁端部は薄く仕上げられている。口縁部外面には積み上げ痕が



(床面)

観察表

番号	器種	型		色		法 量 (cm)			遺存状態	備考	分類
		外 面	内 面	外 面	内 面	器高	口径	底径			
1	環	体下~底→ヘラミガキ	体下~底→ヘラミガキ	にぶい橙色	にぶい橙色			(3.2)	体下~底→片		
2	高環	脚部→ヘラミガキ	環部→ヘラミガキ 脚部→シボリ目→ヘラケズリ・刷毛目→ナデ	暗黄褐色	黄褐色				脚部上→片	脚部に3孔あり	
3	甗台	突部→脚部→ヘラミガキ	環部→ヘラミガキ 脚部→シボリ目→刷毛目→横ナデ	*	暗黄褐色	9.4	8.6	13.1	完形	脚部に4孔あり	
4	〇	脚部→横ナデ→ヘラミガキ	貫通孔→ヘラケズリ 脚部→シボリ目→刷毛目→横ナデ・ヘラナデ	赤褐色	黒褐色			11.2	脚部→片	脚部に3孔あり	
5	甗	口→刷毛目→横ナデ 体上→ヘラミガキ→刷毛目	口→刷毛目→横ナデ 体上→ヘラナデ	灰黄褐色	灰黄褐色			(18.6)	口→体上→片		I-B1
6	〇	体下→ヘラケズリ→オサエ 底→ナデ	体下→底→ヘラナデ	にぶい橙色	にぶい褐色			6.4	体下~底→片		底1

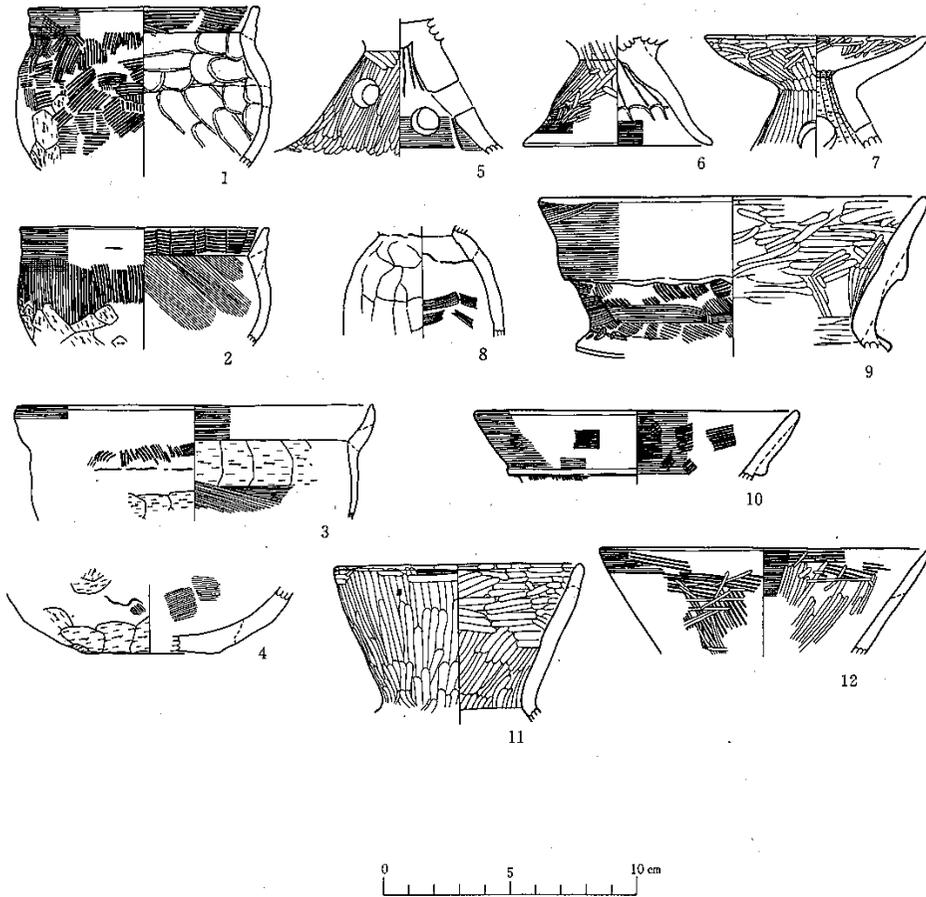


(堆積土中)

観察表

番号	器種	型		色		法 量 (cm)			遺存状態	備考	分類
		外 面	内 面	外 面	内 面	器高	口径	底径			
7	環	口→刷毛目→横ナデ→ヘラミガキ 体下→底→刷毛目→ヘラケズリ→ヘラミガキ	口→横ナデ→ヘラミガキ 体下→底→ヘラナデ→ヘラミガキ	黄褐色	黄褐色	6.4	(13.0)	2.9	口→片 体下→片		I-A1a
8	〇	口→刷毛目 体下→刷毛目→ヘラケズリ→オサエ底→ナデ	口→刷毛目 体下→底→ヘラナデ→ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	5.7	(8.9)	5.5	口→片 底→片		I-A4b
9	〇	口→ナデ 体下→オサエ	口→底→ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	4.6	8.9	5.5	口→片 体下→片		I-B2

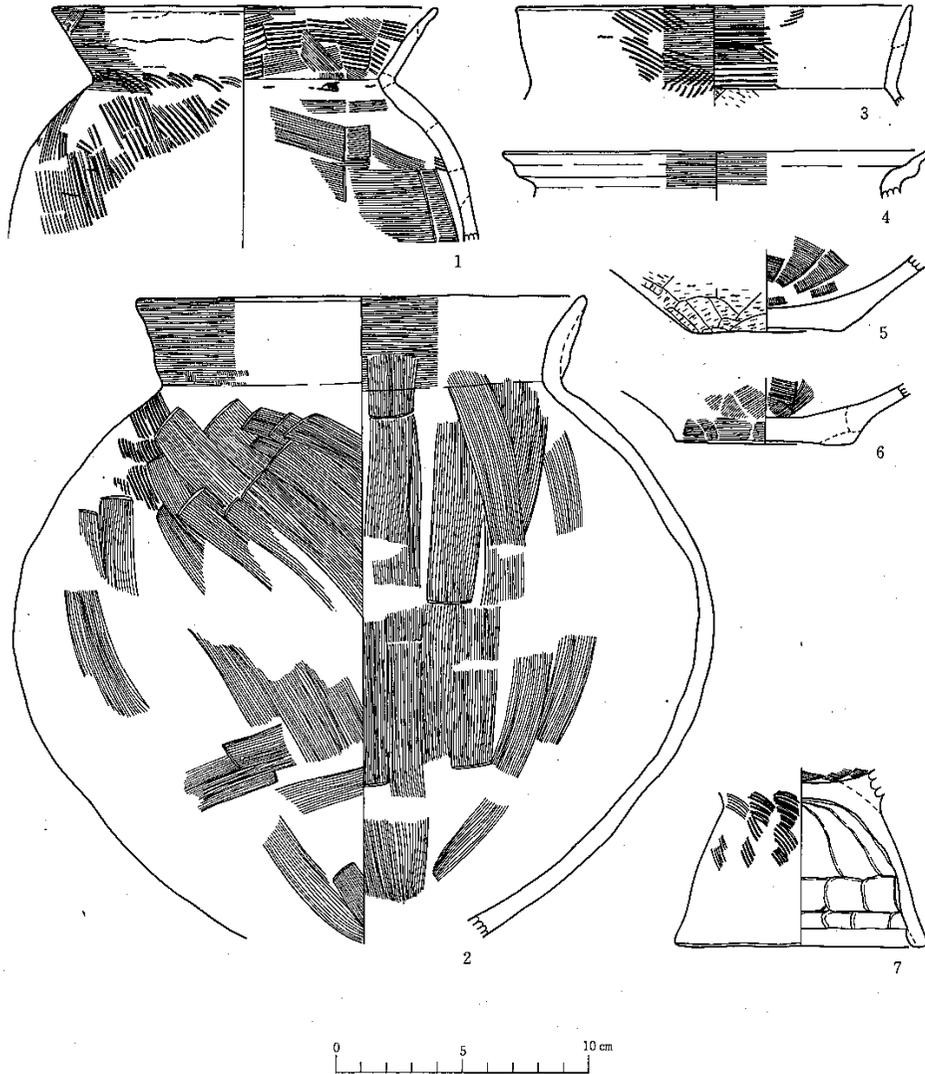
第12図 第2住居跡出土遺物



観 察 表

番号	器 種	胴		色 調		法 量 (cm)		遺存状態	備 考	分類
		外 面	内 面	外 面	内 面	器高	口径			
1	坏	口-刷毛目→横ナデ 体-刷毛目→ヘラケズリ	口-刷毛目 体-ナゲツケ	にぶい橙色	にぶい橙色	(9.2)		口~体一欠		I-A4
2	〃	口-刷毛目→ヘラケズリ 体-刷毛目→ヘラケズリ	口-刷毛目 体-ナゲ	浅黄橙色	浅黄橙色	(9.8)		口~体一欠		
3	〃	口-刷毛目→ヘラケズリ 体-刷毛目→ヘラケズリ	口-横ナデ 体-ヘラケズリ→ヘラナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	(14.0)		口~体一欠		
4	〃	体下~底→ヘラケズリ→ナゲ	体下~底→ナゲ	〃	灰黄褐色		(5.6)	体下~底一欠		
5	高 坏	脚部→ヘラミガキ	脚部→シボリ目→ヘラナデ	にぶい赤橙色	うすい褐色			脚部上一欠	脚部に5孔あり	
6	〃	脚部→ハケ目→横ナデ→ヘラミガキ	脚部→シボリ目→ナゲツケ→横ナデ	にぶい橙色	灰黄褐色		(7.4)	脚部上一欠 脚部下一欠		
7	甗	上部-刷毛目→ヘラミガキ 脚部→ヘラミガキ	上部→ヘラミガキ 脚部→ヘラケズリ	茶黄褐色	茶褐色	8.8		上部~脚部 上一欠	脚部に4孔あり	
8	徳利形土器	体上→ヘラケズリ→ナゲ	体上→ヘラナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色			体上一欠		
9	甗	口-刷毛目→ヘラナデ	口-ヘラミガキ	にぶい橙色	にぶい橙色	(15.4)		口一欠	口縁は複合口縁を呈す	A1
10	〃	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ	〃	〃	(12.8)		口一欠	口縁は複合口縁を呈す	A
11	〃	口-刷毛目→横ナデ→ヘラミガキ	口→ヘラミガキ	〃	〃	9.9		口一欠		B
12	〃	口-刷毛目→横ナデ→ヘラミガキ	口-刷毛目→横ナデ→ヘラミガキ	浅黄橙色	黒褐色	(13.1)		口一欠		B

第13図 第2住居跡出土遺物(堆積土中)



観察表

番号	器種	製		色		法 量 (cm)			遺存状態	備考	分類
		外面	内面	外面	内面	器高	口径	口径			
1	甕	口-刷毛目一横ナデ 体上-刷毛目	口-刷毛目一横ナデ 体-ナデ-ヘラナデ	黒褐色	におい褐色			(15.2)	口-体上-片		I-B2bi
2	◇	口-横ナデ 体-刷毛目-ヘラナデ	口-横ナデ 体-ヘラナデ	暗褐色	暗褐色			(17.9)	口-体-片		I-B2a
3	◇	口-刷毛目一横ナデ	口-刷毛目一横ナデ 体上-ヘラナズリ	におい褐色	黒褐色			(15.7)	口-片		I-B2bi
4	◇	口-横ナデ	口-横ナデ	におい褐色	におい褐色			(17.0)	口-片	「S」字状口縁	I-A
5	◇	体下-底-ヘラナズリ	体下-底-ヘラナデ	灰褐色	におい褐色			(6.0)	体下-底-片		底1
6	◇	体下-ナデ 底-ナデ	体下-底-ヘラナデ	におい赤褐色	◇			(7.0)			◇
7	◇ (台付)	台部-刷毛目	台部-シボリ目-ナデツケ	◇	におい赤褐色			10.0	台部-片 底-片		底2

第14図 第2住居跡出土遺物(堆積土中)

みとめられる。2は体部が球形をなし、頸部で屈曲し口縁部が直立ぎみに立ち上がるものである。口縁部外面には粘土が貼り付けられて、肥厚している。4は口縁部がいわゆる「S」字状口縁をなしている。口縁部下半はぶ厚く、上半はつまみあげられたように薄く、外方へ張り出す。5、6はともに底部は上げ底である。7は台付甕の台部で、わずかに内彎しつつ開く。裾端部は内側へ折り返され、内面がわずかに肥厚している。

### 第3住居跡と出土遺物

〔確認面〕 一部は地山漸移層上面で確認された。

〔重複〕 みとめられない。

〔平面形・規模〕 北側半分と南西隅は道路敷外のため調査ができず不明であるが、平面形はほぼ方形と推定される。規模は、残存する東西辺で約6.2mである。

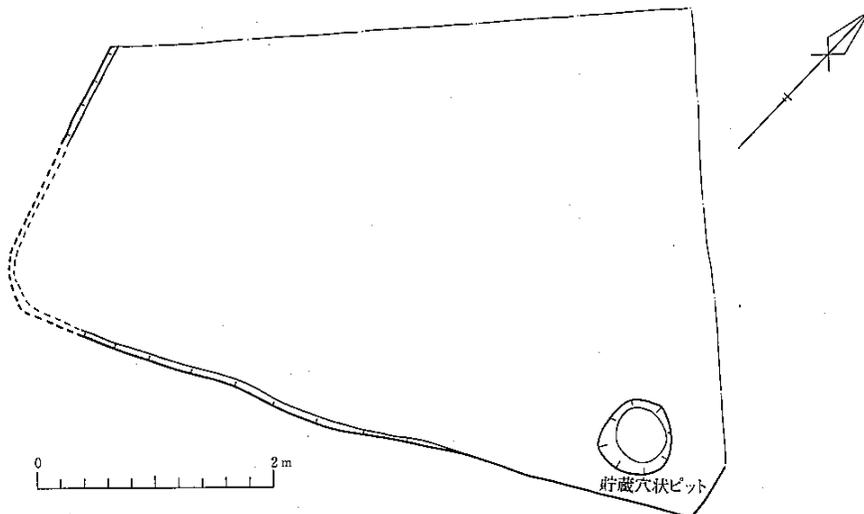
〔堆積土〕 地山漸移層と似た層である。

〔壁〕 南壁と、西壁の一部のみ残存するが、すべて地山漸移層を壁としている。壁高は南壁のほぼ中央で6cmである。

〔床面〕 中央部は非常に固く締まり、黒っぽく汚れていた。壁の周辺はやわらかい。

〔周溝〕 〔柱穴〕 〔カマド・炉〕 みとめられない。

〔貯蔵穴状ピット〕 南東隅から平面形が円形で、径約60cm、深さ約40cmのピットが検出された。このピット内からは、ほぼ完形に近い甕が出土しており、貯蔵穴であった可能性が強い。



第15図 第3住居跡

〔出土遺物〕本住居跡に伴うと考えられる遺物には、床面および貯蔵穴状ピット内出土の土器がある。その他に住居跡堆積土出土の土器があるが、これらは床面に近い位置から出土した。

〔床面および貯蔵穴状ピット内出土土器〕

出土土器には土師器の坏、徳利形土器、甕がある。

### 土師器

**坏**(第16図1～3) 1は、底部は平底である。体部は丸みをもち、ややその上方に張りをもつ。口縁部で屈曲し、さらにその上で軽い稜をもち、わずかに内彎しながら立ち上がる。2は、口縁部が内彎するものである。3の底部は上げ底である。

**徳利形土器**(第16図4・5) 4は底部は平底である。体部は内外面とも器面に凹凸があり、成形時の積み上げ痕を残していることから、やや粗雑という印象を受ける。頸部には櫛様のもので刻目を施した突帯がめぐっている。

**甕**(第16図6～13) 6は小形の甕で、頸部で屈曲し、直線的に外傾するものである。口縁端部は平坦に作り出されている。頸部には横ナデ調整の際、粘土を被ったためか段差がみとめられる。7は口縁部が折り返し口縁をなすものである。甌とも考えられる。8～12の底部は上げ底である。13は台付甕の台部で、円錐台状に開く。その端部は、平坦に作り出されている。

〔堆積土中出土土器〕

出土土器には土師器の坏、壺がある。

### 土師器

**坏**(第17図1) 底部は上げ底である。体部から口縁部にかけて直線的に大きく開くものである。

**壺**(第17図2) ほぼ球形をなし、体部中央のやや上方に張りをもつ。内面には横み上げ痕がみとめられる。

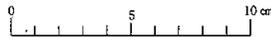
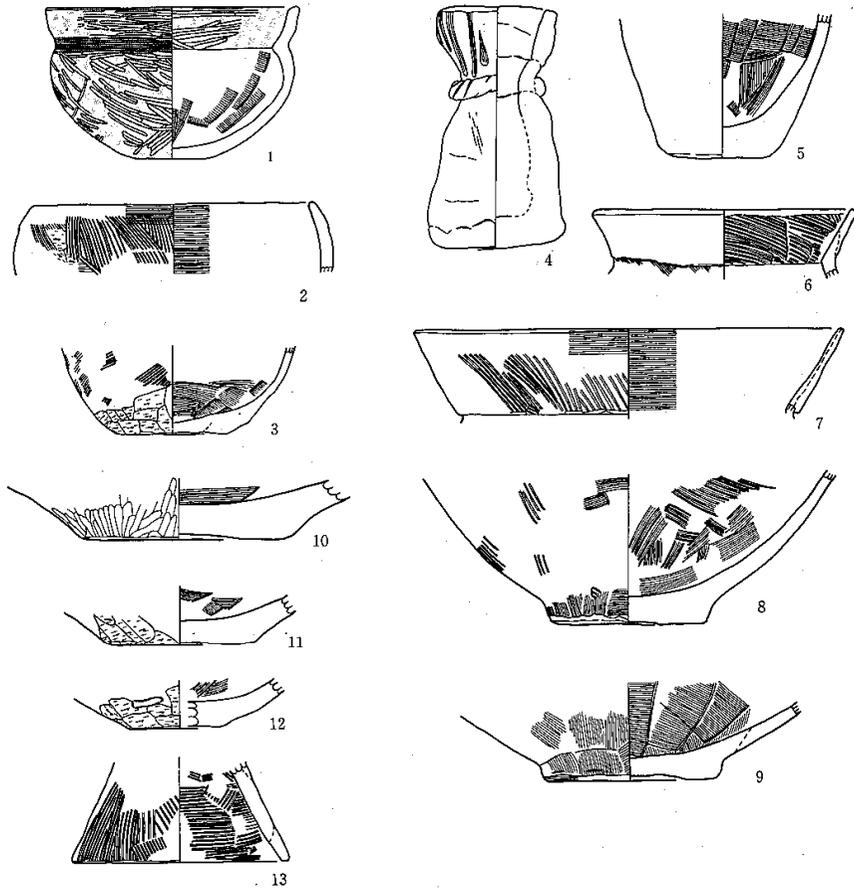
## 3. 遺構以外の出土遺物(土師器、須恵器、赤焼土器)

### I、II層出土土器

出土土器には土師器の坏、高坏、器台、壺、甕、甌と須恵器、赤焼土器がある。これらの多くは住居跡の周辺から発見された。ここでは図示できたものを中心に記述し、図示不可能な遺物については第5、6表に示した。

### 土師器

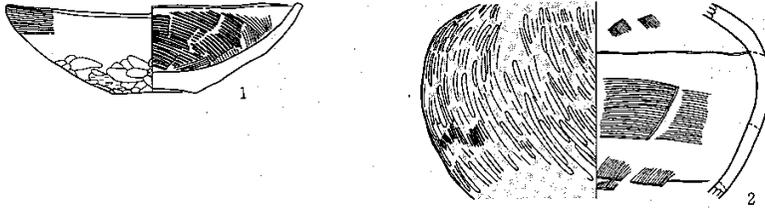
**坏**(第17図1～10、第18図1～6) 第17図3は、底部がいく分上げ底である。体部は内彎し、口縁部で軽く屈曲し、内彎ぎみに立ち上がる。内面には明瞭な稜がみとめられる。口縁端部はとがりぎみに作り出されている。第17図4は、体部は内彎ぎみに浅く立ち上がる。体部で



観 察 表

番号	器種	形 状		色 調		法 量 (cm)		遺存状態	備 考	分類
		外 面	内 面	外 面	内 面	口徑	底徑			
1	坏	口一副毛目→横ナデ→ヘラミガキ 体→底→ヘラケズリ→ヘラミガキ	口→ヘラミガキ 体→ヘラナデ	口→体→丹塗 底→浅黄褐色	口→丹塗 体→底→灰白色	6.35	10.6	3.0		I-A3
2	*	口→体→ヘラケズリ→副毛目→横ナデ	口→体→横ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色			(11.7)	口→底 体→底→片	I-B1
3	*	体下→底→副毛目→ヘラケズリ→ナデ	体下→底→ヘラナデ	黒褐色	黒褐色			4.5	体下→底→片	
4	埴輪形土器	口→ナデ、棒状のものによるケズリ? 体→底→副毛目→ナデ	口→底→ナデ	黄褐色	黄褐色	10.2	5.0	5.5	壳形	頸部に刻目のある 要部がめぐる
5	*	体下→底→ナデ	体下→底→ヘラナデ→ナデ	*	*			4.0	体下→底→片	
6	甕	口→副毛目→ナデ?	口→副毛目	*	*			11.1	口→底	I-B2a
7	*	口→副毛目→横ナデ	口→横ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色			(17.9)	口→底	*
8	*	体下→副毛目→ナデ→ヘラナデ→ナデ	体下→底→副毛目→ヘラナデ	浅黄褐色	にぶい橙色			6.6	体下→底→片	底1
9	*	体下→底→ナデ	体下→底→ヘラナデ	黒褐色	黒褐色			7.4	体下→底→片	*
10	*	体下→底→ヘラミガキ	体下→底→ヘラナデ	暗褐色	暗褐色			8.3	底→片	*
11	*	体下→底→ヘラケズリ	体下→底→ヘラナデ	*	にぶい褐色			6.0	底→片	*
12	*	体下→底→ヘラケズリ	体下→底→ナデ	灰褐色	浅黄褐色			4.0	底→片	*
13	*(台付)	台部→副毛目	台部→副毛目	にぶい橙色	にぶい橙色			(9.0)	台部→片	底2

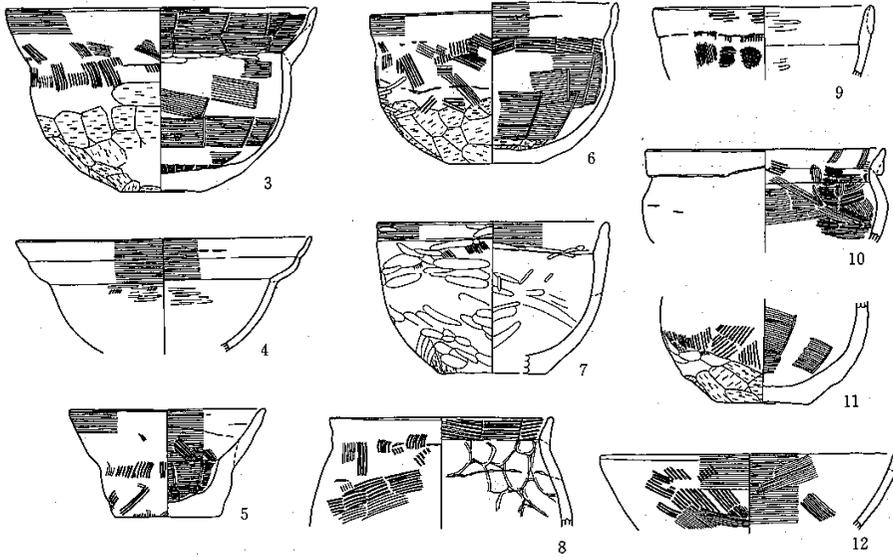
第16図 第3住居跡出土遺物(床面、貯蔵穴状ピット内)



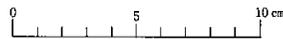
第3住居跡出土遺物(堆積土中)

観 察 表

番号	器種	調 面		色 調		法 量 (cm)			遺存状態	備 考	分類
		外 面	内 面	外 面	内 面	器高	口径	底径			
1	杯	口一横ナデ 体下底一ヘラケズリ一ヘラミガキ	口一底一刷毛目一横ナデ	にぶい黄棕色	黒褐色	3.2	11.9	3.5	口一底一 体一底一		I-B3
2	壺	体一刷毛目一ヘラミガキ	体一ヘラナデ	丹 塗	褐灰色						B



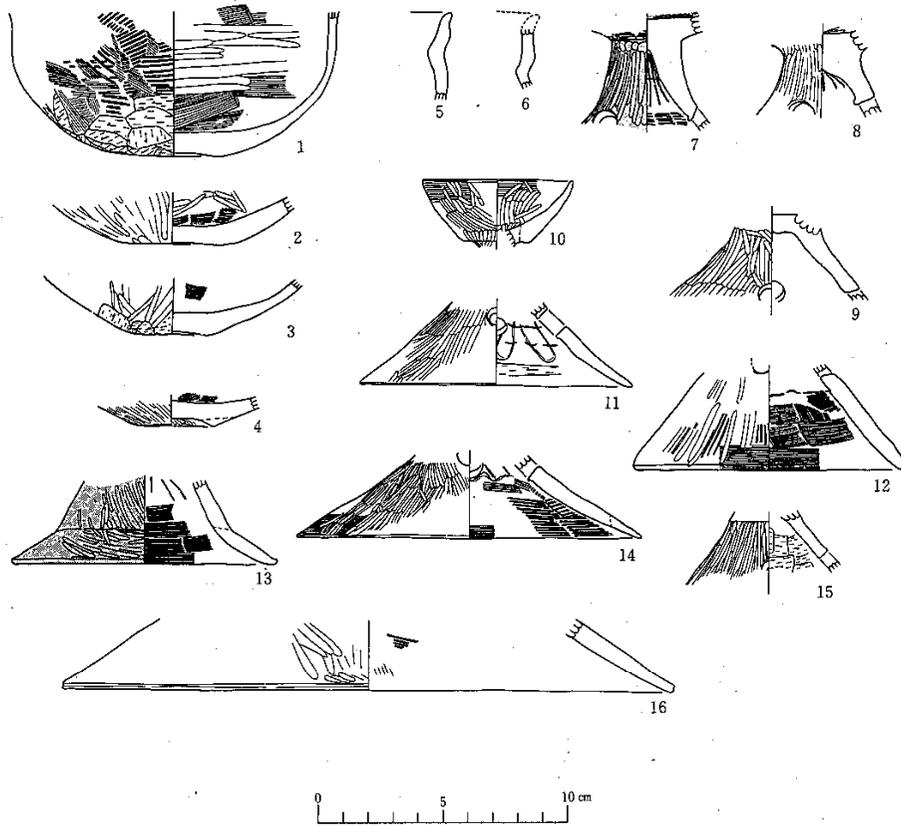
(I・II層)



観 察 表

番号	器種	調 面		色 調		法 量 (cm)			遺存状態	備 考	分類	出土地区
		外 面	内 面	外 面	内 面	器高	口径	底径				
3	杯	口一横ナデ 体上一刷毛目 体下底一ヘラケズリ	口一底一横ナデ 体一底一ヘラナデ	にぶい黄棕色	淡黄棕色	7.5	12.3	(3.4)	口一底一 体一底一		I-A3	F-23
4	*	口一横ナデ 体一刷毛目一ヘラミガキ	口一横ナデ 体一ヘラミガキ	橙 色	橙 色	(12.0)			口一底一		I-A2	G-23
5	*	口一横ナデ 体一刷毛目 底一ナデ	口一横ナデ 体一ヘラナデ	にぶい黄棕色	にぶい黄棕色	4.4	7.8	4.2	口一底一		I-A1b	F-23
6	*	口一横ナデ 体上一刷毛目 体下底一ヘラケズリ	口一横ナデ 体上一刷毛目 体下底一ヘラケズリ一ヘラナデ	赤 褐色	赤 褐色	6.5	10.0	4.1	完 形		I-A3	D-20
7	*	口一横ナデ一ヘラミガキ 体一刷毛目一ヘラケズリ一ヘラミガキ 底一ヘラケズリ	口一横ナデ 体一ヘラミガキ	灰 黄褐色	にぶい黄棕色	6.2	9.4	(4.3)	口一底一		I-A4a	E-23
8	*	口一体上一刷毛目	口一刷毛目 体上一ナデナツケ	褐 灰色	〃	(9.1)			口一体上一		I-A4	F-23
9	*	口一刷毛目 体上一ナデ	口一体上一ヘラミガキ	にぶい橙棕色	にぶい橙棕色	(8.8)			口一底一	外側裏し 目録表	〃	〃
10	*	口一横ナデ	口一刷毛目一ナデ	〃	〃	(9.6)			口一底一	外側裏し 目録表	*	D-19
11	*	体下一刷毛目一ヘラケズリ一ヘラミガキ 底一ヘラケズリ	体下一底一ヘラナデ	〃	〃			3.8	口一底一 体下一底一			E-23
12	*	口一体上一刷毛目一ナデ、横ナデ	口一横ナデ一ナデ	〃	〃	(12.1)			口一体上一			E-19

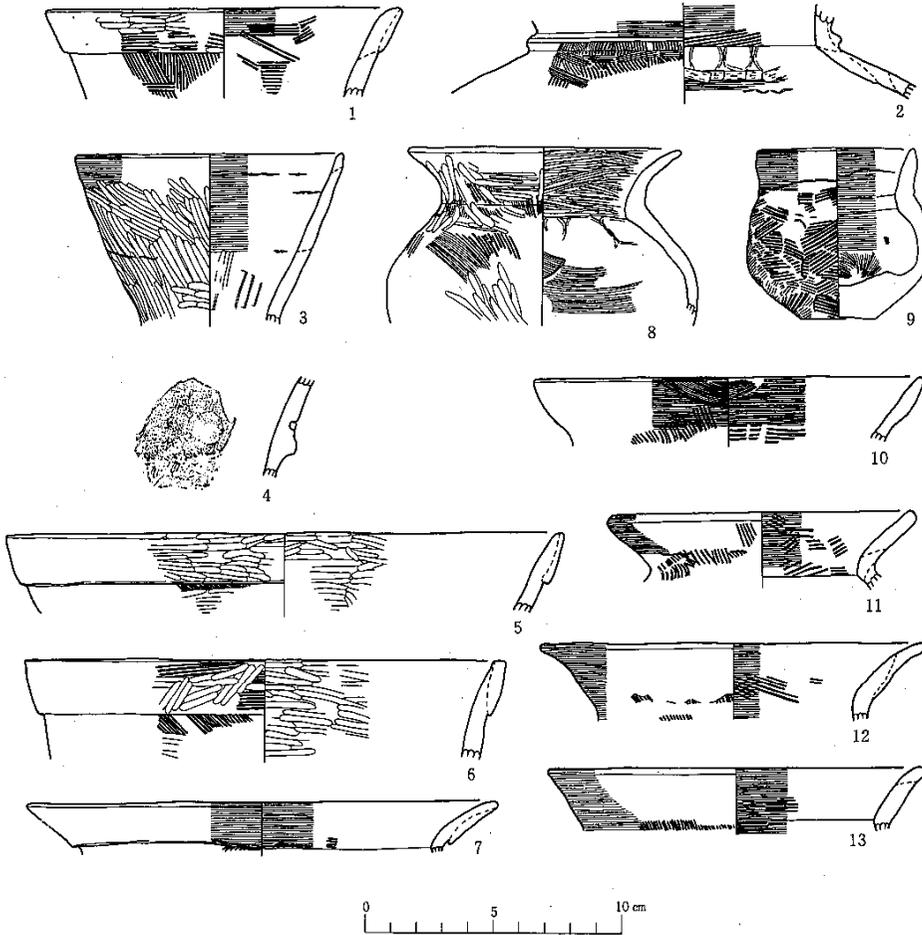
第17図 第3住居跡およびI・II層出土遺物



観察表

番号	器種	型		色		法 量 (cm)		遺存状態	備 考	分類	出土地区
		外 面	内 面	外 面	内 面	器高	口徑				
1	環	体一刷毛目→ヘラクズリ→ナデ 底→ヘラクズリ	体→底→ヘラナデ→ヘラミガキ	浅黄褐色	浅黄褐色		3.4	体下一片 底→片			E-19
2	*	体下→底→ヘラミガキ	体下→底→刷毛目→ヘラミガキ・ナデ	におい橙色	におい橙色		(4.0)	体下→底→片			J-23
3	*	体下→底→ヘラクズリ→ヘラミガキ	体下→底→ヘラナデ	におい黄褐色	黄褐色		3.0	体下→底→片 底→片			I-21
4	*	体下→底→ヘラクズリ→ヘラミガキ	底→ナデ	黒	色		3.2	底→片			I-23
5	*	口→横ナデ 体上→ヘラミガキ	口→横ナデ	におい橙色	灰褐色			口→体上破片			H-23
6	*	口→体上→ヘラミガキ	口→ヘラミガキ	丹	塗	口→丹塗 体上→黄褐色		*			I-22
7	高 環	体部→刷毛目→ヘラミガキ 脚部→ヘラミガキ	体→ヘラミガキ 脚部→シボリ目→刷毛目	*	灰褐色	環部→丹塗 脚部→黄褐色		体下→脚上片	脚部に3孔あり		N-27
8	*	脚部→ヘラミガキ	体部→ヘラミガキ 脚部→シボリ目	浅黄褐色	浅黄褐色			脚部上→片	脚部に2孔遺存		F-23
9	*	脚部→ヘラミガキ	体部→ヘラミガキ	におい橙色	におい褐色			脚部上→片	脚部に4孔あり		E-23
10	器 台	受部→横ナデ→ヘラミガキ	受部→横ナデ→ヘラミガキ	*	におい橙色		(6.0)	受部→片			E-19
11	高 環?	脚部→ヘラミガキ	脚部→ナデ→ヘラクズリ	橙	色	橙	色	(10.9)	脚部→片	脚部に2孔遺存	DE-20
12	*	脚部→刷毛目→横ナデ→ヘラミガキ	脚部→刷毛目→ヘラナデ・横ナデ	におい黄褐色	におい黄褐色		(10.9)	脚部→片	脚部に1孔遺存		N-18
13	*	脚部→ヘラミガキ	脚部→シボリ目→ヘラナデ→横ナデ	丹	塗	におい橙色		脚部→片			M-23
14	*	脚部→刷毛目→ヘラミガキ→横ナデ	脚部→シボリ目→刷毛目→横ナデ	におい橙色	灰褐色		(13.9)	脚部→片	脚部に2孔遺存		DE-20
15	*	脚部→ヘラミガキ	脚部→ヘラクズリ	赤黄褐色	黄褐色			脚部上→片	脚部に3孔あり		H-21
16	*	脚部→ヘラミガキ	脚部→刷毛目→ヘラクズリ	赤	色	橙	色	脚部下→片			H-22

第18図 I・II層出土遺物



観 察 表

番号	器種	製 整 面		色 調		法 量 (cm)			遺存状態	備 考	分類	出土地区
		外 面	内 面	外 面	内 面	器高	口径	底径				
1	甕	口-刷毛目→ヘラミガキ	口-刷毛目→横ナデ	黒褐色	黒褐色		(14.0)		口-片	口縁は複合口縁をなす	A	F-23
2	◇	口-横ナデ 体上-刷毛目→ナデ	口-刷毛目→横ナデ 体上-ナゲツケ→ヘラケズリ→ヘラナデ	にぶい橙色	褐灰色				口下-体上片	頸部に突帯がめぐる		I-21
3	◇	口-横ナデ→ヘラミガキ 体-刷毛目→ヘラミガキ	口-ヘラミガキ 体-オサエ→ヘラナデ	黄褐色	暗褐色		10.6		口-体-片		B	F-23
4	◇	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色				体部破片	複合口縁 複合率に相俟あり	A	E-21
5	◇	口-刷毛目→ヘラミガキ	口-ヘラミガキ	浅黄橙色	浅黄橙色		(21.7)		口-片	口縁は複合口縁をなす	*	E-19
6	◇	口-刷毛目→ヘラミガキ	口-ヘラミガキ	にぶい橙色	◇		(18.8)		口-片	◇	◇	I-21
7	◇	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ	黒色	にぶい橙色		(18.4)		口-片	◇	*	I-22
8	甕	口-横ナデ→ヘラミガキ	口-横ナデ→ヘラミガキ	にぶい橙色	にぶい橙色		(10.5)		口-片		I-B1	◇
9	◇	口-横ナデ 体-底→ヘラケズリ→刷毛目	口-体上-横ナデ 体下-底→ナデ	橙色	にぶい黄褐色	6.7	6.0	3.0	ほぼ完形		I-B2b1	G-18
10	◇	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ	にぶい橙色	◇		(15.2)		口-片			H-23
11	◇	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色		(12.1)		口-片			I-22
12	◇	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色		(15.1)		口-片			G-23
13	◇	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ	◇	淡赤褐色		(14.7)		口-片			F-23

第19図 I・II層出土遺物

屈曲し、さらにその上方で屈曲して外上方に開いている。口縁端部は薄くとがっている。第17図5は、小形のもので体部が屈曲し、内面に稜をもつ。底部はわずかに外方に張り出し比較的安定している。口縁部は、内彎ぎみに外傾する。第17図6は、底部は平底である。体部が丸みを持ち、口縁部で屈曲して内彎ぎみに立ち上がるものである。第17図7は、体部から口縁部にかけてほぼ垂直方向に立ち上がり、内面に稜をもつ。第17図9、10は口縁部が折り返し口縁のもので、内面には、それ程明瞭ではないが稜がみとめられる。第18図1は底部が上げ底で、体部は丸みを持ち、その中央から垂直ぎみに立ち上がるものである。第18図4は底部周縁に粘土を貼り付け、上げ底にしている。第18図5、6は口縁部破片で、口縁部で屈曲し、さらにその上方に稜をもちながら外反するものである。

**高坏**(第18図7～9、11～16) いずれも脚部上半のみで、7、8はやや外反ぎみに、9は直線的に開くものである。11～16は脚部下半がその一部のみで、器台の可能性もある。11～14は直線的に開き、13は裾でさらに大きく開く。12の外面に靨痕がみとめられる。大きさは長さ6.0mm、幅が3.0mmである。

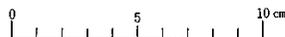
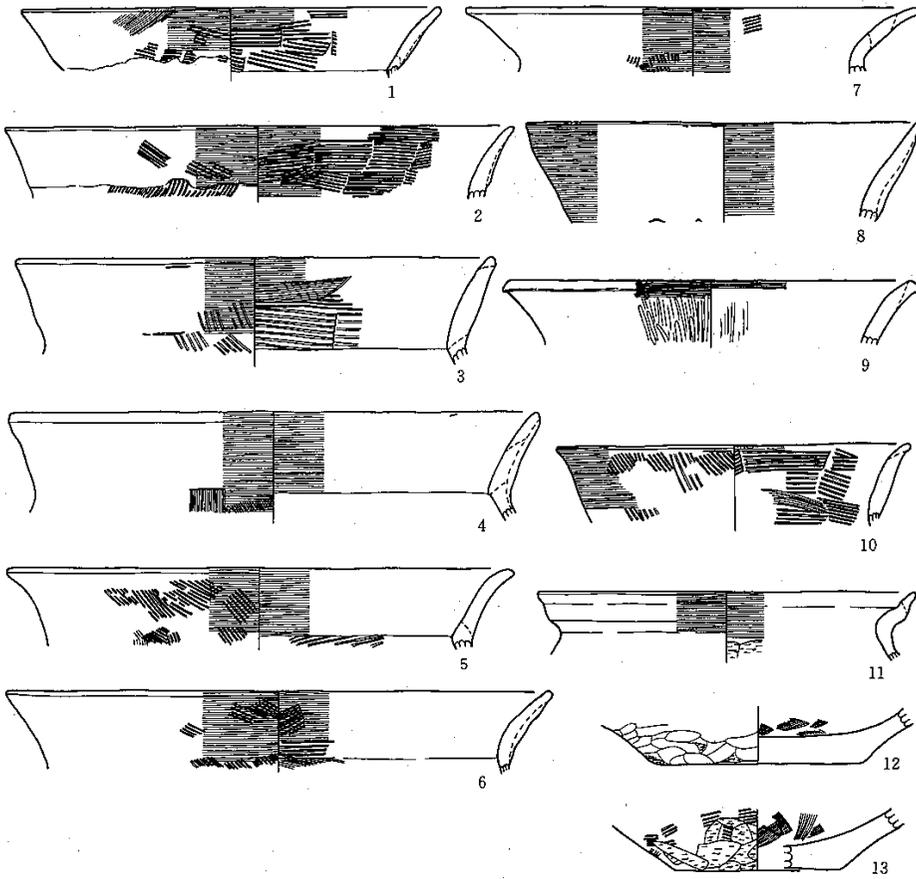
**器台**(第18図10) 底部が屈曲し、内彎ぎみに外傾する受部をもつもので、貫通孔の有無は不明である。

**壺**(第19図1～7) 1は口縁部が複合口縁をなし、外傾するものである。2は頸部に突帯がめぐっている。内面には積み上げ痕がみとめられる。3は口縁部が直線的に外傾する。4～7は口縁部破片で、複合口縁をなすものである。4は複合部に靨痕がみとめられる。靨痕の大きさは長さ6.0mm、幅が3.0mmある。

**甕**(第19図8～13、第20図1～13、第21図1～6) 第19図8は体部が球形に近く、頸部で屈曲し、口縁部が強くと外反するものである。第19図9は小形のもので、体部やや下方に最大径をもつ。さらに頸部で屈曲し、口縁部は垂直に近い角度で立ち上がる。その他の口縁部には器形が外傾するものと外反するものがある。また、口縁部外面に粘土を貼り付けているため、口縁部が肥厚し、頸部との境に段差がみられるものが多くある。第20図9は口縁端部が平坦に作られており、また、色調、調整などから他の土器とはやや異質な感じを受けるものである。

第20図11は口縁部が「S」字状口縁をなすものである。下半はぶ厚く、上半は薄く斜上方につまみ上げられている。第21図1～3の底部は上げ底である。第21図4～6は台付甕の台部である。4は内彎ぎみに開き、端部は平坦に作られている。5、6は台付甕の体部から台部にかけての部分で、体部から緩やかに屈曲し開いている。5は断面から甕と台部の接合方法がうかがわれる。

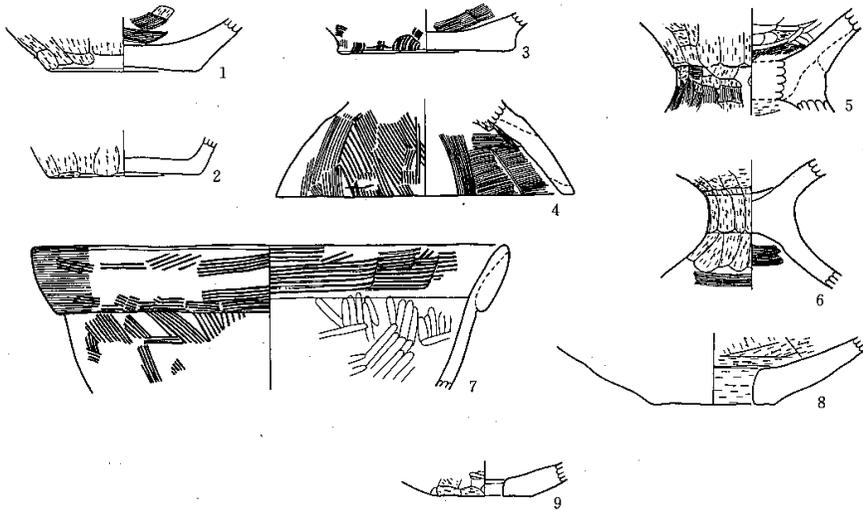
**甗**(第21図7～9) 7は口縁部が折り返し口縁をなすもので、器形は体部がわずかに内彎ぎみに立ち上がり、口縁部が外傾する。内面にはかすかに稜がみとめられる。8、9はともに単孔のものである。



観察表

番号	器種	断面		色		質量 (cm)		遺存状態	備考	分類	出土地区
		外面	内面	外面	内面	器高	口径				
1	甕	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ	明褐色	明褐色	(16.7)	口-片				D-19
2	◇	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ	黒褐色	褐色	(20.2)	口-片				I-22
3	◇	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ→ヘラナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	(19.2)	口-片				H-20
4	◇	口-刷毛目→横ナデ	口-横ナデ	褐色	にぶい褐色	(21.1)	口-片				◇
5	◇	口-刷毛目→横ナデ	口-横ナデ 唇上-刷毛目	浅黄褐色	浅黄褐色	(20.3)	口-片				J-21
6	◇	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ 体上-ナデ	明褐色	にぶい褐色	(21.8)	口-片				H-23
7	◇	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	(18.1)	口-片				E-19
8	◇	口-横ナデ	口-横ナデ	灰白色	灰白色	(15.7)	口-片				H-23
9	◇	口-刷毛目→横ナデ→ヘラミガキ	口-横ナデ→ヘラミガキ	浅黄褐色	褐色	(16.0)	口-片				M-29
10	◇	口-刷毛目→横ナデ	口-刷毛目→横ナデ・ナデ	◇	浅黄褐色	(14.1)	口-片				H-21
11	◇	口-横ナデ	口-横ナデ 唇上-ヘラケズリ	にぶい褐色	黒褐色	(15.1)	口-片				F-23
12	◇	体下-刷毛目→ヘラケズリ→ヘラミガキ 底-木蓋取→ナデ	口-横ナデ 唇上-ヘラケズリ 底-ヘラナデ	◇	にぶい褐色	(8.2)	底-片				G-20
13	◇	体下-刷毛目→ヘラケズリ 底-ヘラケズリ	底-ヘラナデ	極暗赤褐色	黒褐色	(6.6)	底-片				F-23

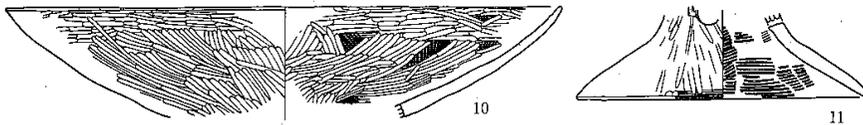
第20図 I・II層出土遺物



(I・II層)

観察表

番号	器種	罫		色		法量 (cm)		遺存状態	備考	分類	出土地区
		外	内	外面	内面	器高	口径				
1	甕	体下~底~ヘラケズリ	底~ヘラケズリ・ヘラナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色			(6.4)	底~片		底1 H-22
2	◇	体下~底~ヘラケズリ	底~ナデ	◇	にぶい褐色			(6.2)	底~片	◇	H-20
3	◇	体下~刷毛目 底~ナデ	底~ヘラナデ	◇	黒褐色			7.2	底~片		I-22
4	◇ (右付)	台部~刷毛目	台部~ヘラケズリ~ヘラナデ	◇	にぶい褐色			(12.2)	台部~片		底2 F-23
5	◇ (右付)	体下~ヘラケズリ 台部上~ヘラケズリ~ナデ	底~ナデ・ヘラケズリ~ヘラミガキ 台部上~ヘラケズリ	◇	灰褐色				体下~台部 上~片	◇	N-18
6	◇ (右付)	体下~ヘラケズリ 台部上~ヘラケズリ~ナデ	底~ナデ 台部上~ナデ	◇	灰褐色				体下~台部 上~片	◇	N-20
7	甕	口~刷毛目 体下~刷毛目 底~ナデ	体下~ヘラミガキ	◇	淡黄褐色			(19.9)	口~体~片		M-25
8	◇	体下~底~ヘラケズリ	体下~底~ヘラケズリ	にぶい褐色	にぶい褐色			(5.1)			孔径(3.2) E-18
9	◇	体下~底~ヘラケズリ~ヘラミガキ	体下~底~ヘラケズリ	にぶい褐色	にぶい褐色			(4.0)			孔径(1.5) M-26

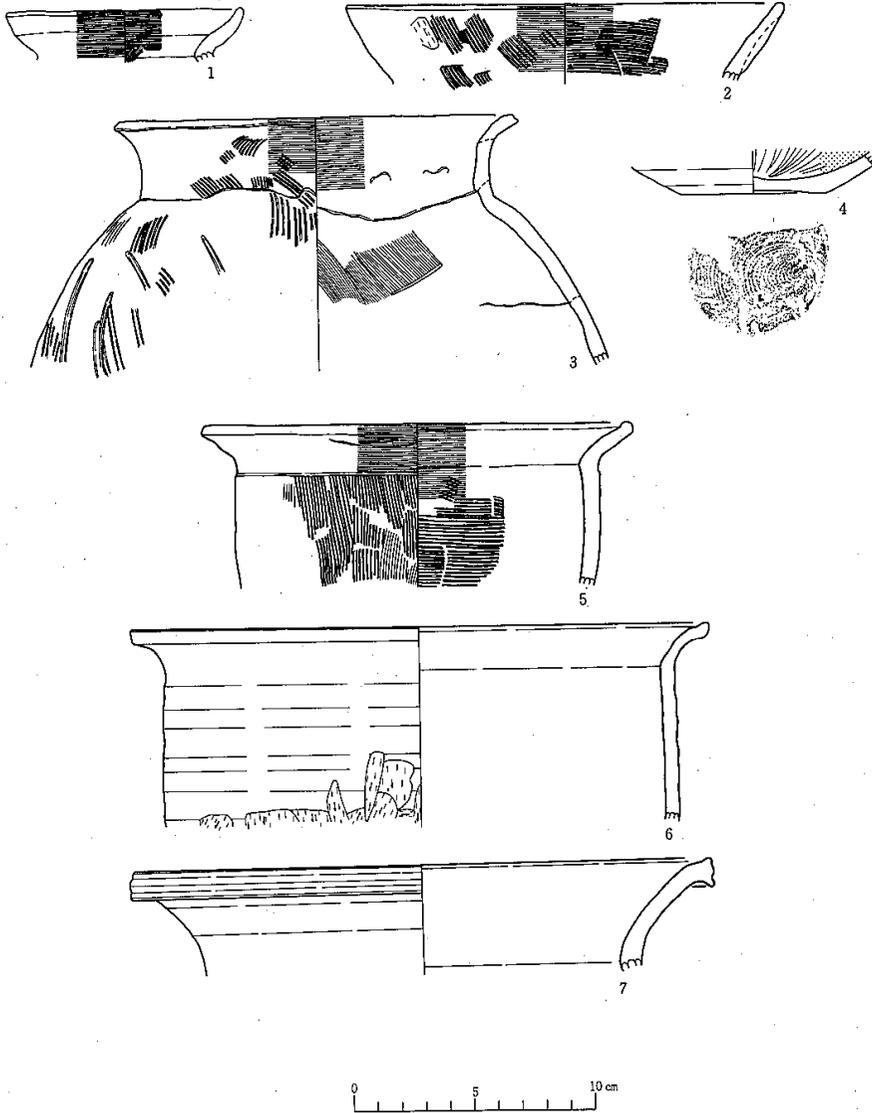


0 5 10 cm (地区不明)

観察表

番号	器種	罫		色		法量 (cm)		遺存状態	備考	分類	
		外	内	外面	内面	器高	口径				底径
10	高杯	杯部~ヘラミガキ	杯部~刷毛目~横ナデ~ヘラミガキ	にぶい褐色	にぶい褐色			(23.0)	杯部~片		
11	◇?	脚部~ヘラケズリ・横ナデ~ヘラミガキ	脚部~刷毛目	◇	褐色			(12.2)	脚部~片		脚部に1孔遺存

第21図 I・II層および地区不明の出土遺物



観察表

番号	器種	器 形		色 調		法 量 (cm)	遺 存 状 態	備 考	分 類
		外 面	内 面	外 面	内 面				
1	甕	口一横ナデ	口一横ナデ・ナデ	灰黄褐色	にぶい褐色	(9.8)	口一残		
2	〃	口一ヘラケズリ・刷毛目一横ナデ	口一刷毛目一横ナデ	黒 色	にぶい黄褐色	(18.2)	口一残		
3	〃	口一刷毛目一横ナデ 体一刷毛目	口一横ナデ 体一ヘラケズリ	にぶい褐色	灰黄褐色	(16.8)	口一体上一残		I-B1
4	坏	体下一ロクロナデ 底一回転赤切	体下一底一ヘラミガキ・黒色処理	*	*		5.0 体下一底一残	底部外面に靑灰 番号	II
5	甕	口一横ナデ 体上一刷毛目	口一横ナデ 体上一刷毛目	橙 色	橙 色	(18.0)	口一体上一残		I-B2b II
6	〃	口一体上一ロクロナデ 体下一ヘラケズリ	口一体上一ロクロナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	(24.1)	口一体上一残		II
7	須恵器一甕	口一ロクロナデ	口一ロクロナデ	黄 灰 色	黄 灰 色	(24.0)	口一残		

第22図 地区不明の出土遺物

## 出土地区不明の土器

調査時にあげ土から出土したもの、調査後の遺物の移動により、地区、層位が不明になったものなどを一括した。

### 土師器

**坏**(第22図4) 底部は回転糸切り技法で切り離され、その後の再調整はみとめられない。内面にはへらミガキ、黒色処理が施されている。なお、底部外面の周縁部に靨痕がみとめられた。靨痕の大ききは長さ6.5mm、幅3.2mmである。

**高坏**(第21図10・11) 10は坏部で、わずかに内彎しながら外傾するものである。

**甕**(第22図1～3、5・6) 3は、体部がほぼ球形をなし、頸部で屈曲し、口縁部が直立した後外反するものである。口縁端部は平坦に作り出されている。内面には成形時の積み上げ痕がみとめられる。また、口縁端部はわずかに上方につまみ上げられている。6は製作に際しロクロが使用されているものである。体部は直立し、頸部で屈曲し外反するもので、口縁端部はわずかに斜上方につまみ上げられている。

### 須恵器

**甕**(第22図7) 口縁部がゆるやかに外反するものである。口縁端部は上下にややのびて、幅広い縁帯状をしている。

## 4. その他の出土遺物

出土遺物には、縄文土器、弥生土器、陶器、石器、紡錘車、古銭がある。これらの多くは1、2層から出土したが弥生土器、石鏃には住居跡の床面、堆積土、掘り方堆積土などから出土したものもある。

### 縄文土器(第23図1)

口縁部破片で1点のみである。外面に太い沈線文とLRの縄文が施文されている。

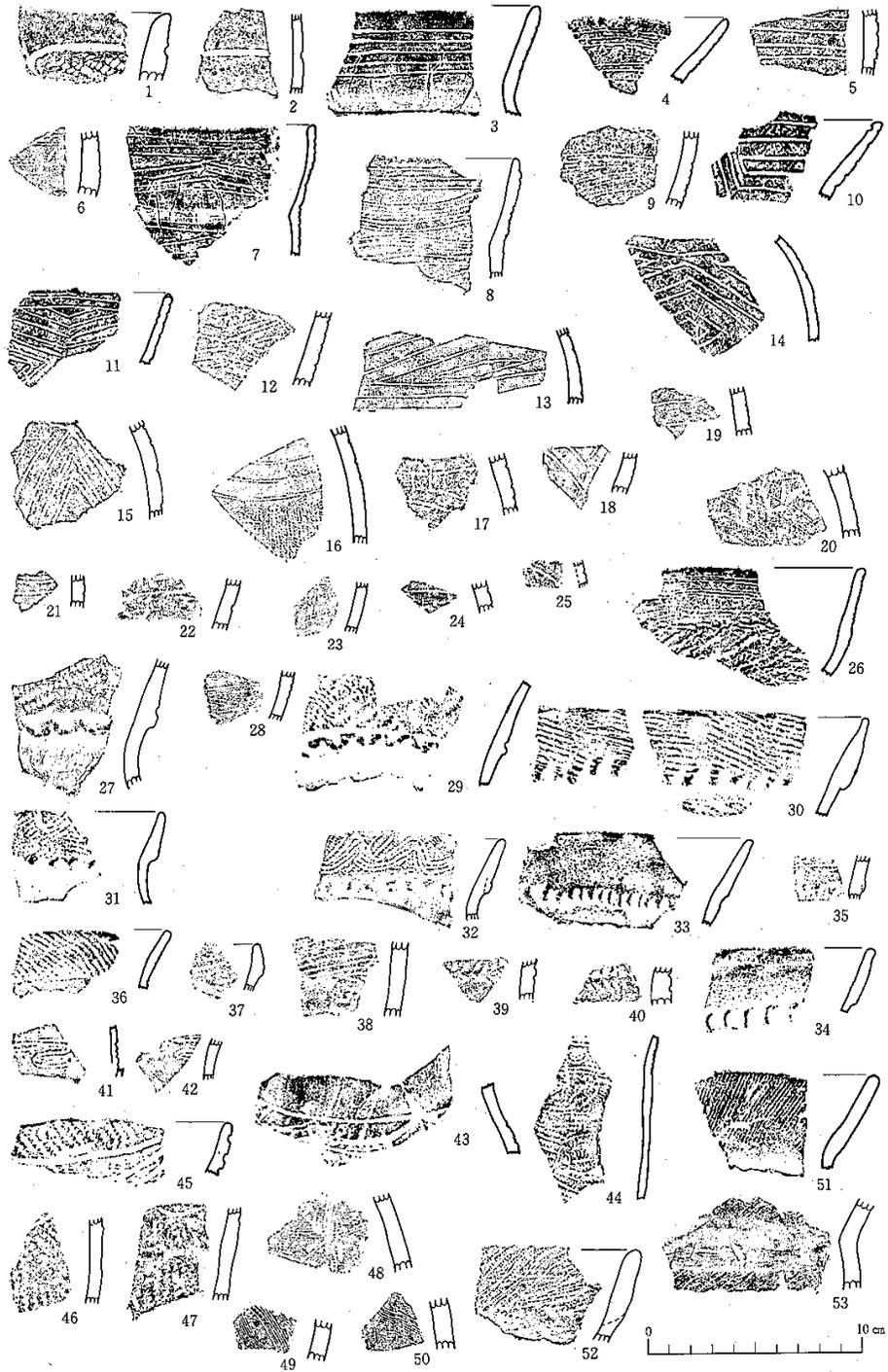
### 弥生土器

およそ160点程出土している。これらはすべて破片で全体の器形のわかるものはない。その中で実測できたものは、わずか底部破片2点にすぎず、他は拓影図で示した。ここではこれらの弥生土器の分類を含めた記述を行い、第IV章の考察では、それらの編年的位置づけについてのみ記することにする。

弥生土器はおもに文様の特徴によって、13類に分類される。

第1類(第23図2) 太い沈線によって文様が描かれるものである。口縁部に近い破片とみられるが、幅4mmの沈線が横方向に施文される。内面は、ナデ調整がなされている。

第2類(第23図3～25) 細かい篋描きの沈線で横走平行線文、山形平行線文、連弧文、重三角、四角文、同心円文、渦巻文などを描いているものである。3、4は口縁部破片で、3は頸部で



第23圖 出土遺物

軽く屈曲し、直線的に外傾する。外面には5本の横走平行線文が描かれている。4は体部から直線的に大きく開く。外面には3本の横走平行線文が2段にわたって描かれている。5、6は体部破片で、5は4本の、6は2段に3本ずつの横走平行線文がみとめられる。後者ではさらに縦方向の2本の沈線が加わっている。7、8は体部から口縁部にかけての破片で、頸部で軽く屈曲し、口縁部が内彎ぎみに立ち上がるものである。7は外面に横走平行線文と山形平行線文が描かれている。8は外面に横走平行線文と連弧文が描かれている。9は体部破片で、外面に横走平行線文と山形平行線文を描き、さらに縦方向の沈線を加えている。10、11は口縁部破片で、10は頸部でわずかに屈曲し、直線的に開くものである。外面には重四角文が、内面には1本の横走沈線文が描かれている。11は口縁部が直線的に外傾するもので、口縁端部に小突起がみとめられる。外面には横走平行線文と菱形の重四角文が描かれている。12は沈線間が交互に丹塗されている。15は体部破片で、外面に重三角文が描かれている。16～25は体部破片で、外面に同心円文や渦巻文が描かれている。17にはさらに縦方向の沈線が加えられている。

第3類(第23図26、28) —幅3mm程の平行工具によって沈線文が描かれるものである。26は体部から口縁部にかけての破片で、口縁部外面に横走平行線文が3組描かれている。28は体部破片で、横走平行線文が4組程みとめられる。

第4類(第23図27、29) —口縁部が複合口縁をなし、その下端に刺突波状文がみとめられるものである。29には刺突波状文の上方にLR原体の単節縄文がみとめられる。

第5類(第23図30～35) —口縁部が複合口縁をなし、その下端に指頭状の圧痕が連続的に加えられているものである。31と32は、同一個体とみられるものである。複合部にLR+2r原体の付加縄文が施された後、平行工具による波状文が描かれている。33、34の複合部は無文である。

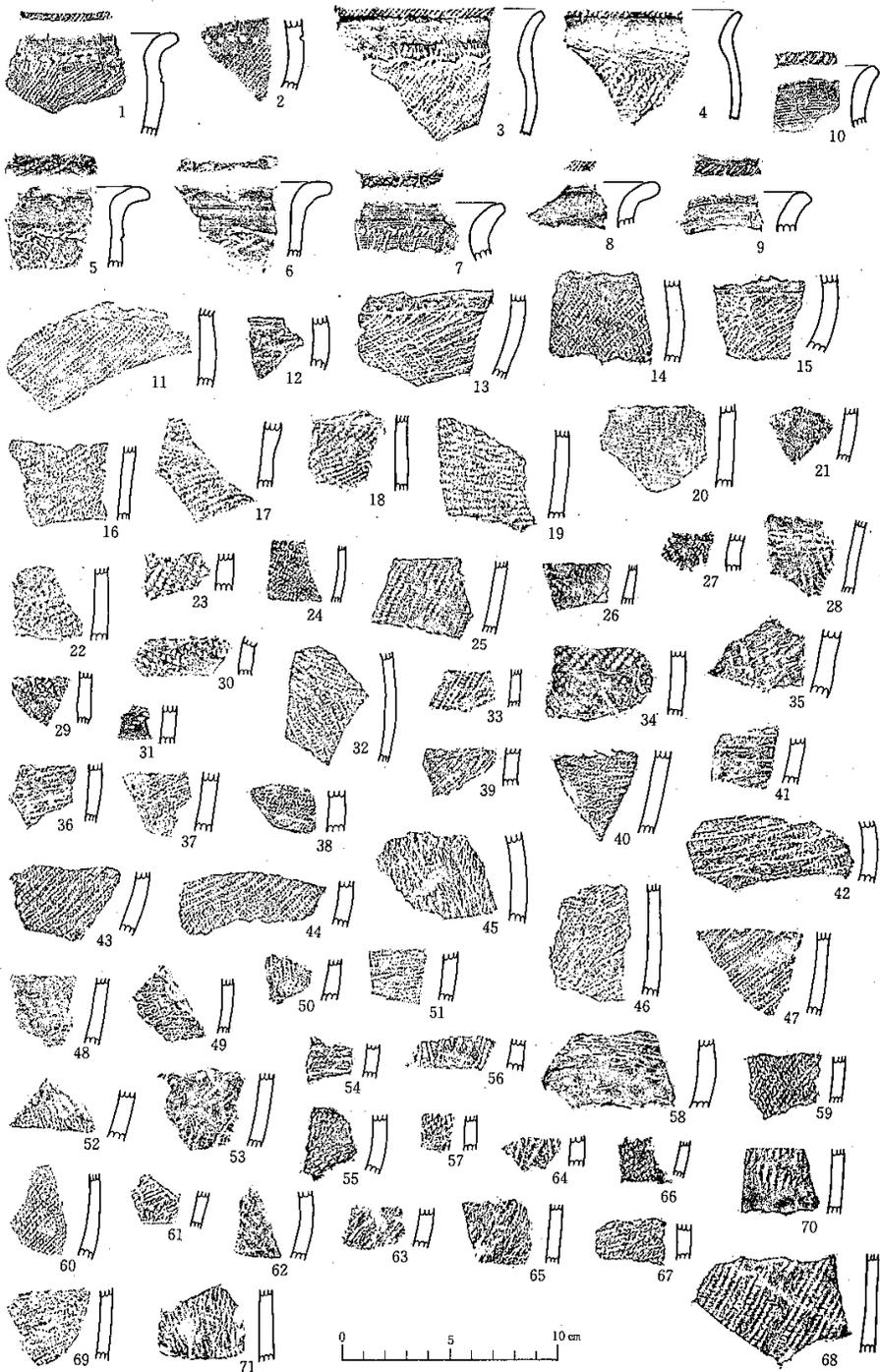
第6類(第23図36～38) —口縁部が複合口縁をなし、複合部に縄文や、撚糸文が施されているものである。36はLR原体の単節縄文が、38はL原体の撚糸文が施されている。

第7類(第23図39・40) —八の字状に列点刺突文の描かれるものである。同一個体と思われる。

第8類(第23図41～44) —比較的太目の平行工具で波状文や連弧文を描くものである。41、42は同一個体と思われる。43は連弧文の上位に横走の沈線文が描かれている。

第9類(第23図45～47) —比較的太目の篋描工具で縄文施文後にわずかに弧状をなす沈線が数本描かれている。45は口縁部破片で縄文施文後、弧状の沈線文が描かれている。46、47は器面に凹凸があり、作りが粗雑である。

第10類(第23図48～50) —櫛様の工具により、文様の描かれるものである。3点あるが同一個体と思われる。これらは、他の弥生土器に比較して、色調が明るく、内外面が浅黄燈色をしている。外面はヘラミガキ調整後5～8本の細かい櫛目で文様が描かれている。スジは刷毛目の



第24図 出土遺物

ものに比べ細く、浅い。

第11類(第23図51～53) —口縁部がわずかに肥厚し、外面には頸部を除いて縄文が施文されるものである。52はわずかに内彎ぎみに立ち上がる。口縁部外面にはLR原体の単節縄文施文後、原体Rの撚糸文が施文されている。53は頸部で屈曲するもので、口縁部と体部の外面にLR+Rの原体の付加縄文が施されている。

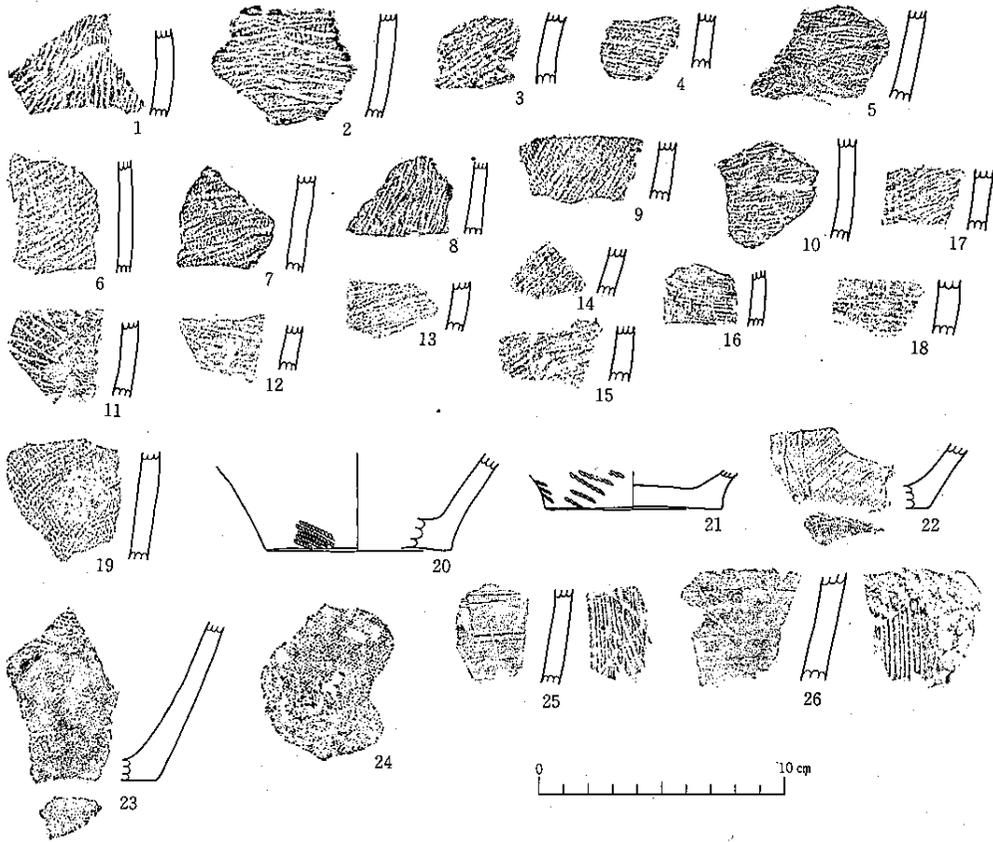
第12類(第24図1・2) —器形が頸部で屈曲し、口縁部が強く外反するもので、甕形土器といわれているものである。頸部には列点刺突文が描かれている。1は体部から口縁部にかけての破片で、口縁端部と体部にはLR原体の単節縄文が施され、その後頸部に、向かって右方向からの刺突が連続して施されている。

第13類(第24図3～15) —器形は第12類に近似し、頸部に綾絡文が特徴的にみとめられるものである。3～6は体部から口縁部にかけての破片で、口縁端部と体部には単節縄文や付加縄文が、頸部には綾絡文が施されている。中には縄文の末端変化のみとめられるものもある。7～10は口縁部破片で、口縁端部にLR原体の単節縄文やLR+R、LR+2R原体の付加縄文が施される。7の頸部には綾絡文と縄文の末端変化のみとめられる。11～15は体部破片である。11～13は頸部に綾絡文、体部にはLR+2R原体の付加縄文やR原体の撚糸文が施されている。14・15は綾絡文のみとめられる。体部にLR原体の単節縄文、LR+Rの付加縄文が施されている。

第14類(第24図16～71、第25図1～24) —その他の地文だけのものを一括した。体部の地文には単節縄文、羽状縄文、撚糸文、付加縄文がある。単節縄文にはLR原体のもの(第24図16～24)、RL原体のもの(第24図25～31)、 $L_{\perp}^R$ のもの(第24図32・33)がある。羽状縄文には第24図34がある。撚糸文には第24図35～71、第25図1がある。原体にはR、L、rがあるが、Rが圧倒的に多い。また、第25図2・3はLR原体の単節縄文を施文した後、R原体の撚糸文を施文するものである。付加縄文には第25図4～19がある。原体にはLR+RとLR+2Rが多くみられるが中には、原体の不明なものもある。第25図20と21は体部下半から底部にかけ下の破片である。体部外面下半に20はRL原体の単節縄文が、21はL原体の撚糸文のみとめられる。第25図22～24は底部外面に布圧痕のみとめられるものである。22と23の体部外面にはそれぞれLR+2R原体の付加縄文、R原体の撚糸文のみとめられる。

#### 陶器 (第25図25・26)

同一個体とみられる破片が数点出土している。すべて体部破片で、外面はロクロ調整し、内面はロクロ調整した後、5～7本単位の筋目を縦方向に入れている。胎土は均質で、軟質で、色調は内外面とも灰白色である。摺鉢と考えられる。



第25図 出土遺物

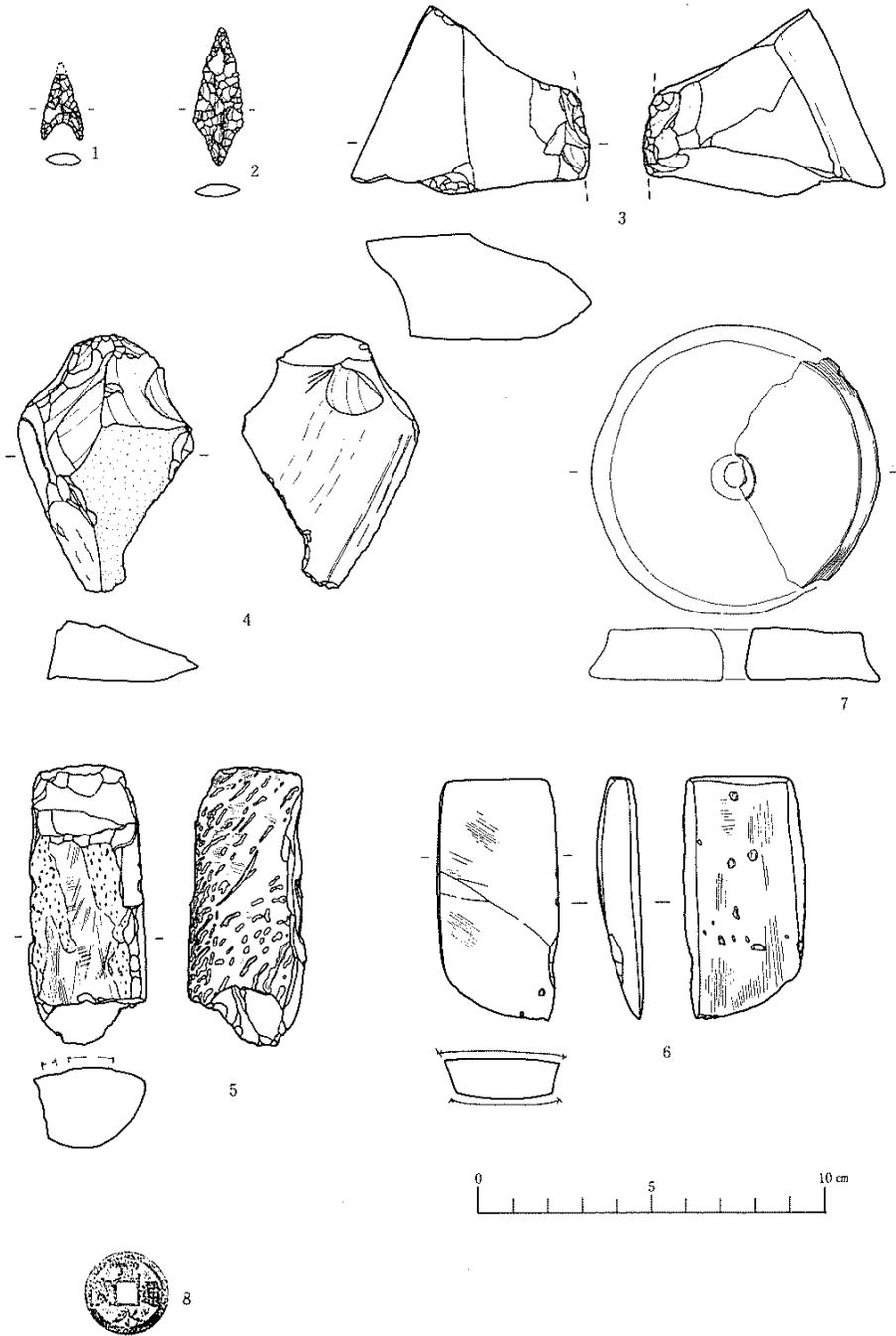
**石器**(第26図1~6)

石鏃(1・2)1は先端がわずかに欠ける。基部が凹状で、側縁は平坦に近いものである。両面とも全面に調整剥離が行なわれている。2は基部が凸状で、その差ぐりは浅いものである。側縁は平坦である。両面とも全面に調整剥離が行なわれている。

打製石斧(3) 打製石斧の一部とみられる。両面とも側縁から約1cm程、調整加工している。

剥片(4)縦長の剥片で打面は平坦打面である。腹面にはバルバスカーがみられる。背面は自然面と剥離面からなり、剥離痕は腹面の剥離に対し、任意の加撃方向を示す。末端は羽毛状末端である。

砥石(5・6)5は棒状のもので両端は欠損している。断面がほぼ半円をなす。砥磨面は平坦面のみで、不定方向からの擦痕がみとめられる。その他の丸みをもつ面には製作時の敲打痕と研磨痕がみられる。あるいはこの砥石は石棒を転用したものとも考えられる。6は平面形がほぼ長方形をなすものである。砥磨面は、上下両面の2面でそれぞれに縦方向の擦痕がみとめら



第26図 出土遺物

れる。上下両面はわずかにふくらみ、左右両側面はわずかに凹んでいる。

**紡経車**(第26図7)

土製のものである。全体の $\frac{1}{3}$ 程遺存している。全体形は扁平な円錐台状をなすものと考えられ、大きさは径8cm前後と推定される。厚さは中心部で1.5cmで、貫通孔の大きさは不明である。全面にナデ調整がされている。

**古銭**(第26図8)

寛永通宝が1点出土している。

第2表 石器・剝片計測表

図版番号	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	出土地区
第26図1	石 鏃	(1.8)	1.2	0.3			第3住
◇ 2	◇	3.95	1.4	0.4			◇
◇ 3	打製石斧	(5.5)	(6.8)	3.1	110	安 山 岩	E-18
◇ 4	剝 片	7.4	5.0	1.6	54	頁 岩	
◇ 5	砥 石	(8.0)	3.2	2.5	94	粘 板 岩	D-25
◇ 6	◇	7.0	3.5	1.2	41	石英安山岩質凝灰岩	L-20

## IV. 遺構、遺物に関する考察と問題点

### 1. 出土土器の分類と年代について

今回の調査における出土土器には、前述したように縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器、陶器がある。その内、ここでは縄文土器、弥生土器、土師器の中で実測図、拓影図で示したものを対象とする。

#### 〔縄文土器〕

縄文土器は1点のみ出土している。文様や器壁の厚さなどからみて中期末から後期初頭に位置づけられるものと考えられる。

#### 〔弥生土器〕

弥生土器は前述したように主に文様の特徴から14類に分類された。

第1類は太い沈線文を特徴とするもので、器壁が薄く内面にはナデ調整がみられる。太い沈線の特徴から、大泉式(伊東：1957)に属するものと考えられるがなお検討を要する。

第2類は細い篋描きの沈線で文様が描かれているものである。文様には横走平行線文、山形平行線文、連弧文、重三角、四角文、同心円文、過卷文などがある。これらは西裏遺跡出土の長頸壺を標式として設定された円田式(伊東：1957)の文様に共通する。類例には、町内では大山遺跡(藤沼：1971)、下永野遺跡、上野遺跡(以上白石市：1976)出土のものがある。また周辺では、村田町北沢遺跡(斉藤・真山：1978)、大河原町台の山遺跡(阿部・千葉：1980)から出土しており、宮城県では蔵王町、村田町に多く分布する土器である。

第3類は平行工具による沈線文が描かれるものであり、これは名取市十三塚遺跡出土の土器を標式として設定された十三塚式(伊東：1957)、福島県原町市桜井遺跡出土の土器を標式として設定された(伊東：1955)の大きな特徴とされている。類例としては、塩釜市崎山囲洞窟遺跡出土の土器がある。(宮教委：1965)。

第4～6類は口縁部が複合部口縁をなすものである。第4、5類は複合部の下端にそれぞれ刺突波状文、指頭状の圧痕を施すのが特徴である。後者には複合部に平行工具による波状文を描くものがある。第6類は複合部に縄文や捺糸文を施している。これらは、複合口縁や刺突波状文などから、天王山式土器に近いものと考えられる。ただし、厳密にはこれらはむしろ天王山式の標式となった福島県天王山遺跡出土資料(坪井：1953)よりも、天王山式に後続すると考えられている同県踏瀬大山遺跡出土資料(中村：1976)に近似している。宮城県内の類例では名取市西野田遺跡(丹羽化：1974)、古川市三丁目山遺跡(佐藤：1972)、花山村大穴遺跡(興野

:1978)の出土土器の中に見出すことができる。

第7類は天王山式にみられる刺突波状文のくずれたものと理解することができる。類例には古川市の三丁目山遺跡出土土器がある。

第8、9類は比較的太目の沈線で、波状文、連弧文などを描くもので、天王山式土器に多くみられる特徴である。

第10類は櫛様の工具で文様が描かれているものである。色調からみると土師器に近い。櫛様工具による文様施文は関東北部から福島県にかけて分布する十王台式土器にみられる技法であり(山内:1967)波状文、連弧文などが多く描かれている。本資料は十王台式の櫛描文に比較してやや繊細な感じがする。周辺ではこのような資料は皆無に等しく、はたして十王台式に併行するものなのか現段階でははっきりいえない。類例を待ちたい。

第11類は、頸部を除き縄文が施されるもので、口縁部がわずかに肥厚している。類例は少ないが、円田盆地では第13類の土器とともに出土している遺跡がいくつかみられる(白石市:1976)。

第12、13類は器形が頸部で屈曲し、口縁部が強く外反する甕形土器である。前者は頸部に利点刺突文、後者は頸部に綾絡文が施されるのが特徴である。頸部に列点刺突文を施すのは、柵形罎式の甕によくみられ(伊東:1955)、それ以前の大泉式にもある技法である(志間:1971)。頸部に綾絡文が施されるものは、柵形罎式にもみられるが(杉原:1936)、円田盆地の各遺跡(白石市:1976)、村田町北沢遺跡(斉藤・真山:1978)、福島県福楽沢遺跡(伊東他:1971)、山形県堂森H遺跡(横尾:1973)などで円田式に伴って出土しており、また、桜井式にもみられることから(馬目:1978)、円田式や桜井式にみられる甕の特徴といえる。

第14類は、地文として単節縄文、撚糸文、付加縄文などが施文されているものである。これらの時期を決定づけることはできないが、付加縄文は、円田盆地の遺跡では円田式土器の地文によくみとめられるものである。

以上をまとめると、第1類は大泉式、第2類は円田式、第3類は十三塚式(桜井氏)、第4～9類は天王山式にそれぞれ位置づけられる。その他の類は明確に時期を限定することはできない。

## 〔土師器〕

### ①分類

土師器は本遺跡出土土器の大部分を占めている。器種には坏、高坏、器台、壺、甕、甑、德利形土器がある。これらの内、坏、高坏、壺、甕はそれぞれ製作に際しての技法や形態的特徴によっていくつかに分類することができる。以下の分類は器形の比較的明らかなもので、原則として遺存状態が全体の3分の1以上の図示遺跡を対象としている。なお、高坏、器台、壺、

甌、徳利形土器には製作時にロクロを使用したものはみられない。

**坏**—坏には製作に際し、ロクロを使用していないもの(I)と使用しているもの(II)とがある。前者は器形の特徴によって2種類に分けられる。

A類—内外面か、またはそのどちらかに稜や屈曲をもつもの。

B類—内外面ともに稜、屈曲をもたないもの。

(坏I—A類)

製作に際しロクロを使用していないもので、内外面か、またはそのどちらかに稜、屈曲をもつものである。屈曲の位置によって4類に細分される。

A1類—一部の内面に稜、外面に屈曲をもつものである。いずれも稜、屈曲から上の部分はわずかに内彎ぎみに立ち上がる。底部はすべて平底であるが、その形態には、a：丸底に近いもの、b：やや外方に張り出すものがある。A1a類は内外面ともヘラミガキ調整されており、その中の1例はほぼ全面に円塗が施されている。A1b類の体部は外面が刷毛目、内面がヘラナデ調整されている。器面には凹凸があり、前者に比較して調整が雑である。

A2類—一部と口縁部の2段にそれぞれ稜、屈曲をもつものである。体部は丸みをもち、口縁部は外傾する。

A3類—口縁部の内面に稜、外面に屈曲をもつものである。体部は丸みをもち、口縁部はわずかに内彎しながら立ち上がる。これらの中には屈曲部のやや上方にかすかな稜のみられるものもある。底部のわかる例はすべて平底で、丸底に近い形態のものである。体部の器面調整は、外面はヘラケズリのものでヘラミガキのものがある。内面はヘラナデのものが多い。中に円塗の施されたものもみられる。

A4類—口縁部内面に稜をもち、外面に屈曲のみられないものである。体部は丸みをもち、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。皮部は平底であるが、その形態に、a：丸底に近いもの、b：やや外方に張り出すものがある。A4a類の体部内外面は、ヘラミガキ調整されている。A4b類の体部外面は刷毛目、ヘラケズリ、内面は刷毛目、ヘラナデ調整されている。また、器面に凹凸がみられ、比較的作りが雑である。

(坏I—B類)

製作に際しロクロを使用していないもので、内外面ともに稜、屈曲をもたないものである。器形的特徴によって、3類に細分される。

B1類—一部から口縁部にかけて内彎するものである。外面は刷毛目、内面は横ナデ調整されている。

B2類—一部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がるものである。底部は平底で、やや

外方に張り出している。内外面ともナデ調整されている。

B3類—一部から口縁部にかけて直線的に大きく開くものである。底部は平底で、やや上げ底である。内面は刷毛目調整されている。

(坏Ⅱ類)

製作に際しロクロを使用しているものである。底部切り離し技法は回転糸切りにより、その後の再調整はみられない。内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

**高坏**—全体の器形のわかるものは2点のみである。これらは器形のちがいによって分けられる。

A類—坏部は体部で屈曲し、口縁部が外傾するもので、坏Ⅰ—A1 a類の器形に近似する。脚部は外反し、裾で大きく外方に開くもので、その中央に孔が6個あけられている。外面全体と坏部内面上半はヘラミガキ調整され、円塗が施されている。

B類—坏部は、体部から口縁部まで直線的に外傾するものである。脚部はわずかに外反しながら円錐台状に開く。その中央に孔が3個あけられている。外面はヘラミガキ調整され、円塗が施されている。

**器台**—全体の器形のわかるものは1点のみである。脚部に比較して、受部が小さく浅いものである。器形は受部はわずかに内彎しながら大きく開くもので、脚部はわずかに外反しながら円錐台状に開いている。受部から脚部に通じる貫通孔をもち、脚部には孔が4個あけられている。受部の内外面と脚部外面はヘラミガキ調整されている。

**壺**—ここで壺としたものは、口縁部形態が複合口縁をなすものと、甕と比較して頸部の屈曲が強く、口縁部が長いものである。口縁部形態によって2類に分けられる。

A類—口縁部が複合口縁をなすもの。

B類—口縁部が単純口縁のもの

(A類)

口縁部が複合口縁をなすもので、さらに頸部に突帯のめぐるもの(1類)と、そのみられないもの(2類)に分けられる。なお、体部の器形については不明である。

A1類—頸部に突帯のめぐるものである。突帯には櫛様のものによる刻目が施されている。調整は外面がヘラミガキのものと、横ナデのものがあり、内面はともにヘラミガキである。

A2類—頸部に突帯のみられないものである。さらにa:複合部に縄文が施されるものと、b:そのみられないものに分けられる。A2 a類は縄文施文部を除いて、ヘラミガキ調整さ

れ、円塗が施されている。A2b類は内外面ともヘラミガキ調整されている。

(B類)

口縁部が単純口縁のものである。従来、坩と呼ばれてきたものに近い。底部は平底で、体部はわずかに横に長い球形をなしている。頸部で屈曲した後、口縁部は直線的に外傾する。外面と口縁部内面はヘラミガキ調整が多く、中には円塗の施されているものもある。

なお、破片のため上記の分類には含められなかったものに円形浮文の付いた土器がある。

**甕**—甕には製作に際し、ロクロを使用していないもの(I)と、使用しているもの(II)とがある。前者は、口縁部形態によって2類に分けられる。

A類—口縁部が屈曲し、いわゆる「S」字状口縁をなすもの。

B類—口縁部が屈曲しないもの。

(甕I—A類)

製作に際しロクロを使用していないもので、口縁部が「S」字状口縁をなすものである。3点出土しているが、いずれも口縁部破片である。内外とも横ナデ調整されている。

(甕I—B類)

製作に際しロクロを使用していないもので、口縁部が単純口縁のものである。これはさらに口縁部の器形によって2類に細分される。

B1類—口縁部が外反するものである。体部はほぼ球形をなすものとみられる。調整は主にヘラミガキのものと、刷毛目のものがある。

B2類—口縁部が外傾するものである。これはさらに口縁部がa：肥厚するもの、b：肥厚しないものに分かれる。B2a類は口縁部が粘土の貼り付けによって肥厚するもので、中には頸部との境に段差のみられるものもある。体部はほぼ球形をなしている。体部の調整は外面はヘラナデか刷毛目、内面はヘラナデが多い。B2b類は、さらに体部の形態によって、i：ほぼ球形をなすもの、ii：長胴をなすものに分かれる。B2b i類には底部が平底のものがみられる。また、中には極めて小形のものもある。体部の調整では外面は刷毛目、内面はヘラナデのものが多い。

なお、底部だけの資料のため上記の甕の分類には含められなかったものについて類別しておきたい。ただし、これらの中には壺、坏の底部になるものもあるかもしれない。

1: 平底のものである。これらの多くは上げ底をなしている。体部下半から底部にかけての調整では、外面は刷毛目かヘラケズリ、内面はヘラナデのものが多く。

2: 台付のものである。器面調整には主に刷毛目のものとヘラケズリのものがある。

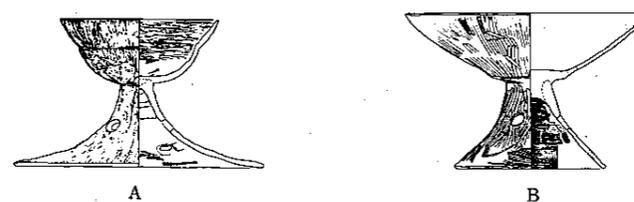
これらの底部の多くは、上記の分類された甕の底部形態をなす可能性が強い。

第3表 土師器分類表

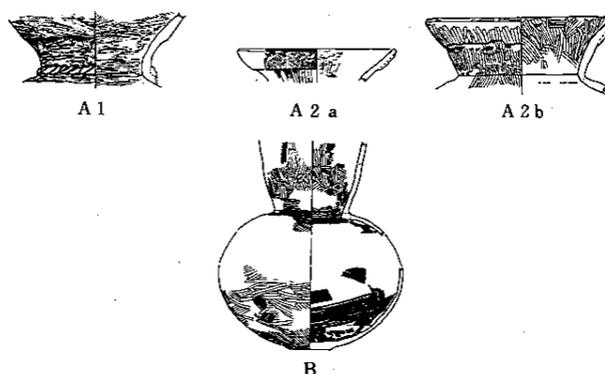
坏		稜、屈曲の位置	底部の形態
I (ロクロ不使用)	A. 稜、屈曲をもつもの	1. 体部内外	a. 丸底に近い平底
			b. やや外方に張り出す平底
		2. 体部と口縁部の内外	
		3. 口縁部内外	
B. 稜、屈曲をもたないもの	体部から口縁部にかけての器形	4. 口縁部内	a. 丸底に近い平底
			b. やや外方に張り出す平底
		1. 内彎するもの	
		2. 丸みをもって立ち上がるもの	
II (ロクロ使用)			



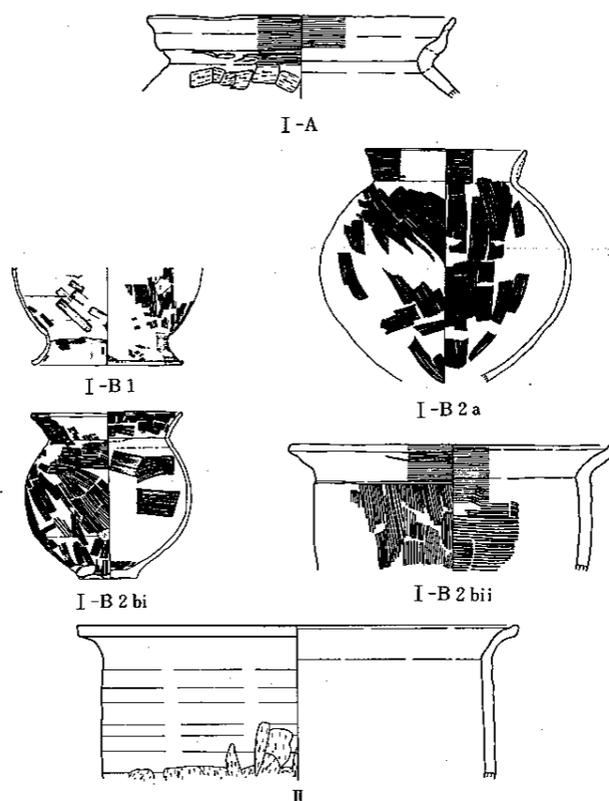
高坏	
A.	坏部：体部内外に稜、屈曲をもつもの 脚部：強く外反し、裾で大きく開くもの
B.	坏部：体部から口縁部にかけて直線的に開くもの 脚部：やや外反し、円錐台状に開くもの



壺	
A. 複合口縁	1. 頸部に突帯のめぐるもの
	2. 頸部に突帯のないもの
B. 単純口縁	



甕			
I (ロクロ不使用)	A. 「S」字状口縁		
	B. 単純口縁	口縁部の器形	
		1. 外反	
		2. 外傾	a. 口縁部が肥厚するもの b. 口縁部が肥厚しないもの
底部	1. 平底のもの	i. 体部がほぼ球形 ii. 体部が長胴形	
	2. 台付のもの		
II (ロクロ使用)			



(甕Ⅱ類)

製作に際しロクロを使用しているものである。1点のみである。体部が長胴形で、頸部で屈曲し口縁部が外反するものである。外面の体部下半は、ロクロ調整後、ヘラケズリ調整が行われている。

**甌**—甌には全体の器形のわかるものはない。口縁部から体部にかけての資料は、全体形が鉢に近いものと思われる。口縁部は複合口縁をなし、口縁部内外は横方向の刷毛目と体部外面は縦方向の刷毛目調整がされている。また、底部資料から単礼式のものと考えられる。

**徳利形土器**—3点出土しているが、全体の器形のわかるものは1点である。底部は平底である。頸部には櫛様のもので刻目を施した突帯がめぐっている。

## ②土師器の組み合わせと年代について

土師器は前項のように分類された。次に、それらがどのような共伴関係、組み合わせにあるかを検討してみたい。第1住居跡の共伴関係をなす土器には、住居跡床面、貯蔵穴状ピット内出土土器と柱穴と考えられたピット出土の土器がある。これらには坏Ⅰ-A1a、A3類、高坏A、B類、器台、壺A1、A2b、B類、甕Ⅰ-B1、B2a、B2bi類があり、他の住居跡に比較して組み合わせの器種が揃っている。第2住居跡の共伴関係を示す土器には住居跡床面出土の土器がある。

これには、器台、甕Ⅰ-B1類がある。第3住居跡の共伴関係を示す土器には、住居跡床面、貯蔵穴状ピット内出土の土器がある。これらには坏Ⅰ-A3、B1類、甕Ⅰ-B2a類、徳利形土器がある。以上の各住居跡の共伴土器は、器種の組み合わせという点でちがいを示すが、その中にお互い共通するものを含んでいる。第1住居跡と第2住居跡の器台、甕Ⅰ-B1類、第1住居跡と第3住居跡の坏Ⅰ-A3類と甕Ⅰ-B2a類がそれである。また、その他の共通しない器種も、時期差にもとづくものではなく、むしろ、同一時期の器種組成を互いに補完する関係にあるものと思われる。

以上から3軒の住居跡における組み合わせを整理すると、坏Ⅰ-A1a、A3、B1類、高坏A、B類、器台、壺1、A2b、B類、甕Ⅰ-B1、B2a、B2bi類、特殊土器となる。

東北地方南部の土師器編年は、氏家和典氏の「東北土師器の形式分類とその編年」(氏家:1957)でその大綱がたてられた。それによると、上記の組み合わせの成立した土師器群は、土師器の最古型式である塩釜式に比定される。

次に、住居跡堆積土やⅠ、Ⅱ層出土などの、遺構に伴わず、上記の組み合わせには含めること

第4表 図示土師器集計表

	坏											高坏		器台	蓋				甕					変II	甌	固形土器								
	A1a	A1b	A2	A3	A4a	A4b	B1	B2	B3	II	A	B	A1		A2a	A2a	B	A	B1	B2a	B2b I	B2b II	底部				1	2						
遺構 跡	第1住居跡	1			1							1	1	3	1		2	3		1	6	9		2										
	第2住居跡													2									1											
	第3住居跡				1					1													5	1									2	
遺構 に伴わ ない土 器	第1住居跡			1												1							3											
	第2住居跡	1						1		1				1	1			2	1		1	1	2	1								1		
	第3住居跡																																	
	I、II 片		1	1	1	2											1	1	1		1		2	3								3		
	地区不明										1												1										1	

のできなかった土器の年代について考えてみたい。

坏I-A1b類は体部に稜、屈曲をもつ点でA1a類に共通している。A2類は県内には類例はみられないが、塩釜式と併行するとみられている福島県朝日長者遺跡(原川他:1977)、埼玉県五領遺跡(金井塚・小出:1971、杉原:1971)において類似したものが出土している。これらはすべて底部は丸底である。

A4a、A4b類は、口縁部に稜をもつことや器面調整などに、組み合わせの成立した坏I-A3類に共通する点がみとめられる。また、A4a類に類似したものは仙台市安久東遺跡(仙教委:1976)において、組み合わせの成立した坏I-A1a類に類似したものと共伴している。

B2類は底部がやや外方に張り出す点で、上記のA1b類やA4b類に共通している。B3類は器面調整が刷毛目という点で、組み合わせの成立した甕の特徴に共通している。また、器形で類似するものは、福島県三貫地貝塚田丁場A地点(玉川:1978)において、組み合わせの成立した器台の甕に類似するものと共伴している。

以上から坏I類のA1b、A2、A4a、A4b、B2、B3類はほぼ塩釜式に属するものと考えられる。

坏II-製作に際しロクロを使用し、回転糸切痕をもつことから土師器編年の表杉ノ入式に属するものと考えられる。

壺-A2a類は複合部に縄文、それ以外に丹塗を施す技法などをもつ土器で、本類は県内およびその周辺においては類例はみとめられない。関東地方の遺跡の中で、茨城県三反田遺跡(川崎他:1978)や千葉県東寺山石神遺跡(中村他:1977)のように、五領式土器と本類に類似するものが共伴している例が知られている。したがって、本土器は塩釜式に伴った可能性が強い。なお、分類には含められなかった円形浮文の付いた土器は、東北地方でもいくつか類例がみられ、塩釜式でも古いタイプのものと考えられている(氏家:1972)。

甕I-A類は東海地方を中心に広い分布をもつS字状口縁の甕である(大参:1967)。県内では、小牛田町山前遺跡、亘理町宮前遺跡において塩釜式に伴っている(註)。周辺では、岩手県

永福寺山遺跡(新田：1978)、福島県夕日長者遺跡(原川他：1977)から出土例がある。これらの多くは台付甕の形態をなしている(岩崎：1979)。これから本類も塩釜式に属するものと考えられる。B2b ii類は、土師器編年の栗圀式、国分寺下層式、表杉ノ入式に伴っている例があり、時期を限定することはできない。

甕Ⅱ—製作に際しロクロを使用している点から、表杉ノ入式期に属するものと考えられる。

甕—近似したものは、名取市西野田遺跡(丹羽他：1974)、古川市留沼遺跡(手塚：1980)、南小泉遺跡(仙教委：1978)などから出土している。これらは器面調整で若干ちがいがみられるが、すべて複合口縁の鉢形で単孔式のものである。このような形態の甕は南小泉式にもみられるといわれている(氏家：1957)。しかし本類は器面調整として刷毛目を施している点で上記の組み合わせの甕と共通しており、塩釜式に属する可能性が強い。

(註) 調査担当者の加藤道男、丹羽茂両氏の御教示による。

### ③本遺跡における塩釜式土器について

前項によって、分類された土師器の大半に組み合わせが面とめられた。これらの多くは住居跡から出土したが、中にはⅠ、Ⅱ層から出土したものもある。器種には坏、高坏、器台、壺、甕、徳利形土器がある。量の比較では、共伴資料の最も多かった第1住居跡を例にとると甕が圧倒的に多く、壺がそれに続き、続いて坏、高坏、器台がほぼ同数で並ぶ。また徳利形土器は全体で3点しか出土しておらず、他の器種と比べ極めて少ない。いずれの器種も製作に際しロクロは使用していない。

以下、それぞれの特徴について述べてみる。

坏—体部の内外に稜、屈曲をもつもの(A1a類)と口縁部の内外に稜、屈曲をもつもので(A3類)と内外に稜、屈曲をもたず体部から口縁部にかけて内彎するもの(B1類)がある。これらの底部の明らかなものは平底で丸底に近いものである。中には上げ底のものもある。

器面調整には、内外面とも丁寧にヘラミガキ調整するもの、あるいはそれに近いものと、外面はヘラケズリか、またはその前段階の刷毛目を残し、内面はヘラナデで、比較的器面に凹凸のみられるものがある。前者には丹塗の施されるものがある。

高坏—器形のちがいで2つに分けられた。坏部は体部で屈曲し、脚部が外反し裾で大きく開くもの(A類)と坏部は体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、脚部がわずかに外反し円錐台状に開くもの(B類)である。これらはいずれも脚部に孔をもっている。

器面調整は、脚部内面を除いてヘラミガキである。ともに丹塗が施されている。

器台—全体の器形のわかるものは1点であるが、その他の共伴資料はすべてこの類の1部分と考えることが可能である。脚部に比べ受部が浅く、小さいものである。受部はわずかに内彎

しながら大きく開く。脚部はわずかに外反しながら円錐台状に開いている。受部から脚部に通じる貫通孔をもち、脚部には孔があげられている。

器面調整は、脚部内面以外はヘラミガキである。中には丹塗の施されたものもみられる。

壺—口縁部形態に複合口縁のもの(A類)と単純口縁のもの(B類)がある。前者には頸部に刻目のある突帯のめぐりものとそれのないものがある。体部以下の形態は不明である。後者は、従来、埴と称されてきたものに近似するものである。全体の器形のほぼわかる例は底部は平底で、体部はやや横長の球形をしている。頸部で強く屈曲し、口縁部は直線的に外傾する。外面全体と口縁部内面に丹塗が施されている。

器面調整は外面はヘラミガキのものが多く、その前段階の刷毛目を残すものもみられる。内面は口縁部がヘラミガキ、体部以外はヘラナデのものが多い。

甕—すべて単純口縁のものである。口縁部の器形に、外反するもの(B1類)、外傾するもの(B2類)がある。これらはすべて頸部で屈曲し、体部はほぼ球形をなしている。底部の形態には平底のものと同付のものがあるが割合では平底の方が多い。平底の多くは上げ底をなすものである。B2類には口縁部が粘土の貼り付けにより肥厚する特徴をもつものがある(B2a類)。

器面調整は、外面では口縁部は横ナデ、体部は全面刷毛目かまたは刷毛目→ヘラケズリのものが多い。中には刷毛目→ヘラナデのものもある。底面はヘラケズリやナデが多い。内面では、口縁部は刷毛目→横ナデ、体部はヘラナデのものが多い。

徳利形土器—全体の器形のわかる例は頸部に刻目のある突帯がめぐっている。内外とも器面に凹凸がある。器面調整は内外ともナデである。

前述したように上記の土器群は塩釜式に比定されるものである。次に、塩釜式におけるこれまでの研究史を若干ふり返り、県内では比較的塩釜式の資料に恵まれた名取市西野田遺跡(丹羽他：1974)、古川市留沼遺跡(手塚：1980)の出土土器を中心に比較を行い、塩釜式内での大橋遺跡の土器群の占める位置について検討してみたい。

塩釜式は、氏家氏によって、以前に南小泉式と一括されていたものから、より古式のものとして分離されたものである(氏家：1957)。その特徴として、壺は『口縁部中央外側に稜線及至複合口縁の形成される』、高坏は『脚部に窓を有する』をあげ、さらにそれらに台付土器などが伴うとしている。しかし、その例として紹介された土器は共伴資料ではなく、しかも対象とされた器種が少なく、坏や甕などの器種については明らかではないという点で問題を残した。したがって、この段階では、南小泉式よりも古いタイプのものということで一括された土器はさらに細分される可能性を秘めていたといえる。

その後、塩釜式の確実な共伴資料として大橋遺跡の出土土器が紹介されるに及び(藤沼：1971)、

氏家氏は「南奥羽地域における古式土師器をめぐって」(氏家：1972)の中で、塩釜式の細分を試みている。この中で氏は、大橋遺跡出土資料の住居跡床面出土のものを中心にセットを把握し、次にその中の頸部に突帯をめぐらす壺(本書分類の壺A1類)について分析している。壺ではまず頸部に突帯をめぐらす要素と二重口縁の要素に分けてそれぞれ類例をあげている。さらにこのような壺の他に口縁部外側に円形や縦位の棒状浮文を貼付するものがあるとし、いくつかの理由から塩釜式の中でも後者の浮文系土器が前者より比較的古い方に位置づけることが可能であるとしている。しかし、後者の浮文系土器についてはセット関係が明らかではないとし、今後の課題とした。

円形注文の付いた土器は本遺跡から1点出土しているが、共伴関係は不明であった。確実に遺構に伴い、共伴資料をもつ例としては、福島県朝日長者遺跡第102号住居跡(原川他：1977)と、山形県山形西高校遺跡第4号住居跡(山形県教委：1979)がある。これらからは棒状浮文の付いた複合口縁の壺が出土している。それとともに前者では棒状浮文の付かない複合口縁の壺や坏、高坏が伴っている。坏は本遺跡の坏I-A1a類に近似しているが、高坏では脚部形態などにちがいがみられる。後者では単純口縁の壺、柑、椀が伴っている。単純口縁の壺は、本遺跡の甕の組み合せの成立したものに類似している。柑は本遺跡の坏I-A1a類に類似している。椀は口縁端部に刻目を施すもので、本遺跡にはみられないものである。このように棒状浮文土器に伴う土器と大橋遺跡の土器を比較すると若干のちがいがみとめられた。しかし、これらに相互に比較できる器種が少ない点などから、このちがいが氏家民の指摘された時期差によるものかどうかは、現時点では明らかにはできない。今後、浮文系土器の共伴資料例の増加を待ち、再度、比較、検討を行う必要がある。

その後、西野田遺跡、留沼遺跡の出土資料が公表され、塩釜式の類例が増した。ここで、大橋遺跡と西野田、留沼遺跡の出土資料との比較を行いたい。坏では、大橋遺跡のI-A1a類と類似するものは西野田、留沼両遺跡でも出土しているが、西野田遺跡の例は器面調整が刷毛目ということで、留沼遺跡の例は全体の器形がやや横長という点で若干異なる。I-A3類は西野田遺跡ではみられないが留沼遺跡の例は底部が丸底という点を除けば全体的特徴が類似する。高坏では、西野田、留沼遺跡の例は脚部が中実の柱状部と裾部に分かれる器形のものが多く、すべて脚部に孔をもたない点で、大橋遺跡の高坏と大きく異なっている。器台では、西野田遺跡の例は、受部と脚部がほぼ同大で、脚部に孔をもたない点で異なるが、留沼遺跡の例は大橋遺跡の器台に近いものである。壺では、口縁部が複合口縁をなすものは西野田遺跡にみられる。留沼遺跡では段は明瞭ではないが、わずかに複合口縁をなすものが出土している。しかし、これらには大橋遺跡のように頸部にめぐる突帯はみられない。壺B類に類似するものは西野田、留沼遺跡にもみとめられるが、両遺跡の例は口縁部が大橋遺跡より開きが大きく、口径

と体径がほぼ同じという点でちがいがみられる。甕では全体の器形は三遺跡ともほぼ共通するが、体部の形態と器面調整にちがいがみられる。西野田遺跡の例は体部がやや縦長で、下ぶくらみのものとほぼ球形をなすものの二種類がみられる。器面調整はいずれも刷毛目を主に用いている。また、台付の甕も伴うようである。留沼遺跡の例は、体部がやや縦長で、わずかに下ぶくらみのものと、ほぼ球形をなすものがみられ、前者の方が割合としては多い。また器面調整は主に刷毛目のものと刷毛目の後にヘラケズリやヘラミガキを施すものがあり、後者の方が多いようである。留沼遺跡では台付甕はみとめられない。徳利形土器は、西野田遺跡や留沼遺跡ではみとめられない。なお、大橋遺跡になくて西野田、留沼両遺跡にみとめられるものに甑がある。これはともに複合口縁の鉢形で、留沼遺跡の例は単孔式のものである。

以上のように大橋遺跡と西野田遺跡、留沼遺跡の出土資料には、器形上の特徴、調整技法、器形の組み合わせに共通する点が少なくないことが確認された。しかしまた、細部の形態、調整技法に若干のちがいのあることも指摘できた。そのちがいの大きい点として、高坏の形態と脚部の孔の有無、複合口縁の壺の突帯の有無、甕の体部の形態と器面調整の3点をあげることができる。

さて、丹羽氏等は西野田遺跡の報告の中で、大橋遺跡出土資料との比較、検討を行なっている。そして、これらがともに塩釜式と包括されながらも、西野田遺跡の壺の中に突帯のめぐるものがみられないこと、高坏、器台の脚部に孔のみられないことなどの相違点から、これらが塩釜式の中でも新しい要素として理解できるとしている。しかしまた、それゆえにこれらの土器が塩釜式の土師器の細分された姿であると早急に結論づけることは、器種に欠損するものがあることなどから未だ無理があるとしている。ここでは壺と高坏の特徴に新しい要素をみとめた根拠についてはふれられていないが、これは、大橋遺跡の壺では頸部の突帯が弥生時代からの装飾的要素として残り、西野田遺跡ではそれが失われていること、また、西野田遺跡の高坏では、南小泉式になると孔をもたなくなる(氏家：1957、白鳥・加藤：1974)という点で共通していることなどが、その主な理由だったらしい(註)。さらに、手塚氏は留沼遺跡の報告の中で大橋、西野田遺跡の出土資料との比較、検討を行っている。その結論として、留沼遺跡の出土資料が西野田遺跡のものと同通するものが多く、むしろ西野田遺跡における器種の欠損を補いえる状況を示すとし、西野田遺跡で指摘された塩釜式内での新しい要素の裏づけをより確かなものとしたと述べている。その中で氏は壺や高坏の他に甕における新しい要素について付け加えている。つまり、西野田、留沼遺跡の甕体部のやや縦長で下ぶくらみの形態と留沼遺跡で顕著にみられた外面に刷毛目の後にヘラケズリ、ヘラミガキなどを施すという器面調整は、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡(白鳥・加藤：1974)において「第Ⅱ群土器」(南小泉式)とされた甕の特徴により近いという点である。

以上から大橋遺跡と西野田、留沼遺跡の出土土器の相違点は、主に壺、高坏、甕などで確認されたように後者が前者よりも新しいという時期差による可能性が強いと考えておきたい。

現在、関東地方においても五領式の細分が試みられており(上野：1977、中村他：1977)、上記の壺、高坏、甕のそれぞれの変遷が確かめられている。すなわち、壺の複合口縁では装飾的な要素が次第に消滅する変遷をたどること、高坏の脚部の孔は五領式終末にはみられなくなること、甕では五領式終末になると体部が長胴化し、器面調整はこれまで刷毛目が主だったのがヘラナデ、ヘラケズリが多くなることなどである。

ここでは、これまで塩釜式として一括されてきた土器に、大橋遺跡の出土土器群と西野田、留沼遺跡の出土土器群の2つのグループがあり、上記の分析からそれらが時期差をもつことが指摘できた。しかし、これらのことから塩釜式を細分化するにはさらに共伴関係をなす類似資料の増加と層位(切り合い)的検証が必要であり、また周辺地域(福島、山形、岩手の各県)においても前述のような分析を加えていかなければならない。

その他の、遺構に伴わなかった塩釜式の土器には種々の点で上記の組み合わせの成立した土器群に類似しているものが多い。したがって、これらの多くも上記の土器群とセットをなす可能性が強い。

なお、これらの土器の実年代についてであるが、氏家氏が塩釜式を設定された段階では、文化伝播による速度を考慮に入れ、塩釜式を5世紀前後におくことができるとした(氏家：1957)。しかし、その後、方形周溝墓が発見され、それとの関連で塩釜式の実年代が4世紀代にさかのぼる可能性があるとしている(氏家：1972)。これらから、ここでは大橋遺跡の塩釜式の実年代についてもおおまかに4世紀代に位置づけておく。

(註)丹羽 茂氏の御教示による。

## 2. 土器以外の遺物について

土器以外の遺物には、鉄製品、石器、紡錘車、古銭がある。

鉄製品は、第II章で述べたように現存せず詳細は不明だが、鉄器の断片と考えられた。これは第2住居跡の床面において塩釜式の土器器に共伴していることから、「塩釜式」期のもと考えられる。

石器には遺構に伴うものはみられないが、石鏃などは弥生土器に伴ったものと考えられる。

紡錘車は遺構に伴わなかったが、塩釜式の土器器に伴った可能性が強い。

### 3. 遺構の年代と構造

発見された遺構には竪穴住居跡3軒がある。第1項で検討したように、それぞれの住居跡に伴うと考えられた土器は、土師器編年上「塩釜式」のものと理解された。したがって各住居跡の年代も「塩釜式」期と考えられる。また、各住居跡の共伴土器の比較、検討や他遺跡の出土資料との比較、検討から「塩釜式」の中でも比較的古い時期のものと考えられる。

次に竪穴住居跡の構造をまとめ、この時期の類例と比較、検討してみたい。

平面形はすべて方形を基調とするものであり、全体形のわかる第1住居跡はほぼ正方形、第2住居跡はわずかに長方形であり、ともに隅がやや丸みをもっていた。規模では第1住居跡が他よりも飛び抜けて大きく1辺約9mで、第2、3住居跡は1辺5～6m前後であった。床面では、第1、2住居跡に、貼床がみとめられた。周溝は第1住居跡のみでみとめられた。柱穴は、第1住居跡では支柱穴と考えられたピット4個、添柱の可能性があると考えられたピット4個、第2住居跡では支柱穴と考えられたピット4個がみとめられた。これらはすべて、ほぼ正方形に配置されている。第2住居跡においてそれほど強く焼けた痕跡ではなかったが焼面がみとめられた。貯蔵穴状ピットは、第1、第3住居跡でみとめられた。平面形はともに円形で、規模もほぼ同じものである。

「塩釜式」期の竪穴住居跡は、最近宮城県でも多く発見され始めている。例としては西野田遺跡11軒、留沼遺跡1軒、宇南遺跡4軒(斉藤：1979)、山前遺跡25軒(小牛田町教委：1976)、安久東遺跡2軒、名取市宮下遺跡8軒(名取市教委：1975)、今熊野遺跡3軒(宮教委：1973)、亘理町宮前遺跡23軒(宮教委：1975)などがあげられる。その他に、志波姫町鶴の丸遺跡、瀬峰町大境山遺跡、名取市十三塚遺跡などでも発見されているが詳細については明らかにされていない。ここでは前述の遺跡から発見された住居跡の中で、比較的構造の明らかなるものを対象とする。平面形では、西野田遺跡の3軒が楕円か円形を示す他はすべて方形を基調としてあり、本住居跡と共通する。また、これらには正方形を示すものと長方形を示すもの、隅の丸いものとそうでないものが混在している。規模では、1辺3～7mの中に含まれるものが大半で、その中でも4～6mが最も多い。この点で本遺跡の第2、3住居跡はごく一般的な大きさのものといえる。しかし、第1住居跡のように1辺9m以上のものは極めて少なく、宮下遺跡に1例みとめられるだけにすぎない。床面では、貼床をもつものは宮前遺跡、西野田遺跡などでみとめられている。周溝は本住居跡と同様に、もつものもたないものがあるがもつものが比較的多いようである。柱穴では、支柱穴は4個の例が最も多い点で第1、2住居跡と共通する。しかし、柱穴の全くみとめられない例もある。第1住居跡のように添柱の可能性があると考えられたピットの例はみとめられない。この時期にはまだカマドはみられず、炉を備えている例が多く、次の時期(南小泉式)の住居跡にはカマドを備えるものが宮前遺跡や鴻ノ巣遺跡などで

みとめられている。しかし、炉などの設備をもたない住居跡も少なくない。本住居跡の第1住居跡がそうであり、したがって全てに炉を備えているというわけではない。貯蔵穴状ピットはもつものともたないものがある。貯蔵穴状ピットの平面形では、西野田遺跡は長方形に近いものが多いが、その他の例は円形のものが多い点で本遺跡の第1、3住居跡と共通している。

このように本住居跡は、他遺跡の同時期の住居跡と比較すると基本的にはほぼ共通する構造を示している。また、第1住居跡のように規模の極めて大きい住居跡の存在、同住居跡にみられるような添柱と考えられたピットの存在は、本遺跡の住居跡を特徴づけるものといえる。

## V. ま と め

1. 大橋遺跡は円田盆地のほぼ中央の東側にあり、村田盆地と境する丘陵の西斜面に立地している。今回の調査区は遺跡の西端の、斜面の傾斜が次第に緩やかに移行するあたりにある。
2. 今回の調査で発見された遺構には竪穴住居跡3軒があり、これらの年代はすべて「塩釜式」期である。調査区外にも同時期の遺構の存在が予想される。
3. 出土遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器、陶器、鉄製品、石器、紡錘車、古銭がある。
  - ・縄文土器は1点のみで、縄文時代中期末から後期初頭にかけてのものである。弥生土器は、主に円田式と天王山式が出土した。石鏃などの石器はこの弥生土器に伴うものであろう。
  - ・土師器には、塩釜式のものと同表杉ノ入式があり、前者がその大半を占める。特に塩釜式の土師器の多くは共伴関係のもので、しかも組み合わせの器種が揃っているため、土師器編年の基準資料の1つになりうる。表杉ノ入式期の遺構は発見されなかった。
  - ・その他の出土土器の所属年代は不明である。
  - ・鉄製品は、塩釜式の土師器と共伴している。用途は不明であるが、この時期の鉄製品の普及を考える上で重要である。また、紡錘車も塩釜式の土師器に伴った可能性が強い。

## 〈引用・参考文献〉

- 経済企画庁総合開発局（1972）：『土地分類図』
- 宮城県高等学校理科研究会地学部会（1975）：「宮城県の地質案内」
- 中川・小川・鈴木（1960）：「仙台付近の第四系および地形（1）」『第四紀研究』Vol. 1 No. 6
- 古谷 尊彦（1963）：「白石川、松川の河岸段丘について」『東北地理』15-1
- 白石市（1976）：「考古資料篇」『白石市史』別巻
- 〃（1979）：「通史篇」『白石市史』第1巻
- 林・藤沼（1971）：「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（刈田郡蔵王町地区）—二屋敷遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集
- 宮城県教育委員会（1978）：「宮城県遺跡地名表改訂版」
- 宮城県教育委員会（1968）：「埋蔵文化財緊急調査概報—東北縦貫自動車道遺跡—」『宮城県文化財調査報告書』第17集
- 藤沼 邦彦（1971）：「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（刈田郡蔵王町地区）大橋遺跡」：『宮城県文化財調査報告書』第24集
- 伊東 信雄（1957）：「古代史」『宮城県史』第1巻
- 藤沼 邦彦（1971）：「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（刈田郡蔵王町地区）—大山遺跡」子宮城県文化財調査報告書』第24集
- 斉藤・真山（1978）：「北沢遺跡発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第56集
- 阿部・千葉（1980）：「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ—一台ノ山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第62集
- 伊東 信雄（1955）：「東北」『日本考古学講座』第4巻
- 坪井 清足（1953）：「福島県天王山遺跡の弥生式土器—東日本弥生式文化の性格—」『史林』第36巻第1号
- 宮城県教育委員会（1965）：「埋蔵文化財緊急発掘調査概報（崎山囲洞窟遺跡）」『宮城県文化財調査報告書』第8集
- 中村 五郎（1976）：「東北地方南部の弥生式土器編集」『東北考古学の諸問題』
- 丹羽 茂他（1974）：「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ—西野田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第35集
- 佐藤 信行（1972）：「宮城県古川市3丁目遺跡の弥生土器」『北海道考古学』8
- 興野 義一（1978）：「宮城県大穴遺跡の弥生土器」『北奥古代文化』第10号
- 山内 清男（1967）：『日本先史土器図譜』
- 志間 泰治（1971）：『驢沼遺跡』
- 杉原 莊介（1936）：「下野野沢遺跡および陸前栴形囲塚出土の弥生式土器の位置について」『考古学』第7巻第8号
- 伊東 信雄他（1971）：『郡山市福楽沢遺跡発掘調査報告書』郡山市教育委員会
- 横尾 秋子（1973）：「米沢市堂森遺跡出土の弥生式土器」『最上川流域の歴史と文化』
- 馬目 順一（1978）：「入門講座・弥生土器—南東北4—」『考古学ジャーナル』No. 156

- 氏家 和典 (1957) : 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 原川 雄二他(1977) : 『夕日長者・朝日長老遺跡調査概報』いわき市教育委員会
- 金井塚・小出 (1971) : 「シンポジウム五領式土器について」『台地研究』No. 19
- 杉原 莊介 (1971) : 「五領遺跡出土の土器」『土師式土器集成』本編1
- 仙台市教育委員会 (1976) : 「仙台中田町安久東遺跡発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第10集
- 玉川 一郎(1978) : 「三貫地一田丁場A地点調査報告」『新地町埋蔵文化財調査報告書』
- 川崎 純徳他 (1978) : 「三反田遺跡」茨城県勝田市教育委員会
- 中村 恵次他(1977) : 『東寺山石神遺跡』
- 氏家 和典 (1972) : 「南奥羽地域における古式土師器をめぐって」『北奥古代文化』第4号
- 大参 義一 (1967) : 「S字状口縁土師寺」『いちのみや考古』No. 13
- 新田 賢 (1978) : 「高山遺跡」『岩手県水沢市文化財報告書』第1集
- 岩崎 卓也 (1979) : 「東日本の土師器」『世界陶磁全集』2日本古代
- 手塚 均 (1980) : 「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ一留沼遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第65集
- 仙台市教育委員会 (1978) : 「南小泉遺跡一範囲確認調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第13集
- 山形県教育委員会 (1979) : 「山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書』第17集
- 白鳥・加藤 (1974) : 「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ一岩切鴻ノ巣遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第35集
- 上野 純司 (1977) : 「南関東における古式編年試論」『史観』9
- 小牛田町教育委員会 (1976) : 『山前遺跡』
- 斉藤 吉弘 (1979) : 「宇南遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第59集
- 名取市教育委員会 (1975) : 「宮下遺跡」『名取市文化財調査報告書』第1集
- 宮城県教育委員会 (1973) : 「金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第33集
- “ (1975) : 「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第38集





# 写 真 图 版

遺跡遠景  
(南から)



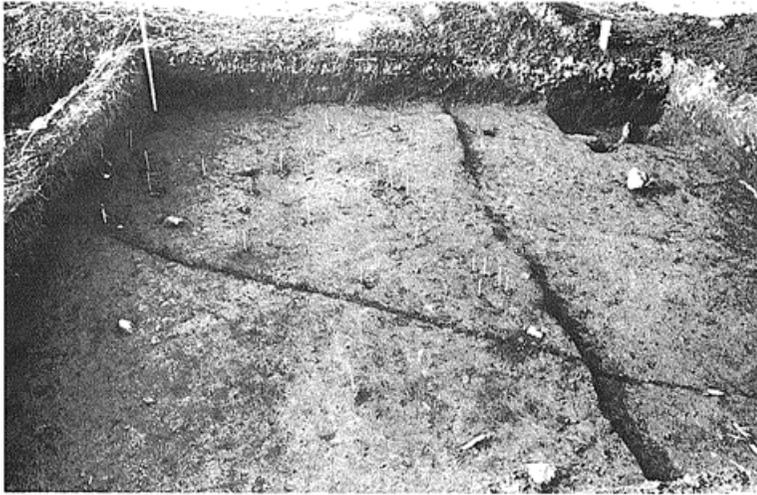
第1住居跡  
(北から)



第1住居跡(上)と  
第2住居跡(下)  
(西から)



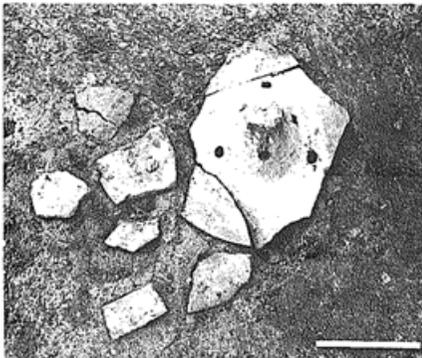
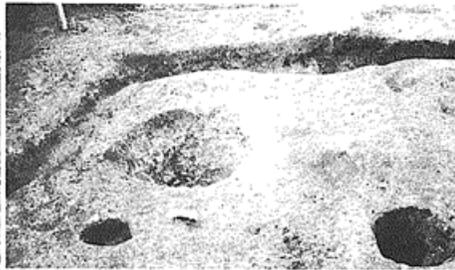
図版 1



第3住居跡  
(南から)

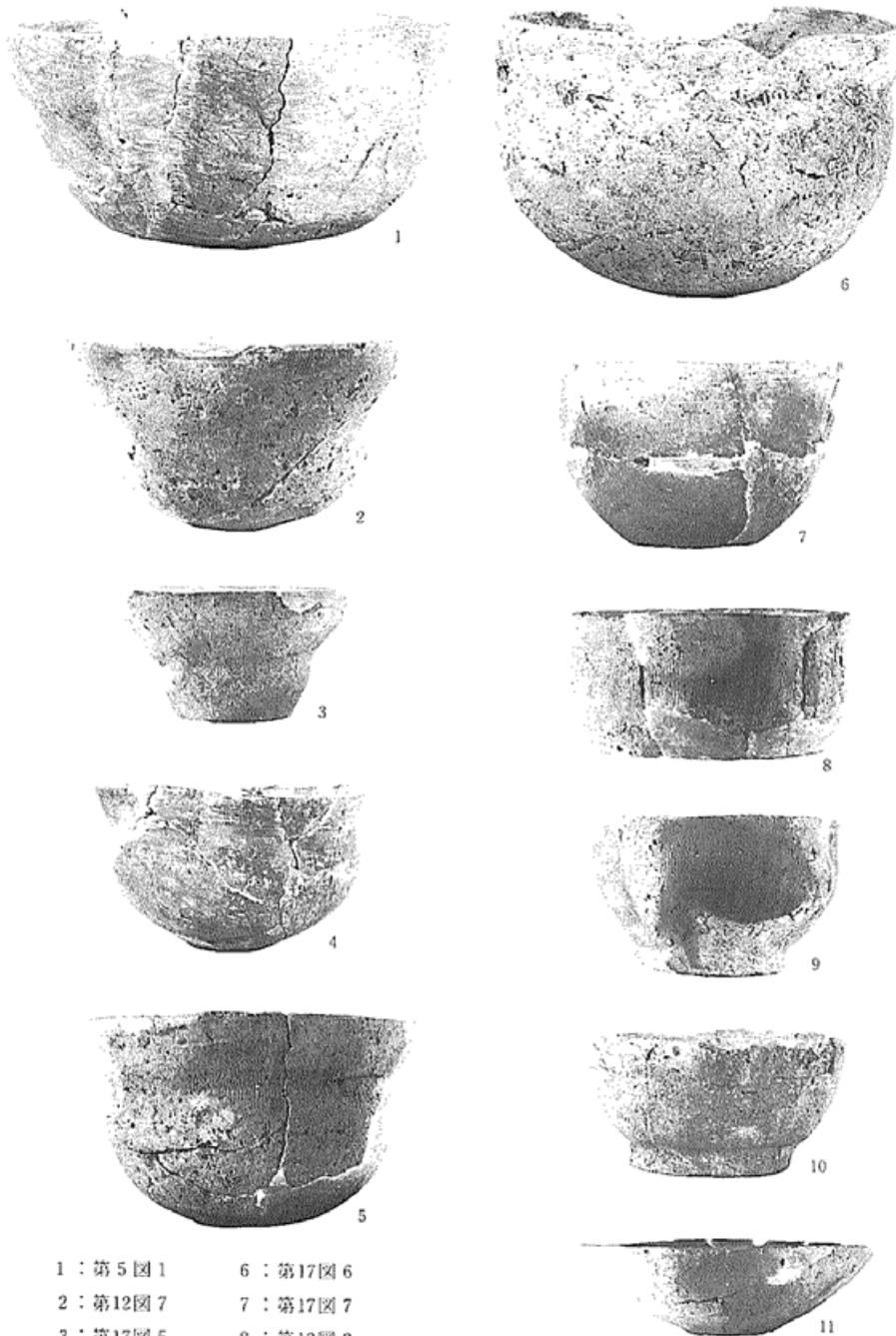


右：第1住居跡  
貯蔵穴状ビット付近  
左：第1住居跡周溝



第1住居跡  
遺物出土状況

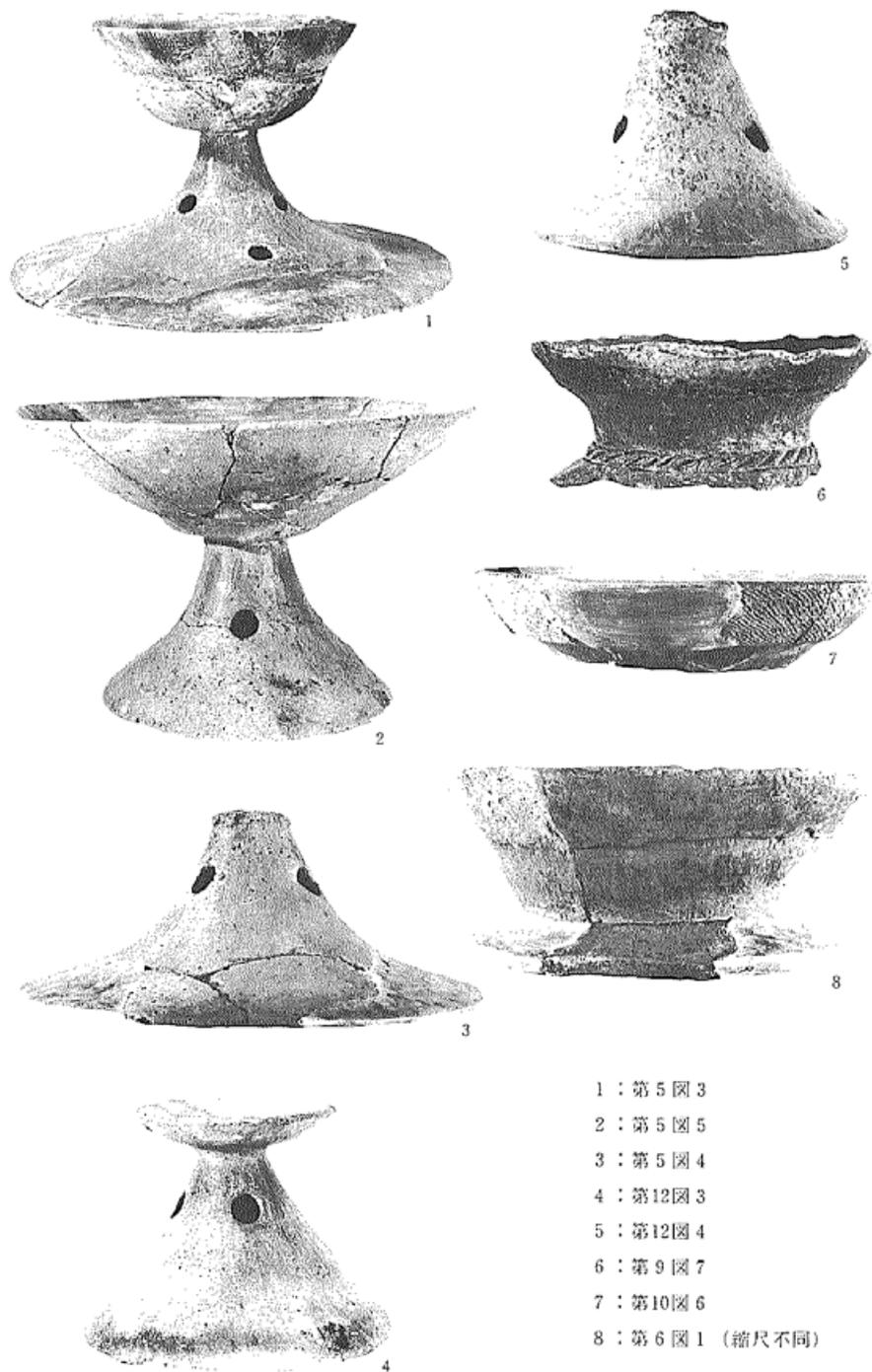
図版2



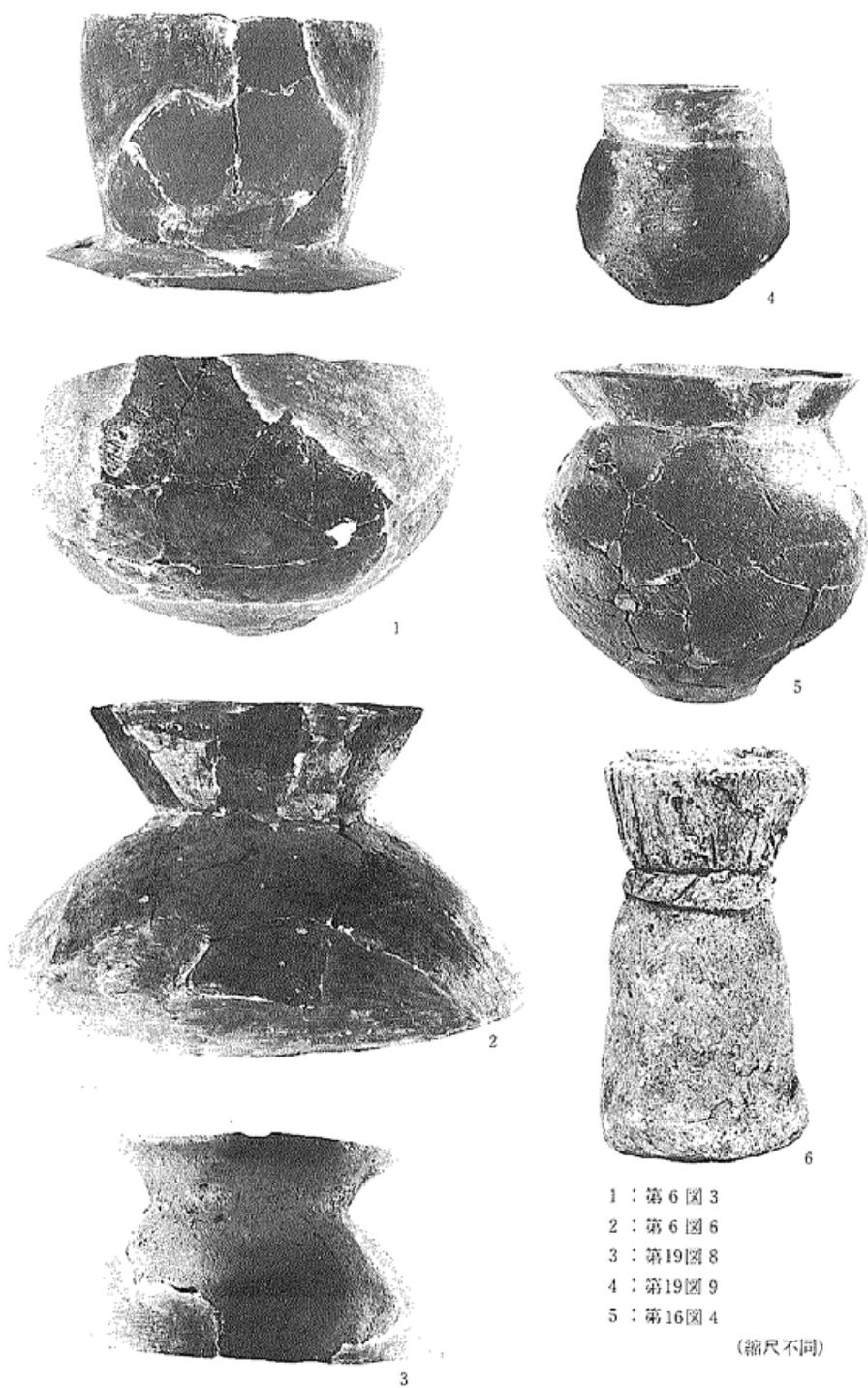
- 1 : 第 5 图 1      6 : 第 17 图 6  
 2 : 第 12 图 7      7 : 第 17 图 7  
 3 : 第 17 图 5      8 : 第 13 图 2  
 4 : 第 16 图 1      9 : 第 12 图 8  
 5 : 第 17 图 3      10 : 第 12 图 9

11 : 第 17 图 1  
 (缩尺不同)

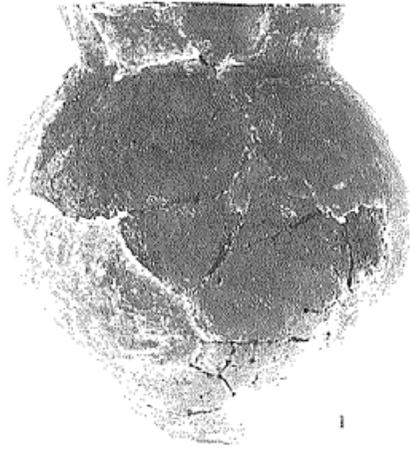
图版 3



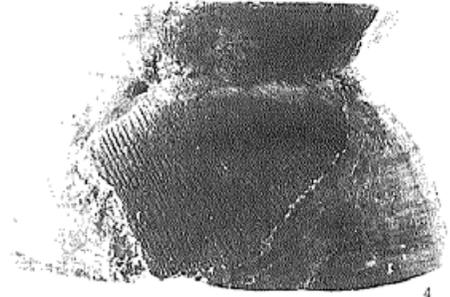
图版 4



圖版5



1



4



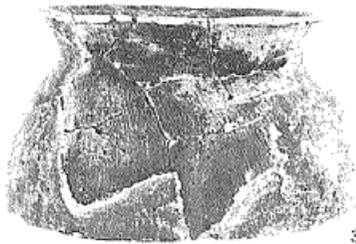
2



5



6



3

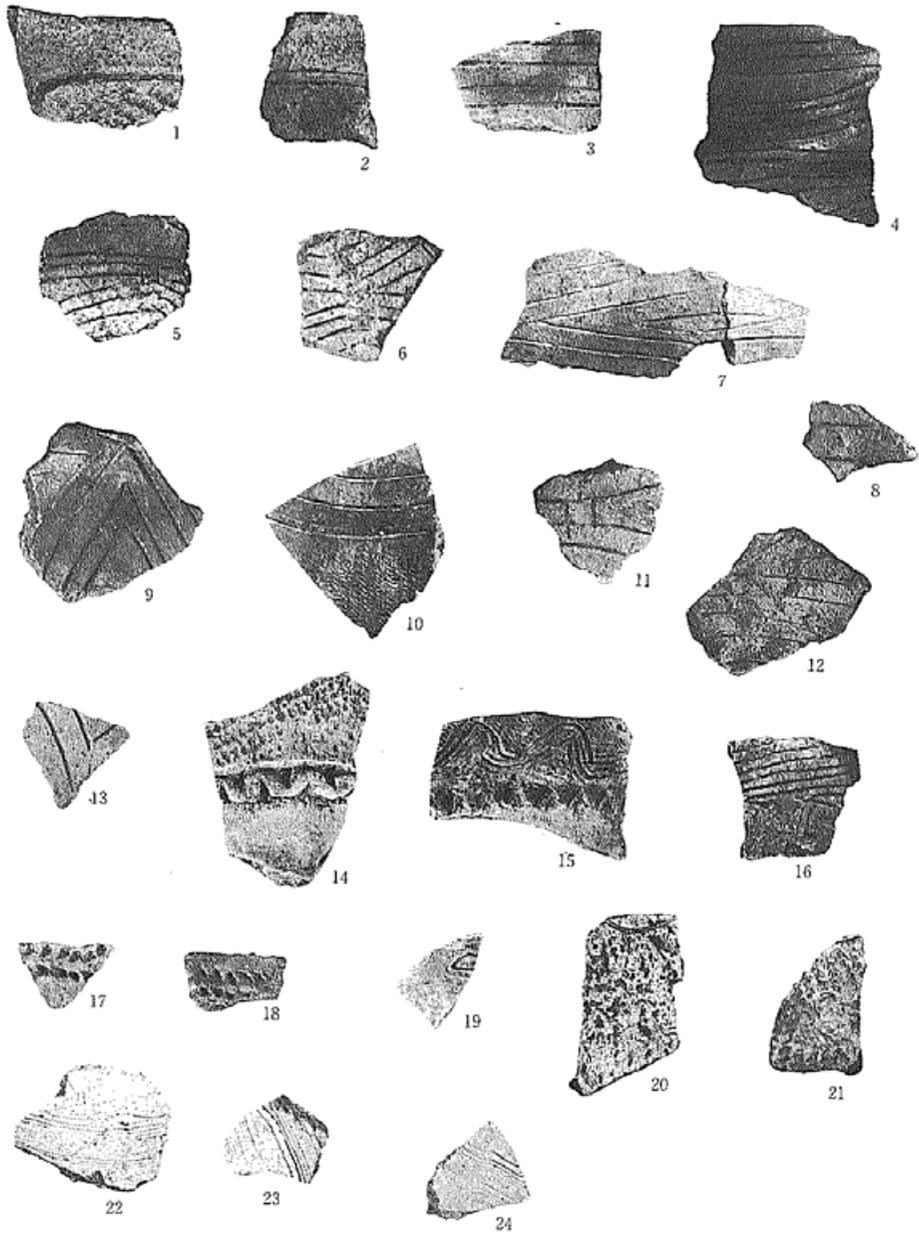


7

1 : 第14図 2  
2 : 第7図 7  
3 : 第12図 5  
4 : 第14図 1

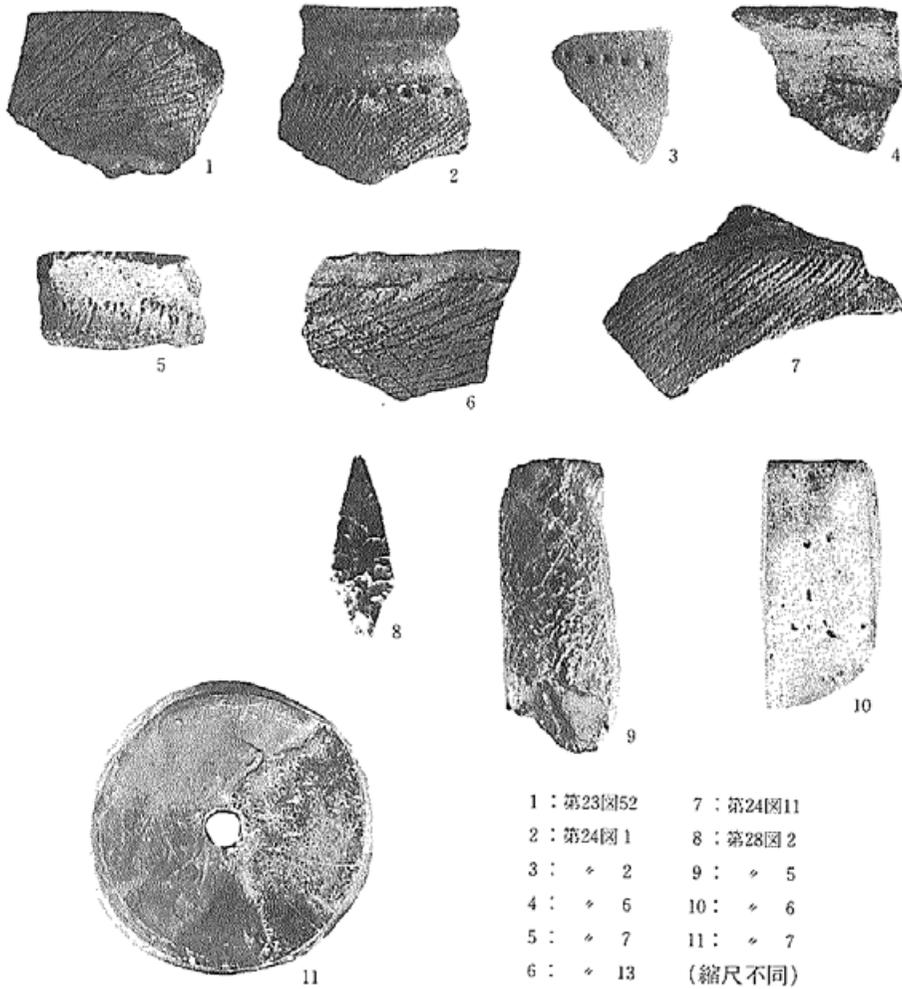
5 : 第10図 7  
6 : 第19図 4  
7 : 第22図 4 } 綫痕あり  
(縮尺不同)

図版6



1 : 第23图 1      8 : 第23图19      15 : 第23图32      20 : 第23图47  
 2 : \* 2      9 : \* 15      16 : \* 38      21 : \* 46  
 3 : \* 5      10 : \* 16      17 : \* 39      22 : \* 48  
 4 : \* 8      11 : \* 17      18 : \* 40      23 : \* 49  
 5 : \* 9      12 : \* 20      19 : \* 42      24 : \* 50  
 6 : \* 12      13 : \* 18  
 7 : \* 13      14 : \* 27      (縮尺不同)

图版 7



图版8